
SOAREYE

新殿 翔

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

SOAREYE

【Nコード】

N9368R

【作者名】

新殿 翔

【あらすじ】

人類は四次元空間からティアマト・エネルギーと呼ばれるエネルギーの搾取を可能とし、エネルギーの充実によって人口の爆発的増加が起きた。

地上の居住空間は既に限界を迎えていた。そこで発足したプロジェクトがエレアス計画。空の大地を築くという壮大な計画だった。エレアスは次々に建造された。そんなある日のこと。

人類は火星にも人類の居住空間を設けるべく、火星の探査を開始した。そこで、とある細菌が発見される。

その細菌は人に感染するとその体内で急激に成長、そのまま別の生命体として人の身体を食い破って誕生するというものだった。それにより、初期の探査団が全員死亡することとなった。この生命体——アニルの繁殖能力は強く、人類は火星への居住を諦めざるをえなかった。だが、それだけではなかったのだ。

アニルは火星を飛び出して、宇宙空間で生命活動を行うことが出来ることが判明する。いくつものエレアスがアニルの群れの襲撃を受け大気圏へと落下してしまっていた。

それに対して、人類は人型兵器ソアレイを作り出すことでアニル対策に乗り出した。

これは、そんな世界の物語。

新人賞に送って落ちた作品で、作者が「もう使いまわしとか未練がましいことしない！」という区切りのために載せるものです。一応の完結はしています！ 暇つぶし程度にどうぞ！

OPENING (前書き)

そういえばこのヒロインも悠希だ。

OPENING

学校に向かう準備をしていると、モバイルフォンが電話の着信音を鳴り響かせた。

手にとって、相手を確認。

そして、電話に出ることなく、着信を切断する。

電話に出るまでもない。

相手が相手だ。連絡の内容なんて分かり切っていた。

悠希^{ゆき}は学校指定のブレザージャケットをベッドの上に脱ぎ捨てると、代わりに黒いロングコートを羽織った。

そのまま、モバイルフォンといくつかの私物だけをポケットにしまいこんで、自室を出る。

部屋のドアを開けると、悠希の目の間に小さな人影が飛び込んできた。

「あ、お姉ちゃん」

悠希の従姉妹の少女。

その小さな目が、彼女を見上げる。

「……おはよう」

小さく、悠希が朝の挨拶を口にする。

「うん、おはよう！」

とても友好的とは言えない悠希の挨拶に、けれどその少女は溢れんばかりの笑顔で応えた。

朝からよくそんな風に笑えるものだ、と感心する。

——ただ、私が笑わないだけかもしれないけれど。

まあそんなことはどうでもいい、と悠希はその思考をあつさりと放棄した。

「お姉ちゃん、一緒に朝ご飯食べよ？」

少女にお姉ちゃんと呼ばれ、悠希はなんとなく視線を逸らしてしまっ

「悪いわね。用事があるの」

言って、悠希はその小さな身体の脇を足早に通り過ぎる。

「あ……」

なにか背後で微かな声が聞こえたけれど、彼女は振り返らない。

振り返っても、何を言えいいのかも分からないから。

リビングに入ると、悠希はテーブルに朝食を並べている叔母の桜さくらを見つけた。

「おはようございます、桜さん」
「あら。おはよう」

桜が悠希を見て……軽く首を傾げた。

「その格好……また、なのかしら？」
「……はい」

のんびりとした、けれどどこか少し困ったような桜の声に、悠希が小さく頷く。

「朝食を食べる時間はある？」

「いえ。すみません、用意してもらったのに……」

気まずそうに首を横に振るう悠希に桜がそつと歩み寄り、彼女の頬に手を添えた。

「いいのよ。そんなことは」

頬から伝わる優しい温もりに、悠希は後ろめたさ覚える。

「それよりも、気を付けてね。怪我なんてしないでちょうだい？」

「それは、もちろんです」

ただでさえ既に大きな心配をさせているのに、これ以上迷惑をかけるわけにはいかない。

とにかく無事に過ぐす。

それは、悠希が自分に課した決めごと。

両親を亡くした悠希を引き取って育ててくれた叔母に恩どころか、仇ばかり返している彼女の、最低限の決めごと。

せめて、この最低限のラインは越えないでいたいと彼女は思う。

「それじゃあ、本当に、気を付けて行つてらっしゃい」
「はい……行つてきます」

そのまま悠希は身を翻して、玄関で靴を履いて、家を出る。

外に出て、視線を上げると、広い青空が視界に飛び込んできた。

けれどその青空の色や輝きは、全て人工の造りもの。

本物の空よりも、さらに高い所にある偽物の空だ。

しかし偽物でも、悠希からして見れば、それは本物と見分けがつかないくらいに精巧に出来ている。

悠希は本物の空というものを殆ど見たことがないので、単純にそのせいで見分けがつかないだけなのかもしれないが。

+

地球の外。暗い宇宙空間に浮かぶ巨大な完全循環型居住船——通称、エレアス。

全二四一隻あるエレアスの中でも三番目に巨大な、日本が製造したエレアス？天都？。

それが、悠希達の暮らす場所だった。

二十年前。つまり第四次元からティアマト・エネルギーと呼ばれる新たなエネルギーを搾取する技術が確立されてから五年後に、この？天都？は地上を飛び立った。

空の大地。

地球の人口増加に伴い、それによる居住空間の不足を補う為に作られたものこそがこれらエレアスである。

ティアマト・エネルギーの運用が始まり、それに伴って宙空居住区域建造による人口問題解消が提案、実現されたことで、当時はエレアス建造ラッシュが起こり、多くのエレアスが打ち上げられた。

人口増加による問題は、あっという間に解決を見せた。

だが人類と言うのは、強欲なもの。

エレアスによる人口問題が解決した後、人類はさらに火星の開拓計画を立てた。名目の上では、これから増えていく人類の為に先手として居住空間を増やしておく、などというものだったが、実際は富裕層に向けて売り出す別荘地作りだった。

様々な国や企業が、火星開拓に乗り出していた。

そんな欲が、何かの怒りに触れたのか。

その事件は、開拓の一年目に起きた。

火星のある地点で、巨大な地下空洞が発見された。

そこには、とある細菌が眠っていたのだ。

——火星に細菌の存在。

普通ならば世紀の大発見となるところだが、今回はそんな余裕のあることを言っではいられなかった。

何故なら……そこで働いていた作業員二五一名が、全員その細菌に感染してしまったから。

作業員達にはすぐさま治療が施された……が、現代医学では、その細菌に対応することは、不可能だった。

細菌は体内で急速に増殖、感染から数日で感染者の細胞を取り込んで、体内にガン細胞のような形状で定着し、そこから僅かな時間で異常増殖。

そうして……一個体の生命体となる。

人間の腹を食い破って、それは這い出てきた。

端的に言って、その菌は人間を繁殖床として孵化する卵のようなものだったのだ。

それによって生まれる生物は、性質の悪いことに極めて強靱な肉体を持っていた。

作業員達から孵化した生命体は、火星に設置された簡易生活施設を瞬く間に支配し、そこで——交配を開始した。

細菌から孵化した生命体——これをアニルと後に呼称するようになる——には、人間と同じように生殖活動を行う機能が備わっていたのだ。それも、その繁殖速度は人間の比ではなく、一週間放置すれば、一組のアニルがネズミ算式に増加していくのである。

結果は言うまでもない。

火星は、一ヶ月もしないうちにアニルの星となった。火星は別荘地どころか、人類を脅かす生物種の母星に変貌したのだ。

バベルの塔は、その高さを求めた人の業に怒った神によって雷を落とされ崩されたという。

この時も、また同じ。

形は違えども、欲によって高みを求めた人類に、悲惨な災厄がもたらされたのだ。

悪いことはさらに続く。

アニルがただの生命体ならば、火星が支配されて終わりだ。

近づかなければ、地球やエレアスに害が及ぶことはない。

当時の政治家達もそう考え、火星を諦めることで事態に対処する方針を定めていた。

だが……そうして火星を捨て、火星で起きた悲劇の傷跡が徐々に人々の生活の中で薄らいでいった、ある日。

アニルが、宇宙空間を単独で飛行する姿が確認された。アニルは、宇宙空間での活動が可能だったのだ。

その後、すぐに事態は一変した。

地球の周囲に浮かぶいくつものエレアス。その中でも火星に近しいエレアスが、アニルの群れに襲撃されたのである。

突如としてアニルが襲撃行動に出たのは、アニルの個体数が一定以上の数を超えたから、という見解が一般的だが、真相は分からないし、確かめようもない。

ともかく、事態の中で複数のエレアスが落ちることになった。大小合わせて十六。眩暈がするほどの人間が宇宙に散り、地球の引力に引かれ大気圏で焼失した。しかも燃え尽きなかったエレアスの破片は地球に降り注ぎ、それも決して少なくない被害を出す。

アニルへの対処は世界的急務となった。

ティアマト・エネルギーの発見により物資やエネルギーなどの様々な問題が解決されていた人類が結束するのは、思った以上に簡単なことだった。

未知の敵が現れた、というのも大きな要因の一つだったのだろう。

結束した世界は対アニルの為の連合軍を設立し、各国の軍事力のほぼ全てをここに集結させた。

——そうして、今。

現在もまだ、人類とアニルの戦いは続いていた。

人類は高機動人型兵器ソアレイを開発し、アニルから地球を、エ
レアスを防衛している。

ENCOUNTER

黒い宇宙が広がっていた。

悠希は暗闇に浮かんで、ぼんやりとそれを眺めていた。

正確には、悠希が浮かんでいるわけではない。

彼女が搭乗している白銀のソアレイ？スパーサー？が宇宙空間に浮かんでいるのだ。

悠希はその機体の視界を、電気信号による感覚共有によって、受け取っているにすぎない。

彼女自身の視覚が認識しているコックピット内の光景に重ね合わせられるように、機体外部から取り込まれる上下左右三六〇度の光景が脳に叩き込まれる。

ソアレイに搭乗した経験が浅ければ、激しい頭痛と吐き気や混乱で、身動きすることすらままならない——どころか情報量の多さから気絶するほどのものだろうが、悠希はそれにもすっかり慣れて、今ではその不自然な視覚を、ひどく自然に受け止めることが出来ていた。

——ゆっくりと、深呼吸。

コックピットにいくつもの仮想モニターが浮かび上がる、

そこに流れてくる情報群を読み取って、それを頭の中で一瞬で整

理する。

戦場の状況。

自分の役割。

作戦の流れ。

それらをしっかりと頭に叩き込む。

それから、感触を確かめるように機体の拳を握っては開いた。もちろん、コックピット内の悠希の身体はびくりとも動いていない。

自分の手を動かすかのように、スパーサーは悠希の意のままに動く。

これもまた、ソアレイの搭乗に慣れていなければ機体の動きに身体の動きがつかれてしまったりする。

スパーサーの動作を、一から十まで綿密に確認していく。

腕部。

鋭い爪がついた手は左右それぞれにロングブレードを持ち、流線型を描く下膊部とその肘辺りからは、鋭いブレードが突き出すように生えていた。

上膊部も異常はなく、ショートブレードが納められた肩も良好な状態。

脚部。

脚は爪先にあたる先端部がブレードになっており、それが膝まで続き、そこで突き出すような形になっている。

大腿部にはナイフが左右に一本ずつ収納されており、いつでも取り出せるようになっていいる。

さらに腰には左右にミドルブレードとロングブレードが一組ずつ――つまり計四本のブレードが差してある。

関節部は滑らかな動き。

動力部や制御系統もきっちりと整備されていた。

カメラは悠希が今もこうして感覚共有している通り、無事に稼働している。

オールグリーン。

確認を終えて、スパーサーがブレードを握る手に力を込める。

――数は約三百。第一形態から第三形態の混成。スパーサーは先行し、それを攪乱する。

仮想モニターを通して伝わってきた指令は要約すればそれだけだ。

その時、新たに現れた仮想モニターに映像が映し出された。

宇宙に浮かぶ、巨大な影。

それは小さな影が一つ一つ集まって出来た、巨大な影だ。

そして、その正体こそ……アニル。

その外見は、まさに異形。各個がそれぞれ微妙に違う形をしてはいるものの、そのほとんどが蟲と形容すべき形状をしていた。外殻に覆われた体は光沢をもち、羽を高速で振動させ、その羽から特殊な重力を発生させながら、こちらに向かってくる。

その光景に、悠希は吐き気を覚えた。

——蟲が。気持ち悪い。

言い知れない悪寒が彼女の身体中を巡った。

恐ろしいわけでも、不気味なわけでもない。

純粹な、嫌悪感だ。

それを振り払うように……スパーサーが駆動音を唸らせた。

機体から、銀色の光が溢れだす。

ティアマト・エネルギー運用に際する発光現象だ。

それは四次元空間から取り出せる高次エネルギー。もちろん、出力に制限はあるものの、動力中枢であるアプス・コアさえ無事な限り、半永久的にその供給は続く。

加えて、このエネルギーには一つの特徴がある。

特定の人間の身体を介することで、その個々人によって異なる特殊な現象を発動させるのだ。

それは？スキル”と呼ばれている。

機体から多量に溢れる銀色の光は、そのスキル発動の予兆。

悠希の脳を、情報の嵐が包み込む。

彼女のスキルは、四次元世界を媒介とした移動。三次元とは異なる四次元に機体を放り込み、そこであらゆる物理法則を無視して座標を動かし、そこからまた三次元に戻って来るといったもの。

時間にすれば、それは一瞬のことで、彼女自身ですらほとんど認識出来ないほどだ。というより、実際に全くと言っていいほどに認識出来ていない。

悠希はこれらの動作を、ほぼ無自覚に、無意識に行っているからだ。原理も何も知らないのにも関わらず。

とりあえず、彼女のスキルを端的に言つと、どういふことが。

銀の光が散る。

微かなノイズ。

次の瞬間。

悠希は——スパーサーは、アニルの群れの真ん中に存在していた。

瞬間転位。

それこそが、彼女が持つスキルの名であり、その能力を的確に示した呼称だ。

距離を無にする能力。

それこそ、悠希が最強と呼ばれる所以であり、従来の機体と比べると異質なほどにスパーサーが近距離に特化している理由である。

あまりに強力で、桁違いな、無慈悲の力。

アニルの群れの真ん中に転位した悠希は、まず目の前にいた、こちらに背中を向けているアニルの身体をロングブレードで両断する。切断面は鉋物じみた鈍い光沢を放っていて、血液などは出ない。

感覚共有に触覚の共有が含まれていなくてよかった、と彼女は思う。

もしもそんなものまで共有されていたら、アニルを切った感触を実際に感じるところだ。

そんなのは絶対に御免だった。

蟲を斬る感触なんて。

そんなことを考えながら、悠希は背後で腕を振り上げるアニルの顔面に振り向きざまにブレードを突き立てる。

びくり、とアニルの巨体が一度痙攣するように動き、そして沈黙。

彼女はブレードを引き抜くと、再びスキルを発動させた。

転位するのは、他より二回りほど巨大なアニルの背後。

第三形態のアニルだ。

アニルは生まれた直後の幼生から短期間で第一形態に変体し、そこから数ヶ月で第二形態、第三形態と大きく成長していく。

普通その第三形態は簡単には斃せるものではないのだが、最強たる悠希の前ではそんな常識は通用しない。

転位と同時にブレードを第三形態の頸部——甲殻と甲殻の隙間を狙うように振るい、そこを切断。アニルの巨体が活動を停止する。

そうして転位。

斬撃、転位、斬撃、転位、斬撃、転位、斬撃、転位、斬撃、転位、……！

ひたすらにそれを繰り返す。

無数のアニルを斃すうちに、ブレードに灰色の気味の悪い光沢を持つ肉片がこびりつく。

虚空中で剣を払い、その肉片を振り飛ばした。

一方的な暴力。

悠希のスキルは、よくそんなふうに形容される。

彼女自身、その通りだと思っている。

瞬間転位というスキルは、あまりに反則だから。

だが、それでいい。

それがいいのだ。

何故なら、この力があれば彼女は……戦えるから。

次々にアニルの死骸を積み上げる。

アニルの群れは、混乱し、散り散りになっていた。

もともとさして知能が高い生物ではない。集まったところをつつけば崩れるのは当然のこと。

そこに、ようやく軍のソアレイ部隊がやってきた。

悠希が全体の二割ほどのアニルを始末してしまった頃に、やっとだ。

まったく、とろくさい。

溜息をついて、悠希はスパーサーをひとまず停めて、休ませる。

あとは、軍の仕事だ。悠希の残りの役目は、アニルを攪乱させるところまで。この時点でも大分サービスをきかせている。

まあ、いつものことなのだが……。

不意にスパーサーの脇を通り過ぎようとしたアニルを、悠希は無造作に切り払った。

残骸が宙を舞う。

……さて。私は、戻ろうかしらね。

悠希がスキルを発動させて天都へと帰還しようとした——その瞬間。

スパーサーのコックピットに、緊急事態を知らせる赤い仮想モニターが出現した。

——え？

闇をアニルごと切り裂く幾条もの銀色。

粒子砲の輝きだ。

咄嗟に、悠希はそれが放たれた方向に視線を向けた。

そこにあつたのは……巨大。

巨大な……航空戦艦だった。

なに、これ……。

仮想モニターに、データベース上に該当艦無し、という文字が表示される。

所属不明の未確認戦艦が、どうしてこんなところにあるのか。

天都の観測に引っかけられることもなく、スパーサーのレーダーが反応することもなく、悠希が今の今まで視認すら出来ていなかった。

まるで幽霊かなにかのように、その戦艦は突如として姿を現したのだ。

『——ご機嫌どうかな、諸君。こちらは無国籍エレアス、エデン所属の駆逐艦？アルトオブリガード？だ』

突如、音声のみの通信チャンネルが開かれ、女性の声が聞こえた。

恐らくは、あの戦艦から発信されているものだろう。

……エデン？

その名前を、悠希は聞いた覚えがあった。

どこの国家にも属さない、ある大富豪が個人で建造したソアレイ。

しかしそれは……。

『ただの噂じゃ、なかったの？』

コックピットの中、悠希が呟く。

エレアスを建造するには莫大な資金が必要になる。いくら大富豪とはいえ、個人で払えるような額ではない。

それに加え、エデンなどというエレアスの実在は、これまで一度も確認されたことがなかった。

どこにでもあるような、都市伝説じみた噂。

悠希は、てっきりそう思っていた。

しかし目の前に、その噂のエレアスに所属するという謎の戦艦が現れた。

困惑する悠希の視線の先で、戦艦——アルトオブリガードに動きがあった。

DEFEAT

『唐突ではあるが、面倒な口上は省略して、こちらのやりたいことだけやらせてもらおうでしょう』

アルトオブリガードの上部にあるハッチが開く。

そこから何かが飛び出した。

『とりあえずは、誰も動かないのがオススメだ。動けば、身の安全は保障しかねる』

銀色の光が尾を引いて、それがアニルの群れの中に突っ込んだ。かと思うと、その銀の光に隣接したアニルが次々の光に貫かれていく。

アニルを貫いて行くのは、ビームライフル。

アルトオブリガードから飛び出したのは、一機のソアレイだ。

それも、スキルを発動している。

悠希は、その機体に目を奪われた。

速い………！

恐ろしい速度で、そのソアレイは黒い宙を駆け抜ける。

スパーサーのカメラがそのソアレイの姿を拡大し、映像を悠希の視覚に投射する。

奇妙なソアレイだった。

基本的には、その形状は一般的なソアレイから逸脱するものではない。漆黒にカラーリングされた胴体と頭部、腕部と脚部。多少無骨ではあるが、それでも普通と言える。

しかし一点、明らかに異常な部位があった。

肩。

まるで腕を覆うように、左右の肩にそれぞれ三枚の巨大なプレートが付属しているのだ。

そのソアレイが、次々と信じられない速度でアニルを撃ち落とし、ていく。

実に秒間三体。

出鱈目、と表現するのが最も相応しかった。

規格外な機体の速度に、恐ろしく正確な射撃。

あんな機体を人間がまともに制御できるものだろうか。そんな疑問が、悠希の頭に浮かぶ。

いつそそれは、芸術的とすら思える戦いだった。踊るように機体が宇宙を駆け、銀の線が無数にその舞台を飾る。

『本当に、気を付けたまえよ？』

はっとした。

その声に、悠希は自分が目の前の戦闘に見入っていたことに気付いた。

直後。

数十にも及ぶ銀光の槍が降り注ぎ、辺りのアニルを次々に貫いていく。

見上げれば、アルトオブリガードの艦体の各所から砲身が突き出し、銀色の輝きを銃口の奥に蓄えていた。

噓……あんな大量の粒子砲を、同時に発射するだなんて。

信じ難い目の前の光景に驚愕する悠希の視界に、再度銀の槍が降り注いだ。

アニルが次々に撃ち落とされていく。

二回の掃射で、アニルの数は残り僅かとなっていた。

それでいて、軍のソアレイには僅かな被害もないことから、アル

トオブリガードという戦艦の砲撃の精密さがうかがえる。

残りのアニルは、あっという間に黒いソアレイによって撃ち落とされてしまった。

アルトオブリガードが出現して、ほんの僅かの間にアニルは全滅させられた。

スパーサーを圧倒的と言うのなら、それは正に、絶対的な殲滅。

悠希の頬が引き攣る。

黒いソアレイは、アルトオブリガードの船首で動きを停めた。

『御苦労だったな、？デイズイ』

デイズイ。それが、あのソアレイの名。

一体何者なのか。

その場の誰もが、困惑していた。

『こちらは連合軍の天都所属、ふるべあきひさ古辺昌久少将だ』

映像通信が開かれた。

そのモニターに映し出されていたのは、厳しい顔立ちの男性。

『ほう』

と、アルトオブリガード側のチャンネルで、女性が興味深そうな声を出す。

『少将とは……たかが一介のテストパイロットだったお前が随分と昇進したものじゃないか。古辺』

音声のみだった通信に、映像が含まれた。

モニターに、金色の髪を適当な感じに伸ばした女性が現れる。

ふと、悠希はその顔に見覚えがある気がした。

『まさか……マリーナ＝ワークマン、か？』

ひどく驚いた様子で、古辺がその名前を口にする。

『この天才の顔を忘れていないようで安心したよ』

そうだ。

悠希もようやく思い出した。

マリーナ「ワークマン。それは、アニル対策の為に軍が発足した初期から兵器開発の指揮をとり、ソアレイの基本理論を一人で完成させた、現在の人類を支える基礎を築いた最大の功労者。人類史上最高とすら称えられる天才の名前だ。

ソアレイ乗りならば、誰もが一度はその顔をどこかで見たことがある。

だが、と悠希は首を傾げた。

なぜそんな人が、こんなところにあんなものに乗って現れたのかが分からない。確か彼女はソアレイの量産が始まると同時、どこかに姿を消した、という話だった筈だ。

『何故ここに……』

『なに、少しお願いがあつてね……いや、違うか。お願い、っていうより——なあ？』

古辺の問いかけに一つ笑みを零して、マリーナは目を細めた。

『アタシは政治屋じゃないからな、細々した話は好きじゃないんだ。さつさと本題に入らせてもらうぞ。アンタらの物資の一部をアタシ達によこしてくれないか、とな』

それは、信じられない要求だった。

『なんだと？』

『イエスカノーの二択だ。さ、十秒で決めてくれ』

『ふざけるな、マリーナ。そんなことが出来るわけがないだろう。そもそも貴様、一体——』

『ふうん、出来ないってことは、ノーってことだな？』

古辺の言葉を遮って、マリーナは懷から銀色のケースを取り出して、そのケースから出した煙草をくわえ、火をつけた。

『ちなみに、イエスならそれでよしだったんだが、ノーなら……』

煙を吐き出し、彼女はゆっくりと身をのりだした。

青い瞳の奥で鋭い光。

『実力行使だ』

その言葉と同時に、悠希の背後に控えていた部隊のソアレイが所持していたライフルなどの武装が銀色の粒子に貫かれ、爆発した。

ビームライフルによる攻撃だ。撃ったのは、ディズィという機体。ディズィはそのまま部隊との距離を一瞬で詰めると、次々にその手足を撃ち抜いた。

ソアレイが無力化される。

『安心しろ、殺しはしない。アタシらは人殺しじゃないからな。とりあえず、この辺りの連中がやる気をなくすまで無力化を続けさせてもらうかね』

悠希は、即座に動いた。

スパーサーが消滅、ディズィの背後へ出現する。

『いきなり、なにをするのよ……！』

ディズィの肩目がけてブレードを振り落とす。

当たり前のように、ディズィの左腕が斬り落とされ——なかった。

『な……っ』

ディズィの肩のプレートが駆動して、ブレードを受け止めたのだ。

そこから、機体を反転させるようにして、デイズィはスパーサーの背後に回り込む。

『く……！』

咄嗟にスパーサーは転位で距離を離れた。

相対して、悠希は冷や汗を流した。

自分の攻撃を防がれるなど、少しも予想していなかったのだ。

けれど、偶然はこれきり。

再びスパーサーがデイズィの背後に現れる。

悠希の目が見開かれた。

デイズィが、即座に銃身をスパーサーに向けたのだ。

速、い……！？

まるでスパーサーはどこに現れるのか、分かっているかのようだ。

悠希は舌打ちをしながら、ブレードを振るった。

それより早く、デイズィがライフルのトリガーを引く。

光の銃弾が、ブレードを押し折った。金属の輝きが回転しながら宇宙の彼方へと消えていった。

『なに、よ……これ！』

混乱しながらも、スパーサーは折れたブレードを放棄、デイズイの頭上に転位して、もう片方の手に握りしめていたブレードを振るう。

デイズイの頭部を横に切り裂くはずの刃は、しかしデイズイの異常な速度によって寸で避けられ、さらにそこからブレードの横腹に粒子弾を撃ち込まれた。

二度も武器を壊された事実を上手く理解できないままに、スパーサーは腰からミドルブレードを引き抜き、左右の手で同時に構えた。転位して、下方から脚部を狙う。が、それをあつさり回避したデイズイの銃身が動く。それが狙いを定めるよりスパーサーはデイズイの背後に転位。そこからの一撃を……またも回避される。

『なんで、避けられるの……！？』

悲鳴にも似た声で呟いて、悠希は一度、デイズイから距離を取った。

五十メートルほど下がる。

と同時。

スパーサーの左手にあったブレードが撃ち抜かれた。

『っ……噓、でしょ？』

まさかこの距離から当てたとも言っのか。

一瞬だけ悠希が自失した、刹那。

デイズイは、一息でスパーサーとの距離を縮め、ライフルを構えた。

『っっ、のおっ！』

悠希は、これまで培ってきた全ての経験をもって、咄嗟にスパーサーの右手のブレードをライフルに突き出した。

その刃が……通る。

ライフルにブレードが刺さり、爆発。二機が別々の方向に弾き飛ばされる。

『よし………！』

ようやく得られた手ごたえを確かめながら、スパーサーはショートブレードを引き抜いた。

一見して、デイズイにはあのライフル以外の武装は見受けられなかった。あったとしても、僅かばかりの内部格納スペースにしまわれている武器。おおかたナイフかハンドガン。どちらも火力としては不足している。

……やれる。

勝利を確信した悠希の視線の先で、爆煙が晴れる。

デイズイの輪郭を捉えると同時、スパーサーはその距離をゼロにした。

ナイフを振り上げた姿勢のまま、デイズイの目の前に現れる。

次の瞬間、

『くっ——！』

スパーサーの両肩が、吹き飛んだ。

激しい震動を感じながら、悠希はデイズイを睨んだ。

どうして——。

『どうして……まだライフルがあるの!?!』

それも、左右に一丁ずつ。

それによって、スパーサーの両肩が破壊されたのである。

デイズイの肩に付属していたプレートが、左右一枚ずつ駆動していた。

——この肩のプレートは、本来は飾りや盾などではない。

ライフルの格納ケースなのだ。

それが左右合わせて六枚。つまり、最初に手にしていたライフルがなくとも、デイズイにはまだ六丁のライフルが用意されているということになる。

続けて、スパーサーの両脚が破壊された。

損傷によって動力系が低下、悠希はスキルすら発動できなくなる。

それが……最強のソアレイの、敗北。

あまりに桁外れな戦闘についていけず、困惑するばかりだった軍のソアレイが後退する。

慄いているのだ。

『さて、古辺』

『……』

それを目の当たりにして、古辺の頬にも一筋の汗が伝う。

最強と言われてきた悠希が敗北したということは、それだけ強烈な衝撃なのだ。

『知らない仲でもない。サービスでもう一度チャンスをやろう。…とりあえず茶くらは用意してくれるだろう？』

余裕に満ちた顔でマリーナが尋ねる。

『さあ、古辺。どうするのか教えてくれ。それで、アタシらの行動も決まるんだ』

『まだだ！』

介入したのは、一機のソアレイ。

深紅のカラーリングを施されたそれは、軍の正式モデルの一つである？ランサー”。量産機体だ。

巨大な突撃槍を構え、一直線にランサーはデイズィに突進した。

だが、スペーサーの攻撃すら防ぐディズィに、そんな攻撃が通じるわけもなく、ディズィはそれを軽々と回避する。

攻撃を外したランサーはそのまま機体の姿勢を即座に修正し、槍を構える。

今度は、突撃ではない。

槍の先端が開き、展開されていく。

そこに激しい電火が灯った。

槍の内部に搭載されているビームカノンである。

けれど、遅い。

カノンのチャージに時間がかかり過ぎた。

ディズィは即座にそのカノンの中心を撃ち抜き、その爆発に巻き込まれてランサーが吹き飛ぶ。

そのまま、ランサーは動きを停止させた。

どうやら爆発の衝撃でパイロットが気絶したらしい。

『……血気盛んだな。声からして女か。やれやれ、貴様らの軍には
蛮勇な女が多い』

肩をすくめて、マリーナは短くなった煙草を携帯灰皿に放り込む。

『で、イエスカノーか。どうなんだ、古辺。アタシの気が短いのはオマエもよく知っているだろう?』

『……全機、撤退』

OLD FRIEND

天都に入港したアルトオブリガードから下りて来たのは、白衣を着たマリナー一人だけだった。

「護衛の一人もなしとは、信用されている、と思っていいいのか」

それを迎えるのは、数名の部下を連れた古辺。

「馬鹿を言つな」

口の端を吊り上げてマリナーが親指をアルトオブリガードの甲板に向ける。そこには、デイズイが静かに佇んでいた。

だがその機体からは、途轍もないプレッシャーが感じられる。

少しでも下手な真似をすれば、デイズイが暴れ出す。そう考えただけで、古辺の背筋にじっとりとした汗が流れる。

「どうだ、変な真似なんて出来ないだろう？」

「確かにその通りだ……あの機体は、お前が造ったのか？」

デイズイを見上げて、古辺が尋ねた。

「当然だろうが。私のハンドメイドだよ。オマエら軍の機体なんかとは比べ物にならない性能さ」

「そのようだな」

頷いて、古辺がデイズイから視線を外す。

「話し合いの場を用意した。そちらに向かおう」

「嫌だね」

「……なんだと？」

マリーナが近くの機材に腰を下ろした、

「ここでいい。話なら、お前とアタシがいれば十分だ」

「そうはいかない。日本をはじめ、軍全体の問題でもあるのだ。それなりの人間を集めなければ……」

「後でオマエからお偉方に説明すればいいだろう。いつだって損な役割はお前の仕事なんだから」

「……変わらん」

遠慮というものを知らない物言いに、古辺は溜息をついた。

「お前はいつもそうやって常識を無視する。今回もそうだ。いったいどういつつもりかは知らないが、これだけの問題を起こしたとなれば、軍もただでは黙っていないぞ」
「タダじゃなければいいんだろう？」

古辺は、すぐにマリーナが何かを企んでいることに感じた。というよりは、マリーナ自身がわざと感づかせたのか。

そのマリーナの細い笑みは、彼女がなにかよくないことを考えている時の笑みだと、古辺はよく知っていた。

「さて、閑話は休題として、本題に入るとしよう」

マリーナが白衣のポケットから取り出したチップを古辺に放り渡す。

受け取って、古辺はそれを自分の携帯端末に差し込んだ。

映し出されたのは、大量の物資のリスト。

「それを全て用意しろ」

「断れば容赦しない、か……？」

「いいや、断らないさ」

マリーナが確信したように口の端を吊り上げる。

要求リストをスクロールさせていくと、ふと別のデータが移り込んだ。

「これは……」

「アタシがついこの間完成させた新型ソアレイと、加えて武装の設計図だ。根本の基本設計の段階から作り直したもので、既存のソアレイと比べて、性能はだいたい八割上ってとこだな」

データを見る限り、その機体の製作コストは馬鹿にならない。

「発明自慢か？　なるほど、確かに随分な機体だが……コストが高いな」

「まあね。そこで、この話だ」

「なるほど……そういうことか」

古辺がチップを端末から取り出してマリーナに返そうとするが、彼女は片手でそれを制した。

「……いいのか？」

マリーナが鼻をならす。

「設計図だけじゃ、機体は作れても、それに追いつける動力は造れないよ。そっちの設計も分からない限りは、アタシの優位性はなんら揺るがない。ま、サービスって思ってくれればいいさ」

まるで、どんなに頑張っても自分以外ではその動力を開発することが出来ないと言断するような物言い。

それが自意識過剰ではなく、確かな事実であることを古辺はよく知っていた。軍の最初期にマリナーの専属テストパイロットとして混沌の戦場を生き抜いた彼だからこそ。

「つまり、物資と交換でこの機体を譲渡する、というわけか」

「察しが良くて助かる」

「何機だ？」

「そのリスト通りに譲ってくれば百機、もしそれ以上に物資を用意してもらえようなら、歩合で増やしていくよ」

「……あまりにこちらの支出が多くはないか？」

金銭価値にして、天都が支払う物資はマリナー側から譲渡される機体の約三倍ほどにもなる。

取引にしては、あまりにも暴利だった。

単純な物品の比率で見れば、だが。

「そんなことはないだろう。確かにその場だけで見ればそうだが、

譲渡した機体はどうしようとオマエ達の勝手。機体の解析研究次第では軍の力を十年分速く成長させることだって不可能じゃない。なら、安い買い物じゃないか」

もつとも、軍にそれだけの頭を持つ研究者がいればの話だがね。そうマリナーが付け加える。

古辺は答えに迷っていた。

彼一人で決定を下すには、いささか大きすぎる話だった。

「やはり、少し他の責任者とも話しておきたい」

「却下だな。ここで決める。会議とかつてのは時間の無駄だよ。こういうのは、現場を知ってる政治屋が決めるのが一番正しいに決まってる」

「私は、政治屋ではないのだが……あくまでも軍人だ」

「ああ、そうだったか。だけど、オマエの性分は絶対に政治家向きだとアタシは昔から言っているんだから、やっぱり政治屋だよ」

勝手な……。

呆れながらも、それ以上反論せずに、古辺は顎に手をあてた。

「ジジくさい癖だよな、その顎撫でるのって」
「うるさい」

初めて、古辺の表情に変化が生じた。

眉間に皺が寄っている。

どうやらジジくらいと言われたことがそれだけ堪えたらしい。

「外見が老けてるところを指摘されて不機嫌になるのも直ってないのか。成長のないやつだ」

「お前だけには言われなくなかったな、その台詞は。お前こそ、もう少し社会性を学んだらどうだ？」

「アタシは自分に出来ないことは努力しない主義なんでね」

おどけて手を振り、マリーナは膝を組み直した。

「で、答えを聞かせてくれないか？」

「……子供のころのお前は、随分と素直で可愛い女の子だったみたいじゃないか」

いきなり古辺が話題を変えた。

「——おい」

途端、彼女の表情が凍る。

一方で、古辺は鬼の首でもとったかのように口元を緩めていた。

「オマエ、それどういうことだ？」

「お前が蒸発した時は大変だったぞ。なにせ、当時の軍事はほぼお前の技術に支えられていたからな。軍は血眼になってお前を探した。もちろん、お前の部屋から様々な物品も押収されたわけだ。そこで見つかったビデオファイルの検証をしたのは私でな。ふ、部屋の始末をしなかったのは、失敗だったな？」

「テ、テメエ……まさか……み、見たのか！？」

マリーナの頬に朱が差す。

幼少の頃の自分というのは、どんな人間にとっても恥ずかしいもの。そして、自他共に認める天才であるマリーナにとっては、それが常人よりも強い傾向にあった。幼少の自分の純真さ——悪く言えば馬鹿さ加減——に、酷い拒否感があったのだ。

「いや、まさかお前が子供時代にあんなことをしていただなんて……」

「ふっ」

「ぐっ……！」

砕けんばかりにマリーナが奥歯を噛み締める。

「あのデータはまだ保管庫の中にあるわけだが……もし時間が貰え

るのであれば、そのデータや他に押収されたお前の所持品を持ち出してやってもいい」

「……この、腹黒が……っ！」

「誉め言葉として受け取っておこう」

マリーナの怒気を涼しい顔でいなし、古辺は機材に腰を下ろして挑発的に足を組んだ。奇しくもそれはマリーナと鏡映しの体勢だ。

「まあ、お前の意見に沿うように話が進められるよう私も努力するという約束はしておく。で、答えを聞かせてもらえるか？」

「……クソッ、好きにしろ！」

「ふ……了解した」

心なしか、古辺の冷静な笑みにはマリーナをやりこめた歓喜にじみ出ているようだった。

「どのくらい時間かけるつもりだ？」

「一週間あれば十分だろう」

「そんなにか……これだから無能な連中は嫌なんだ」

煙草を啜えて、それに火をつけたマリーナは座っている機材に思いきり踵を叩きつける。

「まあいい。一度決めたんだから一週間は待ってやるさ」

立ち上がり、アルトオブリガードに向かってマリーナは歩き出す。

どうやら話は終わり、ということらしい。

「待て」

その背中を古辺が引きとめた。

「一つだけ、これだけは教えてくれ」

「なんだ？」

「お前は、何者なんだ……マリー」

愛称を呼ばれて、マリーナは思わず目を丸め、しかしすぐに瞼を閉じて口元を歪ませた。

「今も昔も、変わらない。アタシはアタシで、天才で、研究者だよ。ただ、職場が軍より息をしやすい場所に変わっただけさ」

SCHOOL

気がつけば、朝はあつという間にやってきた。

緩慢な動きで制服に着替えて、叔母や従姉妹に心配をかけてはならないと平静を装いながら家を出て、いつもの通学路を歩いて学校に着く。

教室にはまだほとんどの生徒がそろっていなかった。悠希は窓際で一番後ろの自分の席に腰を下ろした。

窓の外を眺めながら思うのは、やはり昨日のこと。

あの黒い機体……デイズイ。

まさか自分が敗北するなんて、悠希は微塵も考えていなかった。

だからこそ、ショックは大きい。

まさか、そんな、という信じられない思いと、嘘だ、間違いだ、という信じたくない思いが入り混じって、悠希は唇を噛んだ。

負けるわけにはいかないのに、と。

勝利しなくてはいけないのに、と。

アニルの最後の一匹を狩り尽くすまで、彼女はそうして生きていく筈だった。

例え相手がソアレイ——人間であつたとしても、負けるわけには
いかなかったのだ。

なのに、ああもあつさりと悠希は敗北した。

胸に熱せられた杭を打ちつけられたかのような苦しさ。

それを振り払う方法を、悠希は知らなかった。

ただ、悔しさに心を焦がす。

そうしている間に、クラスメイトが集まり、朝のホームルーム開
始を告げるチャイムが鳴り響いた。

同時に、教室の前のドアが開く。

入って来たのは、一人の女性。

空気が凍った。

その姿に、悠希は一瞬呆然とし、そして愕然とした。

マリーナ＝ワークマンが、平然と教壇の上に立っていたからだ。

悠希だけでなく、他のクラスメイトもざわつく。

このクラスの担任教師は当然彼女ではなく、冴えない中年の男性
教諭の筈だった。

マリーナが脇に抱えていたクラス名簿を教卓の上に置く。

「さて、諸君。いきなりではあるが、君らの担任と副担任が体調不良で数日の休暇をとることになった。そこで代理として、このアタシ、マリーナワークマンが諸君らの面倒を見させてもらうことになった。よろしく頼むよ」

早口でマリーナが言うと、一つの手が拳がった。

「質問いいですかー？」

手を挙げたのは一人の男子生徒。

「答えるかどうかは保証しないが、なにかな？」

「先生って、もしかしてあのマリーナワークマンさんですか？」

「あの、という曖昧な表現ではよく分からないが、もしそれがソアレイ開発者の一人としてのマリーナワークマンならば、確かにそれはアタシのことだろう」

すると、教室中が沸いた。

なにせマリーナは、超をいくつつけても足りないような有名人なのだ。長年表舞台に姿を見せなかったとしても、それは変わらない。

今の歴史の教科書には、平然とマリーナの顔写真が載っている。

「あれ、でも失踪してたんじゃない……」

ふと、生徒の一人がそんな情報を口にする。

「プライベートな問題で軍を辞めることにしてね。引き止められるのも面倒だったから、誰にも言わないで出奔しただけのことだよ」

あっさりと答えて、マリーナは時間を気にするように時計を見た。

「まあ、質問は後で聞くとして、今日はもう一つ、ちょっと急なことがあってね。ホームルームの時間に余裕がない。というわけで……入っていいぞ」

マリーナが呼ぶと、廊下から一人の男子が入って来た。前髪が伸びていて表情は半分隠れてしまっているが、少しだけ覗くその目は、あからさまに不機嫌なもの。

「彼は今日から君らの学友となることになった。まあ、転校生、というやつだな」

治まりかけていたざわめきが再燃した。

この時期の天都の教育機関は新学年が始まったばかり。何故今更こんな時期に転校生はやってくるのか。いくつもの疑惑の視線が転校生の少年に投げかけられる。

疑惑の視線を鬱陶しそうに身体中に感じながら、彼は口を開いた。

「直衛裕真なおえ ゆうまです。よろしく」

意外と透き通った声。

「なんだ、短いな。面白い小話の一つでもしたらどうだ」

簡潔な自己紹介に、マリーナがつまらなそうにぼやいて、教室の中を見回し……そして、誰も座っていない席を見つけた。

「ああ、あそこが空席だな。あそこに座れ」

「分かりました」

そう言ってマリーナが指示したのは、悠希の隣の席。

途端に悠希が嫌そうに表情をしかめる。

彼女の隣の席は、新学期の最初にあつた席決めて誰も座らなかつ

ただ。その理由は、前年度——つまり悠希が一年の頃に周囲と隔絶した態度をとっていたせいだ。

人付き合いを得意としない悠希としては、隣に人がいなかったというのは気楽なものだったので、それを害されたことは不快極まりないことだった。

言われた席に着いた裕真の視線が、不意に悠希の視線とぶつかる。

「まあ……よろしく頼む」

「……」

挨拶をした裕真に対して、悠希は視線を逸らしただけだった。

「……なんだ？」

その態度に首をかしげつつも、裕真はそれ以上話しかけたりはせずに、頬杖をついて教壇に立つマリーナを眺めた。

「まったく……マリーナさんも何考えてるんだか」

その呟きは、隣の悠希にさえも聞こえないくらいに小さなもの。

「それじゃあ、どたばたしているが、早速今日の学業を始めるとしようか。一限はさっそくアタシの授業だな……覚悟しておけよ、諸君」

歴史上稀に見る天才の授業を前に、それがどんな内容なのかと、誰もが息を呑んだ。

+

一限目の、マリーナの授業。

科目は数学だった。

驚いたことに……マリーナの授業は極めて平凡なものだった。強いて普通と違うところをあげるのであれば、それは生徒達に理解させるのが早かった、と。そのくらいのものだろう。

要点を纏めて分かりやすく進められた授業は、生徒にとってありがたいものだったろう。

自然と授業風景は、至って静かで真面目なものになった。

もしかしたらマリーナには教師の才能があるのかもしれない。

マリーナの授業は比較的平和に過ぎ去った。

裕真もそのことには安堵した。

だが、それとは別の問題が起きることなど裕真は予想だにしてい

なかったらう。

授業の間にある休み時間が来る度に、裕真は頭を悩ませた。

どうして転校生だからといって、ああも質問責めにされなくてはならないのか。

前はどこの学校に通っていたのか、に始まり、マリーナ先生とはどういう関係なのか、など。様々な問いを投げかけられた。前者は適当に誤魔化し、後者は偶然今日転入してきただけで無関係の人だと答えていたのだが。

いろいろと溜まった疲れのせいで、裕真は四限目には机に突っ伏してしまっていた。

どうにか円滑な関係——というよりも問題の起きない程度の無難な関係をクラス内で築いていこうと愛想を振りまいたこともあって、そろそろ限界だったのだ。

そして……待ちに待った授業終了のチャイム。これで、ようやく昼休み。

裕真は即座に教室を飛び出す。これ以上質問を受け付けるつもりはなかった。

しかし、どこに向かうか。

「裕真、こっちにこい」

廊下を歩きながら悩む裕真に声をかけたのは、他でもないマリーナだった。

その手には、一本の鍵。

「応接室にいくぞ」

どうやら応接室の鍵らしかった。

「勝手に持ってきたんですか？」

「そんなわけないだろう。少しお願いして借りたのさ」

マリーナの願いが少しで済むものか。呆れながらも、裕真はそのままマリーナと応接室に向かう。

応接室に到着して、すぐに彼はソファ―に座り込み、肩の力を抜く。

「なんだ、随分疲れてるようじゃないか」

「当然でしょうが」

ネクタイを緩めて、裕真はマリーナに恨みがましい目を向けた。

「何考えてるんですか、マリーナさん。いきなり教師がやりたいなんて……しかも俺まで巻き込んで」

「そう文句を言うな。教育の現場、というものに前から興味があったんだよ。果たして今の少年少女がどれほど可能性を秘めているものか、ね。どうせ一週間は暇なんだ。構わないだろう」

「そんなの柄じゃないでしょうが。どうせ、ドラマか何かに影響されたんじゃないんですか？」

「……」

指摘に、マリーナの視線は完全に明後日の方向を見ていた。

「図星ですか」

「事の始まりに貴賤はないよ。意味を求めるのは、その過程にだけでいいのさ」

「それらしいことで誤魔化しても駄目ですから」

眉間を指先で揉みながら、裕真は溜息を吐いた。

「まったく、今朝になっていきなりやってきて何事かと思えば、私はこれから教師になるからお前も付き合え、だなんて……しかも理由がドラマの影響とか、いい加減にして下さいよ。マリーナさんの我が儘でどれだけ迷惑を被る人がいると思ってるんですか」

「ふん、お前が人の迷惑を考える性格をしていたとは驚いた」

「そうですか」

全く反省の色が見えないマリーナを窘めるのを早々に諦めて、裕真はソファアーに横になった。

「なんだ、寝るのか？」

「昨日の疲れが抜けてないんですよ。まったく、俺が疲れてるのはわかってるでしょう」

「昼食はどうした？」

「ありませんって。寝込みを攫われて学校に連れてこられたのに、昼飯を用意する余裕なんてありませんでしたよ。学食や購買に行くのも面倒ですし、昼飯はとりません」

早くも重くなってきた瞼を閉じて、欠伸を一つ零す。

「ふむ。ならこれを食べるか？」

マリーナが取り出したのは、紺色の布で包まれたもの。

テーブルの上で包みを開くと、小さな弁当箱が現れた。

「なんですか、それ」

万が一のことを考えて、一応確認をとるために裕真は尋ねた。

「これが弁当以外のなにかに見えるなら、視力の矯正手術をオススメするね」

「はあ……マリーナさんの弁当、ですか」

裕真の表情に、極めて色濃い怪訝が浮かぶ。

「なにか言いたそうだな？」

「いや、そんなことはありませんよ。ただ、美味いか不味いかの両極端な可能性しか見えないんです……」

「失礼だな」

マリーナがおもむろに弁当の蓋を取る。

意外にも、中身は弁当らしい弁当だった。多少質素だが、それでも十分美味しそうに見える。

「……それじゃあ、ちょっと摘まわせてもらいます」

興味に抗えず、裕真は身体を起こすと、弁当の中からウィンナーを一つ摘み、口に放り込んだ。

もしかしたら中にネジの一本や二本入っているのでは、などという心配を真面目にしていた裕真だが、その味覚には予想の斜め上をいく味が広がった。

「……美味い」

「なんで悔しそうなんだ、オマエ。そんな顔で美味しいと言われても、少しも嬉しくないな」

「妹の弁当より美味い……」

そう言う裕真の表情は痛切だった。

なにか、そう。認めたくない現実を無理やり突きつけられたかのような。

「オマエの妹と比べたら、多分殆どの女が美味しい弁当を作れるぞ。というか、比較対象になるのか、あれは」

気の毒そうに俯く裕真の肩を叩いて、マリーナも自分の弁当を摘んだ。

どうやら納得のいく出来だったらしく、彼女は一つ頷いた。

「……まあ、あれを笑顔で食えるオマエのシスコン根性は大したものだと思うがね。今まで何回、腹痛で倒れたのだったか」

「シスコン言わんでください……これ、いいですか？」

「本当の事だろうに。あと、好きに持っていけ」

裕真は二つあった握り飯の片方を手にとり一口咀嚼してから、憮然と首を振った。

「人よりもちよつと妹のことを大切にしてるだけじゃないですか」「どこがちよつとなものか。その大切にする度合いがオマエの場合は凄いことになってるんだよ。休日には絶対一緒にウィンドウショッピングとか、オマエもうそれは恋人じゃないのか」

マリーナも握り飯を口に運ぶ。

「冗談。あんなちんちくりんじゃ、妹としてならともかく、女としては好きになりませんよ。そもそも、家族ですし」

「家族、ね」

「なんですか、その含みのある言い方」

「いや。気にしないでいいよ」

マリーナは握り飯をさつさと咀嚼して、指さきについた米粒を舐めとる。

「ああ、そういえば、そろそろかな」

「はい？」

裕真が握り飯の最後の一口を口に放り込みながら、マリーナの咳きに反応した。

「ちょっと人を呼んであるんだ。もうやって来る頃だろう」

丁度、その時だった。

応接室のドアがノックされた。

MEETING

「ああ、入ってくれ」

開いた扉の向こうから現れたのは、悠希。

彼女はマリーナと裕真を一瞥して眉間をひそめて口を開いた。

「……なんですか、用事って」

「いやなに、いろいろと気になることがあるだろうと思ってね。教師としては生徒の悩みは解消すべきだろう？ だから、少し話をしようじゃないか。座ったらどうだい？」

「……」

無言で悠希はソファに腰を下ろす。

ちろりと、その瞳が裕真を見る。

「ん、どうかしたか？」

「別に。なんでここにいるのかと思っただけよ」

「俺も、どうして無愛想なクラスメイトがここにいいのか知りたいな」

「……」

その裕真の言葉に、悠希が鋭く目を細めた。

「おいおい、裕真。昨日資料を渡したろう。見てないのか？」

マリーナが二人の間に割って入る。

「残念ながら今朝見ようと思ってたんですけど、どっかの誰かに邪魔されました」

「皮肉な奴め……彼女はあれだ、スパーサー——昨日のあのスキル持ちの機体のパイロットだよ」

間を置いて。

「——はあ!？」

裕真と悠希が、同時に立ち上がった。

「なに教えてるのよ! 相手はただの学生よ!? しかも、頭の弱そうな。この話が広まったらどうするつもり!？」

「こないかにもクール気取ってるのがアレのパイロットですって、何の冗談ですか？」

「オマエら、相性抜群だな」

お互いを指さして言う二人に、マリーナがにやりと笑みを浮かべる。

二人は互いを睨み合っていた。

「安心しろ。裕真はアタシの関係者だし、月坂は本当にスパーサーのパイロットだよ」

「……なによ。他の生徒の質問には無関係だって言ってたじゃない」
「そんなもん本当のことと言えるわけないだろうが」

悠希の責めるような言葉に、裕真が軽く嘆息する。

「嘔吐き」

「本当のことだが、お前の言い方はなんかムカつくな」
「はいはい。じゃれるのはそのくらいにしておけよ」

手を叩いて言い争う二人を宥めて、マリーナがテーブルを指先で撫でる。

すると、テーブルの上に透明なモニターがそれぞれ一つずつ三人の目の前に浮かび上がる。

「ま、後で正式に説明させると思うが、アタシ達は今日から約一週

間、天都の軍と共同することになった」

「共同……？」

なぜこんな連中と、という顔だった。

「それは名目で、実際にはアタシらの軍事力をそっちに見せつけて、いろいろと融通しやすくする為なんだがね。まあ、もうその段階は昨日の時点で十分に果たせたわけだが……君という最強のシンボルのおかげでね。最強というのは、諸刃の剣だよな。それは勝利し続ければどこまでも士気を上げるが、敗北すればそれに比例する大きなショックの与える」

あっさりと腹の内を曝して、マリーナはモニターを操作する。

敗北という一言に、ひっそりと、悠希は拳を握り締めた。

それを横目で認めつつも、裕真は無言でモニターに視線を戻す。

悠希のモニターにマリーナが古辺に渡したものと同じ資料が流れる。要求物資の項目だ。

「この辺りは、兵隊……君の場合は傭兵と呼んだ方が適切かな。ともかく、戦う立場の君には関係ないか。とんでもない量の物資をアタシ達が天都に要求しているということだけ理解しておけばいいよ」「なによ、それ。勝手に襲ってきて……それじゃあ強盗と同じじゃない」

「そう思ってくれていいよ。こちらもね、いろいろと形振り構って
いられるほどの余裕はないのさ」

強盗と呼ばれて表情一つ変えず、むしろどこか楽しそうにそれを
認めて、マリーナはモニターを新型ソアレイの項目へと写した。

「けれど、一応は交換条件くらい用意してある。この機体百機と交
換、とね」

「これは……」

研究者ではないが、一見して悠希にもその機体の性能がどれほど
のものかはおよそで理解出来た。

「実のところ、この量産の為にはエデンの物資だけじゃ足りない。
無国籍で外部との交流がほとんどない、言わば孤島的なエリアだ
から。それで物資をこんな形にでも得なくちゃならないのさ。付け
加えて言えば、天都を取引先に選んだ理由は私の古巣だからなのだ
けれど」

もしこれが百機も戦場に投入されることがあれば、軍の戦力は今
よりもずっと高い戦力を持つことが可能だ。

「昨日の機体って、これ？」

「デイズイのことか？ まさか。基本的な部分は共通しているが、

いくらなんでも、デイズイと同じ性能を持ったものを量産機にするなんて、アタシでも出来ないよ。それにあれば、そもそも機体性能だけじゃないしね」

「……どういう意味？」

悠希が疑問を口にする、マリーナが意味深に笑んだ。

「君は知っているだろう？」

「私が、知っている？」

少し考えて、悠希は答えを弾き出す。

「スキル、なの？」

「ご明察。これ以上はアタシの口から教えることは出来ないな」

「……別に、教えてもらおうだなんて思っていないわよ」

「強がりめ」

裕真が揶揄する。

「うるさい」

悠希は冷淡な言葉を叩きつけた。

「それにしても、どういづつもり？」

マリーナはどうして悠希にこんな話をするのか。

彼女達にとつて、この情報を悠希に教えるメリットがない。取引の話はもとより、共同の件も必要があれば軍から彼女に連絡があるだろう。スキルのことについては、いずれはバレるかもしれないが、今それを明かす必要なんてないし、それどころか自分達の手札を明かして不利にすらなりかねないのだ。

「それほど深い理由はない。単に、君に興味があつたというだけのことなんだよ。次元干渉系のスキルはかなり珍しいからね。アタシが知ってるだけでも君と裕真、それにあともう一人くらいしか存在しない貴重なものだ。研究者として、そういう対象は是非とも観察してみたいくなる。話は、その観察の一環さ」

悠希は、そのマリーナの言葉にひっかかりを覚えた。

「……ちょっと待ちなさい」

「ん、どうかしたかい？」

マリーナは、なんと言った？

次元干渉系のスキル持ちに悠希の名をあげた。それはいい。

だが、同時に裕真の名も並んだのはどういうことだろう？

「こいつって、まさか……」

「こいつとは随分な呼び方だことで」

言いながら、裕真は卵焼きを口に放り込む。

いつの間にか、テーブルの上に置いてあった弁当箱の中身が、綺麗になくなっていた。

「そういえば、言っていなかったか？」

弁当の中身をほとんど食べられなかったマリナーが、悠希と話をしながら弁当箱の蓋を掴んで、それを裕真に投げつけた。

咄嗟に裕真がそれを回避すると、蓋はそのまま彼の後方、飾られていた花瓶に命中して、それを思いきり粉碎、水や花を地面に巻き散らかした。

やってしまった、と裕真はその惨状に額に手をあてる。

「彼はね、デイズイのパイロットだよ」

「な、なんですって……！？」

「まあ、これから何回か一緒に戦う機会もあるだろうから挨拶だけ

はしておくか」

驚く悠希をどこか小馬鹿にするような態度で、裕真は片手を軽く拳げて言った。

「よろしく頼むぜ、元最強さん？」

+

悠希が鋭い目つきで飛び出していった後の応接室。

どこか満ちげにしているマリーナを見て、裕真は軽い溜息をついた。

悠希のモニターに物資の要求リストや新型ソアレイの設計図が映っている時彼の手元のモニターには、彼女の経歴が映し出されていた。

に、裕真はモニターで彼女の経歴を見ていたのだ。

「で、と思う。彼女」

「俺としては、かなり危ないと思いますよ」

裕真は改めて悠希の経歴に目を通した。

「両親は子供の頃にアニルの襲撃による事故で死亡……復讐ですか」
「戦う理由は、十中八九それだろう。ま、この時勢じゃありきたりな話だよな、アニルへの復讐は」

「でも復讐で戦えば——いつか死にますよ。復讐は、誰をも傷つけますから。敵だけじゃなく」

「そういう奴が死んで行くところを何人も見て来たオマエが言っと、説得力があるよな。彼女もそれに早く気付ければいいんだが……まあ、それはアタシらには関係のない話だけどさ」

マリーナの発言に、裕真が意外そうな顔をする。

「興味があつたんじゃないですか？」

「それで死ぬようなら、興味を抱くほどの価値がなかった、ということだよ」

「なるほど」

経歴の欄を読み進めると、少し特殊な立ち位置に彼女がいることが分かった。

「軍隊には所属していないけれど、有事の際は依頼を受けて出撃。しかも、そのことを隠して学校に一応は真面目に通っている……物好きというか、なんというか」

「その辺り、後見人への義理を果たす為らしいな。なんとも孝行者じゃないか。アタシも昔は親に義理を果たしてやったものだよ。ふふ、家を出る時にアタシユース五つ分の札束を投げつけてやった時には、見事に目が丸くなっていたからな」

「それ、義理を果たしたっていうか、単なる手切れ金じゃないんですか？」

PROPOSAL

右からの攻撃を転位してかわし、そのまま胴を切り裂く。

殺到してくる爪や牙は当たり前のように届くことはない。

一匹ずつ確実に、かつ迅速に仕留めていく。

転位を連続させるスパーサーは、まるで同時に何機も存在するかのような錯覚を見る物に与える。

最後のアニルを狩り終える。

視界が暗転。

浮かび上がったモニターに、成績が表示される。

いつもの同じ、シミュレーターにおける最高ランクの戦績。

これまでと同じ、圧倒的な能力。

けれどそれは……もう不敗の力ではなかった。

「っ……」

奥歯を噛みしめながら、彼女はシミュレーターを出た。

シミュレーター室はソアレイが格納されているハンガーに隣接している。

悠希は立ち並ぶソアレイを視界の端に捉えながらハンガーを横切って、休憩室に入る。

と――。

「はい、お疲れ」

「ひゃあっ!？」

悠希の首筋にいきなり冷たいものが当てられた。思わず悲鳴を上げてしまう。

「おお、女の子らしい声」

彼女は不愉快そうな顔で、背後を振りかえった。

「……綾香^{あやか}」

「紅茶で構わなかったよな？」

そう言ってボトルを差しだしてくるのは、赤い髪を後ろで一括りにした女性。歳の頃は悠希より少し上、といったところだろう。

綾香「シュリ」ミルミア。

若くして少数精鋭部隊？ヴァーミリオン”のリーダーを務めるエースだ。

そして、彼女こそが先日のマリナーたちが現れた時、最後にデイズィに突撃したランサーのパイロットである。

「ありがとう」

ボトルを受け取って、悠希は休憩室のガラス張りの壁によりかかった。

「しかし、頑張るじゃないか。やっぱり、昨日の負けが堪えているのか？」

「……」

悠希の表情が歪む。

「そう気にすることはないだろ。相手は人間だ。アニルに負けたわけじゃないんだから」

明るく慰めるように言って、綾香は悠希の頭に手を置くと、その

黒くて艶のある髪をくしゃくしゃと撫でる。

「ちょっと、やめてよ」

「いいからお姉さんに撫でられろって。頑張ってる妹分へのご褒美だ」

「妹分、て……綾香の方が弱いくせになに言ってるのよ」

「あ、それを言うか、この」

綾香の指が悠希の頬を抓む。

「いふあいふあい。ふあなふいへ」

しばらく悠希の頬の感触を楽しんで、綾香は指を離して窓から見えるハンガーを眺めた。

「まったく、痛いじゃない……」

頬をなでつつ、悠希はボトルのストローを咥える。

その隣で、綾香はぽつりと呟く。

「……にしても、本当にあいつはとんでもないな」

その視線の先には、ハンガーの一角に佇む一機のソアレイがある。

軍の量産機である？スリンガー”だ。

その足元では、裕真とマリーナがなにか話し合っている。

「聞いたか？　これからアヘッド部隊と演習訓練だそうだ。一対十でやり合うなんて、私はつきり貴方くらいしか出来ないと思っていたんだがな……。しかも、話じゃあいつ、どういうわけかあのデイズイとかいう機体じゃなく、スリンガーを借りて、それで戦うらしい」

「……そうなんだ」

アヘッド部隊と言えば、ヴァーミリオン部隊と双壁をなす部隊だ。その特徴は、？ブレイド”という速度重視のソアレイ十機による連携だ。一機一機の火力はさほどではないが、その殲滅率はかなり高いものである。

「アヘッド部隊の連中、目にももの見せてやる、って言ってたけど……正直どうかな」

「無理ね。言っちゃ悪いけど、多分勝てないわよ」

「おいおい。はつきり言うな」

綾香が苦笑する横で、悠希はどこか確信していた。

彼女も、アヘッド部隊と単機で演習訓練をしたことがあるからわかる。

アヘッド部隊では、あの少年に勝つことは出来ない。

スリンガー一機に対してブレイド十機と言われれば、誰もがその結果をアヘッド部隊の勝利と予測するだろう。

だが、戦いは機体の数や性能が全てではない。

裕真の操縦技術は、それらを補って余りあるものだと、悠希は感じていた。

それだけではない。

スキル。

裕真には、それがある。スリンガーは量産機で、スキルに合わせた調整はしてないだろうからスキルを十全に発揮することは出来ないだろうが、それでもスキルがあるというのは大きな脅威だ。

「……まあ、お前に勝てるんだから、本当にそうなんだろうな。でも、本当に不思議だよ」

「不思議って、なにが？」

「どうしてあいつは、お前に勝てたんだろうな。大体、お前の攻撃が防がれたこと自体、私は信じられないよ」

「……」

それは、悠希にとっても最大の疑問だった。

転位からの一撃は、滅多なことでは避けたり防いだりは出来ない。それこそ、偶然に偶然が重なって初めて成功することだ。

だが、デイズイはそれをあっさりと連続でやってのけた。明らかに、スパーサーの動きを見切っていたのである。

どうして？

スパーサーの転位は一瞬だ。とてもではないが見切れるようなものではない筈だ。

「それはね、裕真にとって一瞬が一瞬に終わらないからだよ」

不意に、休憩室の入口から声がかけられた。

見れば、いつの間にかこちらにマリーナが来ていた。

ハンガーではスリンガーがアヘッド部隊の機体と共に出撃準備に入っている。

「一瞬が、一瞬に終わらないって……どういう意味？」

「加えて、裕真の並外れたセンスというのも大きな要因だろう」

悠希の質問が聞こえなかったように振る舞うのは、答えるつもり

がないということか。

「ふむ。さて……アヘッド部隊はなかなか優秀な部隊だそうだが……裕真相手にどこまでやれるものかな。楽しみだ」

「白々しいわね。結果なんて、見えているじゃないの?」

「そんなことはないさ。機体も、デイズイとは格段に劣るものを使うしな……ちなみにデイズイを使わない理由は、それじゃああんまりだから、だ」

マリーナの口が弓なりになる。

「少なくとも、アタシと裕真の共通意識として、アヘッド部隊の方がスパーサーよりかは手強いと思っているよ?」

「……なんですって」

悠希の握るボトルが軋んだ。

「馬鹿にするつもり?」

「大真面目に言っているんだよ」

睨み殺すような目をする悠希に、やれやれと肩をすくめてマリーナはハンガーを見下ろした。

「スパーサーは、言わば奇襲の機体だよ。瞬間転位というスキルによって、常に死角から攻撃する。けれど奇襲というのは結局のところ、強者に弱者が挑む手のことを言うのさ」

「だから……なんなのよ」

遠まわしに自分のことを弱者と言われ、悠希の纏う雰囲気さらさら剣呑になる。

「だがスパーサーの転位攻撃は裕真への奇襲にはなりはしない。スキルの相性があまりに悪すぎる。唯一の切り札を奪われた弱者など、ただ踏み潰されるのを待つだけの哀れな小物ということさ。そんなのなら、最初から切り札を持たない状況で努力している連中の方が、よほど驚異的というものだろうよ」

くつ、と笑みを一つ零して、マリーナは椅子に腰を下ろす。

「つまり、こう言いたいんですか？」

初めて、綾香がマリーナに対して口を開く。相手が偉人であって表面上は敬語だが、どこか棘がある。

「悠希が、スキルに頼り過ぎている、って」

「端的に言えばそうなる」

「その何が悪いのでしょうか？」

「なに？」

マリーナが訝しむように綾香を見た。

「いいじゃないですか。彼相手なら負けてしまいかもしれないけれど、アニル相手なら、悠希は絶対に負けない。例え第三形態のアニルだって、スパーサーの攻撃は防げないんですから」

「なるほど、そうだな。確かに、第三形態までならスパーサーは圧倒的だろう」

「第三形態まで？ おかしな言い方を。アニルは第三形態までしかないじゃないですか」

「——ああ、そうだな」

頷いて、マリーナは煙草を取り出して、それを口に咥える。

「その通りだな。第三形態に勝てれば十分なのだよね……。けれど、それは停滞という愚行だ」

最後の言葉は、あまりにも小さすぎて、二人の耳には届かない。

煙草に火をつけて、マリーナはふと思いついたように口を開いた。

「そうだ。このままじゃ裕真もつまらないだろうしな。そちらにハインデのーつや二つやらないと駄目か」

その双眸が、悠希と綾香を見据える。

「どうせ居合わせているんだ。少し、付き合つといい……あれも、少しは気にかけているようだしな」

DISMOMENT

悠希は、スパーサーのコックピットの中にいた。

浮かんでは消えていく動作確認の立体モニターを視線で追う。

これから始まるのは、裕真の乗るスリンガーに対してアヘッド部隊のブレイド十機……さらにヴァーミリオン部隊のランサー五機とスパーサー……計十六機の戦闘だ。

滅茶苦茶にしか見えない演習訓練。

マリーナの提案に寄り、ヴァーミリオン部隊とスパーサーの参加は決定された。

馬鹿にしているとしか思えない。

アヘッド部隊だけならともかく、ヴァーミリオン部隊にスパーサーまで加えて、それで本当に裕真が勝てるとマリーナは考えているのだろうか。

——考えているのだろう。

悠希は、深い溜息を吐く。

どれほど有利な状況でも、油断はしない。

最初から全力で叩く。

悠希はそう意気込んで、モニターに表示された出撃許可を告げる文章に、機体を思いきり加速させた。

慣性の重圧が身体にかかる。

そのまま、スペーサーの機体が宇宙の闇に飛び出した。

既にスペーサー以外の機体は、いつでも演習訓練を開始できる態勢に入っている。

アヘッド部隊とヴァーミリオン部隊の横にスペーサーが並ぶ。

少しの間、沈黙が流れる。

悠希は、スペーサーのカメラ越しに、視界の果てに浮かぶスリンガーの機体を見る。

自分が敗北した少年が、あの機体に乗っている。そう考えると、自然と手に汗が滲んでくる。

……こんな大多数で戦っては、リベンジも何もない。

けれど、それでも勝ちたい。

彼女の心に渴望が芽生えた瞬間。

演習訓練開始を告げるブザーが鳴り響く。

と同時に、隣にいたヴァーミリオン部隊のランサーが一機、演習用の破壊力を持たない光線を胴体部分に受けた。

『——！？』

一斉に動揺が走る。

まだ、誰も開始地点から動いていない。

彼我の距離は、遙かに開いている。

スリンガーの両手には、ビームライフルがそれぞれ握られていた。右手のビームライフルが、悠希達の方に向けられている。

この距離を、ただのビームライフルで……しかも狙いを一瞬で定めて撃ってきたというのか。

そんな超精密射撃を、一体どれほどの人間が出来るだろう。

撃墜判定を受けたランサーの機能が強制的に凍結される。

動揺からの回復は、すぐだった。

アヘッド部隊と無事なヴァーミリオン部隊の機体が、一斉にスリンガーに向かって加速する。

その動きは長距離射撃を警戒して、不規則に変化していた。

けれど――。

同時に二機、ブレードが機能を凍結させた。

こちらもまた、胴体部分を撃ち抜かれたのである。

怖気すら覚えるほど正確な射撃だった。

二機を撃ち落としたスリンガーは両手に構えたビームライフルを下ろすと、その全身から銀色の光を放ち始める。

そのまま銀の尾を引いて、スリンガーが飛び出した。直後、目の前に刃の潰された刀身が振り下ろされた。

瞬間転位してきたスペーサーのロングブレードだ。

スリンガーが機体を回転させるようにそれを回避する。

――やっぱり、避けられる……！

悠希が歯噛みして、転位する。直後、スペーサーのいた空間を銀色の光線が通り過ぎた。

あと一瞬転位が遅れていれば、スペーサーの胴は貫かれていただろう。

スペーサーは、スリンガーの背後に現れる。

振るわれるブレード。

スリンガーがそれを回避するが、攻撃は一度ではない。

転位と、斬撃。

その繰り返し、刹那に幾度も繰り返される。

そのことごとくを回避しながら、まるでスパーサーなど眼中にないばかりに、スリンガーはビームライフルでブレイドやランサーを次々に撃墜していく。

しかも、ただ撃墜しているわけではない。

確実に連携を乱すように、射撃は行われていた。

十機から構成されるアヘッド部隊は既に残り四機となり、ヴァーミリオン部隊は残り三機となっている。

仲間を次々に墜とされて、悠希の中で焦りが大きくなる。

『どうして、あたらないのよ……！』

絞り出すように叫んで、悠希はスパーサーを介して、ブレードを振り下ろす。

スリンガーはまるで幻か何かのように、刃の軌道から外れていた。

その動きに、悠希は違和感を覚える。

おかしかった。

スリンガーの機動性が……明らかに常軌を逸している。

少なくとも量産機の動きではなかった。

……スキル。

ようやく悠希は、その考えに至った。

スリンガーの動きが異常だというのなら、それは、今その機体に乗り込んでいる裕真の発動させるスキル以外に理由はない。

ならば、と。

スパーサーが一旦、スリンガーから距離をとる。

味方がさらに墜とされる中、悠希は必死に思考を回転させた。

どんなスキルなのか。

スリンガーの機動性が上がるということは、動力系に作用するスキルだろうか。

否。

違う。

悠希はマリーナの言葉を思い出した。

裕真のスキルは、悠希の瞬間転位と同じく、次元干涉系のものらしい。

であれば動力などに作用するものではない。

次元干涉系で、機体の動きを加速させるもの……。

それにこうも言っていた。一瞬が一瞬で終わらない、と。

一体どういうことなのか。

不意に、悠希の視界に、コックピット内の立体モニターに表示される、演習開始から経過した時間が映り込んできた。

まだ、たったの十分も経ってない。

そのことに驚きながら、悠希は……はっとする。

『——っ、時間！』

次元干涉系で加速に関わるもの。

かつ、一瞬を一瞬で終わらなくさせるもの。

それは、時間だ。

『時間を、操るスキルなの……！？』
『へえ……よく分かったな』

通信チャンネルが開き、立体モニターに裕真の顔が表示される。

『正確には、俺の乗る機体の時間を外界の時間より長く引き伸ばすスキル、だ。まあ、今乗ってるコイツで大体、外界の二倍ってところか』

二倍……。

悠希は、愕然とした。

あまりに、出鱈目なスキルだった。

戦闘というのは、一瞬の交錯で勝敗が決まる。

相手の動きを見極め、どう行動し、どう攻撃をするか。どう次の行動に移るか。

そういったことを、一瞬のうちに考えて行動に移さなくてはならない。

だが……裕真にそれは適応されないのである。

彼は、ありとあらゆる手持ちの時間を、本来の倍持っていると言うことなのだ。しかも口ぶりからして、専用の調整を施されたデイズイであれば、二倍以上時間を引き伸ばせるに違いない。

時間が倍あったら、どれほどの有利になるのか。

言うまでもないことだ。

スパーサーの転位攻撃を避けられたことにも、納得がいく。

転位からの攻撃は、とても一瞬では見切って避けることなど出来るものではない。

だが……一瞬が一瞬でなく、その倍の時間を用意されていれば……。

『反則、じゃない……』

思わず、悠希は呟いていた。

『俺からしたら瞬間転位も十分に反則と思うけどな。まあ、宝の持ち腐れじゃどうしようもないが』

気付けば……アヘッド部隊のブレードが全機撃墜されてしまっていた。

スリンガーは最後のランサー二機に挟まれていた。

二機のランサーが、腕に内臓されたマシンガンから無数のペイント弾が発射する。

それを易々と避け切って、スリンガーは片方のランサーの背後に回り込むと、その背中にビームライフルの銃口をあてて、トリガーを引いた。

撃墜判定。

これで残ったのは……スパーサーと、そしてヴァーミリオン部隊の隊長機。つまり、悠希と綾香だけとなった。

『時間を引き延ばすスキル、か』

悠希の目の前に、綾香からの通信チャンネルが開く。

『……やるぞ、悠希』

綾香の瞳は、欠片も諦めを抱いてはいなかった。

『ええ……』

それを心強く感じながら、悠希は……スパーサーは両手のブレードを構えた。

『合わせなさいよ、綾香！』

『馬鹿、そりゃこっちの台詞だ』

まずランサーが、スリンガーに突っ込んだ。

槍を真っ直ぐに構えて、深紅の機体が翔ける。

それを軽く回避してスリンガーはビームライフルをランサーに向け……そこにスパーサーが転位して、ブレードを振るってきた。

ブレードはスリンガーの装甲を掠めるのみ。

とても、あたったなどとは言えない。

それでも……さっきまでは掠らせることすら出来なかったのだ。

やれる、と。そう実感を得る。

スパーサーがスリンガーの背後に転位してブレードを突き出す。

それをスリンガーが避けたところに、今度はランサーの突撃。

身を捻る様にしてスリンガーは突撃を回避した……かと思った次の瞬間、スリンガーの脚がランサーのコックピットを装甲の上から思いきり叩く。

『……う、あつ！』

装甲越しとはいえ、綾香を襲った衝撃は半端なものではない。

『綾香！』

叫んで、スパーサーがスリンガーを斬りつける。

振るわれたブレードを……スリンガーはビームライフルの銃身で弾くように逸らした。

『な……！』

驚く間に、スリンガーのビームライフルがランサーに向けられ……銀色の光。

最後のランサーが撃墜された。

悠希は、目の前が真っ暗になるような錯覚を感じた。

『……なんなのよ』

一対一。

スパーサーは、スリンガーと相対する。

たかが、量産機だ。

そのたかが量産機に、味方十五機が墜とされて……その結果与えたのは、ほんの小さな掠り傷のみ。

勝てる気がしなかった。

『……なんなのよ、あんたは！』

悠希は、許せなかった。

何よりも、勝てないと、そう思ってしまった自分自身が。

『負けるわけには、いかないのに……私はっ！』

思い出す。

ずっと昔、自分が幸せだった頃を。

両親が、自分が、笑っている風景。

それは脆くも崩れた過去。

アニルによる天都の食糧生産プラント？芽吹^{めぶき}”襲撃事件。それに巻き込まれて、両親は宇宙空間に投げ出され、遺体すら回収されずに死んだ。

当時の悲しみは、今は少しだけ薄れている。

それでも、憎しみだけは、ずっと燃え盛っていた。

アニルを倒す。その為に。

『復讐の為に戦う、か』

『……人のこと、勝手に調べたの？』

『お前のことなんて何一つ知らなくても、その目を見れば、すぐに復讐したがつてる人間だって分かる』

裕真の咽喉が鳴った。

『なにが、おかしいのよ……！』

『おかしいさ。別に復讐の為に戦うとは言わない。けれど、それで自分は自分を傷つけるのか分かっているのか？ 守りたいものを、ちゃんと握り締めてるのか？』

『なんですって？』

彼の言っていることが、悠希には理解できなかった。

『……いいや、気にするな』

その時。

甲高い音が、スリンガーの機体から発生した。同時に眩いばかりの銀の光が放出される。

『言っても分からないだろ。だから、とりあえずは、あれだ』

スリンガーから煙が上がる。

限界以上の稼働に機体が悲鳴をあげているのだ。

ぞくり、と。

悠希の背筋を冷たいものが撫でた。

『——終わりだよ』

そして……気付けばスパーサーの目の前にスリンガーがいて。

銀色の光線が至近からスパーサーの胴体に命中する。

『…………え？』

悠希の目の前に、撃墜判定、機能停止という文字が浮かび上がった。

FIRE

「悠希！」

私服に着替えた悠希が飛び出すのを、しかし綾香は止められなかった。

「……」

綾香は廊下の角に悠希の背中が消えるのを見届けるしかない。

その姿が消えて、彼女は通路の壁にそっとよりかかった。

綾香にも、少しは理解出来る。

裕真の強さを目の当たりにして、綾香自身今も半ば呆然としているのだ。

これまで最強と呼ばれ続け、人一倍強さに固執する悠希であるから、そのショックは綾香の比ではあるまい。

「……悠希」

悠希は、綾香にとってまるで妹のような存在だった。

能力的には遥かに悠希の方が高くとも、綾香はその精神的な脆さを察していた。それを、どうにかしたいと思っていたのだ。

だが、現実にはこれだ。

綾香の言葉では、悠希を止めることすら出来ない。

いつも姉気取りの癖に、なんて様だ。小さく、彼女は自分を叱咤する。

ふと、そこに裕真が通りがかった。

彼は壁によりかかる綾香を一瞥すると、そのまま彼女の前を通り過ぎる。

「声の一つくらいかけてくれないんじゃないのか？」

綾香の言葉に、その足が止まる。

「声をかけてほしいのか？」

「別に。私は、正直言えば、お前みたいなやつが嫌いだ」

裕真が片方の眉をあげた。

「なら無視すればいいだろ」

「いいから、少し話に付き合え」

「……まあ、いいけど」

軽い溜息を零して、裕真は綾香とは反対の壁によりかかる。

そして手に持っていたボトルから伸びるストローに口を付けた。

「……一応、分かってるんだ」

たつぷり間を置いてから、綾香が重い口を開く。

「なにを？」

「お前の言うことは間違っていない。復讐で戦えば、きっと痛い目を見るのは悠希自身なんだろうさ」

家族の仇討ち。

そう言えば聞こえはいいが、結局のところそれは、ただ憎しみで戦っているだけ。ただ自分を害したものを害したいという、暴力的なものではない。

そんな感情で戦えばいつか過ちを犯す。

綾香も多くの戦いを乗り越えて来た。だからこそ、それを知っていた。

「けれど、あいつには力がある。アニルなんかじゃ敵わない力が。だから別に今指摘する必要はないって……私は、あいつの傷に触れるのを避けていた」

裕真は黙って綾香の言葉を聞いていた。

「でも、お前の、悠希よりもずっと強い力を目の当たりにして……悠希の力が絶対のものなんかじゃないと気付いた……。やっぱり、私は悠希に言うべきだったのか？ 復讐で戦うな、って」

「あのさ、あんた何か勘違いしてないか？」

どこか呆れたように、裕真は綾香に視線を向けた。

「え？」

「俺は別に復讐で戦うとは言ってない。ただ、それだけで戦うなと言ったんだ」

「復讐だけで、戦うな？」

「そうだ。復讐って言うのは、火だ。敵を焼き払うには、その火がなくちゃどうにもならない」

裕真は、戦う人間の誰もが復讐心を抱いていると思っている。必

要不可欠だとも。

それは、些細な復讐でも構わない。

アニルがいなければ火星にいけるのに、と。そんな願望だって、突き詰めてしまえば復讐になる。

「ただし、それと同じくらいに必要なのが、火をきちんと扱う為の意思、復讐に後先を見失うことのないように自分を制御する冷静さだ。それが足りないと、火は敵以外も焦がすことになる。……例えば、自分、とかな」

「随分、分かったように言うんだな。経験論か？」

「さあ、どうかな」

裕真が微かに苦笑した。

「でも、悠希の火は大きい。そして、彼女はまだ子供だ。復讐を抑えるだけの意思なんて……」

「それはあんたが心配することじゃなく、あいつ自身がどうにかすることだろう。第一、戦場に出た以上は大人も子供も関係ない……。あんたが心配するのはそんなことじゃなく、あいつにどうやったらそれを気付かせてやれるかってことじゃないのか？」

そう言つと、裕真は壁から背中を離して、歩きだしてしまう。

綾香が、その背中に質問を投げかける。

「……お前の火は、なんなんだ？」

歩みを止めることなく、振り返りすらせずに裕真は答えを口にした。

「あんな奴らがいなければ、もっと平和な世界だったんだろうな……って。そんな、誰もが思ってる当たり前のことさ」

裕真の姿が見えなくなる。

しばらくして、天井を見上げながら、綾香は口を開いた。

「だけど、当たり前のことだからこそ、忘れがちになるんじゃないか。凄いな……当たり前のことを当たり前に思えるなんて、きっと何よりも難しいのに」

+

「やっぱりオマエは人がいいよな。まったく、見かける人間全員の背中を押してたら、そのうちオマエの腕は折れるぞ？」

アルトオブリガードの艦内。マリーナは呼びだした裕真に、突然そう告げた。

「いきなりなんですか。別に、俺は誰の背中も押してませんよ。ただ、足手まといになられちゃ困るから助言の一つくらいしてやってるだけです」

「それが背中を押してるっていうんだよ。まったく、オマエという奴はいちいちアタシの言うことを否定するんじゃない」

紫煙を吐き出して、マリーナは手元のモニターを操作した。

裕真の前に新しいモニターが現れ、そこに様々な報告が表示される。

「とりあえず、これまでの成果だな。これは、世界各国から送られてきたご機嫌取りの数々だ。ふん、滑り出しは順調といったところか。どいつもこいつもこっちの技術を欲しがってきてる。この調子ならエデンの未来は明るいな」

「政治には興味ありませんよ。俺としてはエデンの物資問題が解決されれば満足です」

「アタシだってそうだ。これはエデンに送って、あちらの政治屋共に処理させるとしよう」

次いで、モニターに例の要求物資のリストが映る。

「今のところ、アタシらの要求は半分程度が受け入れられている。そこで、こちらから譲歩として、五機の“ガーディアン”を天都側

に一時貸与することにした。もちろん、整備はこっちで受け持つから、分解されて調べられることもない。これで実際に戦果を挙げて見せれば、もう少し要求を吞ませやすくなるだろう。ちなみに、貸与先の部隊はこっちから指定した。下手な部隊に配備されて満足に活用されないのは論外だからな」

聞いて、すぐに裕真はマリナーの意図を察した。

「ヴァーミリオン部隊ですか」

あの部隊は、丁度五人からなる少数精鋭部隊だ。

その能力も演習で十分に把握出来ている。

ヴァーミリオン部隊ならば、新型ソアレイ―ガーディアンを与えるのに不足はないだろう。

「本当は月坂にくれてやりたいんだがね。生憎と、ガーディアンはスキル使用を考慮した造りになっていない。改良する時間もないし、諦めるしかあるまい」

モニターが消える。

「あいつに余計に性質が悪くなられるのは勘弁してもらいたんで、

ありがたい話ですね」

「それに、あと少し機体の性能が違えば、オマエでも彼女に勝てるかどうか分からないしな」

裕真が、心外だと言わんばかりの顔をする。

「別にそういうわけじゃありませんよ。ただ、変に助長されても困るだけです」

「強がりめ」

「そういうことじゃありませんって」

だが、なんだかんだと言いながらも、やはり裕真は内心で冷や汗を流していた。

マリーナの言う通りだった。

もしスパーサーの性能がガーディアンほどもあれば、きっとデイズに乗った裕真であっても簡単に勝てはしないだろう。

助長されても困る、というのも嘘ではない。

デイズと互角、あるいはそれ以上に戦えたなら、きっと悠希は悩むのを止めるだろう。自分の強さに満足し、それを振るうばかりになるに違いない。

それでは困るのだ。

裕真としては、折角の機会だから、悠希には今回の敗北から、自分の戦いを考え直してもらいたかった。

「……まったく、本当に面倒見のよすぎる奴だよ、オマエは」

全てを見透かしたような口ぶりで、マリーナは煙草を灰皿に押し付ける。

「だから——」

「はいはい、足を引っ張られるのが嫌だから、だろ？ 分かっている」

「ならなんでそんなニヤニヤしてるんですか」

「おっと、こりゃ失礼」

指摘されて、マリーナが表情を戻す。

「ま、そういうわけで、オマエはこの先、あんまり前に出ないで最低限、天都を守る行動だけしてくればいい。でないと、オマエがガーディアンの見せ場を奪いかねん」

「そんなヘマしないでしょ……まあ、分かりました。俺としても楽が出来る分には大歓迎ですしね。最近は学校なんてところに、どつかの誰かのせいで行かなくちゃいけなくなって余計に疲れてるんです」

「……皮肉屋だよな、オマエ」

げんなりとした表情をマリーナが浮かべる。

「そういえば、学園と言えば、オマエはもうクラスに馴染んだか？」

「あー、まあ、そこそこですかね。雰囲気としてはエデンの教導とあんまり変わりませんよ」

「学業教育と軍事教育を並べるやつがいるか。確かに、同年代が集まるという点ではそうなのだろうが」

「そういうマリーナ先生はどうなんですか？」

わざわざ先生と付けて尋ねた裕真に、マリーナは苦い笑み。

「ま、分かっていたことだが、腫れもの扱いだよ。まったく悲しい。いつそアタシも学生として学校に行くべきだったか」

「歳を考えてください」

裕真が鼻で軽く笑う。流石のマリーナも、その態度にはいささか苛立ちを覚えたらしく、少しばかり目つきが鋭くなる。

「失礼な。古辺よりかはずっと若く見えるだろうが」

「古辺って……ああ、昔マリーナさんの専属テストパイロットだったっていう、あの人ですか。……単に、あの人単に老けて見えるだけですから、それと比べたってどうしようもありませんよ」

裕真も天都に来た時に古辺の顔を見た。

一見すれば、マリナと同年にも関わらず、古辺の外見は五代とすら見間違えてしまう。本来の年齢よりも二十以上も増して見えるのだから、余程だろう。

「なんなんだ、オマエ。少しは世辞の一つでも言ってみろ。まったく」

「そんな器用じゃありませんよ」

不機嫌そうなマリナに、裕真は大げさに肩を竦める。

「……それもそうか」

あつさりと納得されて、自分で言っておきながら、裕真としては困った顔をするしかない。

「じゃあ、話はこれでお終いですか？」

「ん、ああ。そうだな……特別、話すことはこれ以上ない。なんなら昔の古辺の失敗談を聞かせてやってもいいが……」

「あまり興味がないので、死ぬほど暇になったら聞きますよ」

「……そうか。なら、もう用はないな。戻っていいぞ」

「お疲れさまでした」

軽く会釈して、裕真はマリナーの部屋を出る。

——ドアが閉まる直前。

「あまり入れ込むなよ。オマエも、巻き込まれて死ぬぞ」

廊下に出た裕真は、小さく笑った。

「……目の前に馬鹿がいたら、どうしても気になっちゃうんですよ」

これは、性分で、きっとこれから一生直ることはないだろう。

頬を搔いて、裕真は自室に向かって歩き出した。

学校で提出された課題を終わらせなくてはならなかった。

IMPATIENT

裕真達が天都にやってきてから、二度目のアニルとの戦闘。

天都の外縁に立つディズイのコックピットで、裕真はその戦いを眺めていた。

敵の規模はさほど大きくはない。百から二百の群れだ。

さしたる驚異でもない。

……にもかかわらず、裕真は落ち着かなかった。

その原因は、間違いなく戦場をがむしゃらに駆け巡る一機のソアレイド。

院銀色のソアレイド――スパーサーの戦闘には、過激さは増しても、その分精彩が大きく欠いていた。

まず、転位を上手く使えていない。どんな位置に、どういうタイミングで、どう次に繋げるかをまるで考えてない。ただ目に着いたアニルの背後に転位しているだけだ。

そのせいか、アニルの攻撃が機体を掠めたのも一度や二度ではない。

なんて有様だ。

更に悪いことに、スパーサーの動きそれ自体も劣悪化している。ブレードがアニルの急所を外れ、一撃で仕留められない場合が多すぎる。

まるで素人のようだった。

裕真は視線をひとまずスパーサーから逸らす。これ以上見ていたら、思わず飛び出してしまいそうだ。

次に視線が向いた先では、五機のガーディアンが活躍している。

新型機のガーディアンが配備されたヴァーミリオン部隊の調子は、スパーサーとは正反対だった。

ガーディアン^①の武装はランサーのそれと同一のもので揃えられている。ヴァーミリオン部隊に合わせた結果だ。

新機体との調整をまだ一時間もしないにも関わらず、綾香をはじめとした部隊員達は見事にガーディアンを乗りこなし、アニルを殲滅していた。

ヴァーミリオン部隊の基本的な戦闘手段は、三人が前衛、一人がビームカノンでの支援、一人がそのカノンを発射している機体の護衛という形になっている。

綾香は前衛の一人として、アニルを次々に貫いていく。

後衛からビームカノンの眩い銀色の砲撃が放たれ、複数のアニルを一度に墜としていく。

すぐに、ヴァーミリオン部隊がいた一角の殲滅は完了した。

『……凄い性能だな。手綱を放さないだけでも精一杯だ』

『どこが。随分上手く乗りこなしてるじゃないか』

『お前に言われても、お世辞にしか聞こえないね』

裕真の言葉に綾香は口の端を小さく歪め、スパーサーのいる方向を見た。

途端。その戦い方に、彼女の表情が曇る。

『……悠希』

今のところ、戦果はスパーサーよりもヴァーミリオン部隊の方が高い。

誰も……綾香自身、そして悠希自身も予想しなかったことだ。

スパーサーはこれまで、それほど圧倒的な戦果を誇っていたのである。

スパーサーとヴァーミリオン部隊の戦果が逆転したのは、新型機が配備されただけが全ての理由ではない。悠希のでたらめな戦い方もその一因に間違いなかった。

悠希もそれに焦っているのか、さらにミスが増える一方だった。

『お前、そろそろ落ち着いたらどうだ』

いい加減に見ることすら耐えがなくなった裕真が通信を開いて言う。

『うるさい。私は十分落ち着いてるわよ』

『どうやったらそんな断言が出来るんだか……』

デイズィが右手のビームライフルを横に突き出して、トリガーを引く。

『これで何匹目だ、取りこぼして通過させたのは』

銀の粒子に頭部のだ真ん中を貫かれたアニルの亡骸が宇宙に漂う。

あと少しで天都に到達しかけていた個体だ。

『それは……ちゃんと仕事が出来ない連中のせいでしょう！』

『そう言えなくもないがな……』

アニルが天都に到達するのを全てスパーサーだけで防衛しなくて

はならない、なんてルールはどこにも存在しない。

本来なら他のソアレイと協力するべきところだ。

しかし、裕真が視線を向ける一帯には、スぺーサー以外の機体は、一機もなかった。

スぺーサーは、その能力の高さから他のソアレイよりも多くの敵を一挙に請けおってきた。その実績から、他のソアレイはスぺーサーが担当する場所とは別の場所でアニルの掃討を行うようになっていたのだ。

だから、スぺーサーが逃がした敵を倒すサポートがない。

スぺーサーばかりにアニルを押し付ける連中が仕事を怠慢している、といえばそれまでだが……スぺーサーが逃がすアニルの数が増えていってしまうのも紛れもない事実。

裕真にしてみれば、どちらもが仕事を満足に出来ていなかった。

『悠希、援護するぞ』

『別にいいわ、他を手伝ってきて』

綾香の申し出に、悠希の答えは冷たい。

『……そう、か』

拒絶の声に、綾香は思わず声が引き攣った。

『なら、頑張れよ』

しかし、すぐにいつも通りの調子を取り戻して、ヴァーミリオン部隊は他の部隊の援護に向かう。

その際、通信モニター越しに綾香が裕真に含みのある視線を向けたが、彼はそれに小さく溜息で返すだけで、なにか明確な言葉で応えることはなかった。

『あとで謝っておけよ』

小さく裕真が悠希に言う。

『なんで』

『……さあ、なんでだろうな』

デイズィの銃身が、静かに動いた。

その狙いは、スパーサーの方向に定められている。

『……なんのつもり？』
『こっぴつつもりだよ』

熱量がデイズイのライフルから排出される。

打ち抜かれた巨体が、力なく宙を飛んでいく。

一発、二発と、連続した発射音。

その度に、スパーサーの周りにいるアニルが打ち抜かれていった。

アニルとデイズイの距離は大きく開いている。

相変わらず、恐ろしいほどの精密射撃だった。

『援護はいらないうって言うてるでしょう！』

悠希が怒鳴る。

『そつは見えなかったんだよ。この馬鹿が』
『うるさいー！』

スパーサーが手近のアニルを無理矢理に叩き斬る。

『アニルに当たる分にはいいが……そんなのだから馬鹿だってんだよ』
『っ……っ』

そんなスパーサーの背後で顎を開いていたアニルをディズイの銃弾が撃ち抜いた。

『まともに戦えないなら戦場に出るな』

そして横殴りの銀の雨は、アニルを次々に撃ち落としていった。

スパーサーの出る幕は、ない。

+

「なあ、大丈夫か？」

シャワー室の中に、綾香の心配そうな声が反響する。

熱い水滴が肌を打つ感触を確かめる様に悠希は自分の胸元を撫でて、小さく笑んだ。

「うん、大丈夫」
「……けど」

笑っていても、彼女の顔はどことなく暗い。

明らかに、大丈夫、という顔ではなかった。

まるで今にも崩れてしまいそうな、そんな予感を綾香は覚える。

「それよりも、あの機体、凄いわね。ガーディアンだっけ？」
「あ、ああ……」

誤魔化すよう話題を切り出してきた悠希に、綾香は微かに頷く。

「流石はソアレイの生みの親が造っただけのことはあるわよね」
「そうだな……ランサーより、ずっと力を感じた」
「力、か……」

一瞬、悠希の表情に陰が差した。

綾香が気付く前に、その陰はどこかへと隠れてしまう。

「私のスパーサーも、あんな性能があればいいんだけどね」

そうすれば私だって……。

続きそうになった言葉を、かろうじて悠希は呑みこんだ。

別に、機体性能を語るのが幼稚と誤解しているわけではない。むしろ、それこそが戦場で最も運命を左右する要因だという確信がある。それでも……どうしてだか悠希には、スパーサーの性能が上がったとしても、それだけでは自分は……裕真には届かないと、そんな思いがあった。

だから、その言葉を口に出来ない。

「大丈夫だよ、悠希」

シャワー室の仕切り越しに、綾香は出来るだけ明るい声を出した。

「お前は強い。これから、もっと強くなる」
「……うん」

悠希は頷くと、シャワーを止めた。

「私は先に出るね。今日は、その……ごめん」
「うん？ なに謝ってるんだ？」
「……なんでもない。気にしないで」

悠希は早足でシャワー室を出て、タオルを手を取った。

「……強くなる、か」

そのタオルが、硬く握られる。

濡れた髪の間から、鏡に映る自分の姿を見た。

「そうだ、私は、強くなる」

アニルを倒す為に。

復讐するために。

あの蟲どもが私から奪ったものの何十倍も、何百倍ものものを奪ってやるんだ。

「その為にも……絶対に」

悠希の胸の奥から、どす黒い溶岩のようなものが滲みだす。

「誰よりも、強くなるんだ……」

それは……どこまでも研ぎ澄まされて、どこまでも凶悪な復讐。

「母さん……父さん……」

同時に、純粹な復讐でもある。

温かな滴が、床に落ちた。

WEAKNESS

学校に編入して四日目。休日を一日挟んだことを差し引いても三日。

裕真は、それなりにクラスに馴染むことに成功していた。

素性は隠したままだが、彼は意外にも人を引き寄せる。なんと言えばいいのか、面倒見がいいというか、お節介というか……変な言い方をすれば、クラス委員気質なのだ。性格はぶっきらぼうなのだが、そのギャップがクラスメイトに思いのほか好評らしい。

「直衛、今日の放課後って暇か？」

「君の歓迎パーティーをしようか、って話になったんだけどさ、どうかな？」

「ん……？」

朝に自分で用意した弁当箱をついついている裕真に話しかけてきたのは、沖田おきたと白井しらいだった。クラスのトラブルメーカー、もといムードメーカーの二人である。

「あー……悪い。それ、ちょっと遠慮させてもらっていいか」

裕真は申し訳なさそうな顔をしながら、手短に誘いを断った。

「なんだ、なんか用事でもあるのか？」

「いや……そういうわけじゃないんだけどな」

どう言っただけなのか、と裕真は思考を巡らせた。

彼にとっては、ここは仮住まいだ。

あと三日程で去る予定になっている。

どうせ歓迎会などされても、すぐに裕真はこの学園どころか天都を出ていくのに、わざわざそんなことをさせるのは少し申し訳なく感じられたのだ。

「ほら、俺って来る時も急な転校だったろ？ それって親の仕事について回ってるからでさ。どうせまたすぐに転校することになると思うんだよ。だから歓迎会なんて別に……」

「いやいや、それがどうして歓迎会を断る理由になるんだよ」

何言ってるんだ、こいつ。と言わんばかりの沖田の顔。

「別にいいじゃんか。例えば明日転校だろうと、歓迎しちゃいけないってことはないだろう？」

「そうだよ、直衛君」

そう言う二人に、裕真は頬を掻いた。

随分と人のいい奴らだ。

彼は少し考えてから、まあ息抜き程度にはいいか、と思い、頷こうとした時。

「それに、歓迎会を開かないと女子を集められないじゃない」

白井が、そう漏らした。

……ああ。

裕真は、なんとなく納得した。

白井は背丈はそれほど高くもなく、おとなしい顔つきの、どこか母性本能をくすぐる様な、いかにも草食系男子という感じの男子なのだが……その実、とんでもない色欲魔というのは転校してきたばかりの裕真でも気付いていた。

というか転校初日に好みのバストサイズについて聞いてきた段階で、気付かないわけがない。

「お、おい馬鹿、白井。今それをばらすことはねえだろう！」

「え……あ。いやっ！ な、なにも言ってないよ、直衛君！ 僕は

決して女子云々なんてことは言っていないよ？ 純粹にね、直衛君を歓迎したいなー、って」

沖田の言葉にはっとして、慌てて白井が弁明する。

「つまり、俺は女子にお近づきになるためのダシにされるわけか」

意地の悪い笑みが裕真の口元に浮かぶ。

「うぐ……」

「い、いや。でもな、直衛。きちんとお前を歓迎するつもりなんだぞ？」

「そうだよ。うん、凄い歓迎会にしてみせるからね？」

「じゃ、男子だけで歓迎会してくれ、って言ったらどうする？」

これまた、意地の悪い問いかけだった。

「……えー」

「……じゃ、やんなくてよくない？」

あからさまに二人の態度が変わる。

「正直な奴らだな、おい」

いっそ感心したような顔で、裕真は頼杖をついた。

「……まあ、少しくらいなら付き合ってやるよ」

「え……？」

「だから、歓迎会でもなんでも好きにしろって言ってるんだよ」
「いい、の？」

白井がおずおずと裕真に窺いを立てる。

「少しは楽しませろよ」

裕真の言葉に、二人のテンションが一気に上がる。

「よっしゃ！」

「やったね！」

「……はあ」

ハイタッチを交わす二人からは見えないように、裕真は溜息を吐きだす。

ふと、視線を感じた。

そちらを見ると、悠希と目が合う。

鋭い目つきだった。

裕真としては、なんで自分がそんな目で見られなくてはいけないのか、そんな心当たりは——いくつかあるが。

どうしたものか、と。とりあえず裕真は軽く手を挙げて挨拶らしいボディランゲージを試してみた。

すると悠希の目がさらに細められ、彼女は鼻を一つ鳴らすと、教室を出て行ってしまふ。

彼女は気に入らなかったのかもしれない。自分が強くなる為に努力しているのに、なぜこうも平然と学園生活を満喫している裕真が自分よりも強いのか。

悠希が行った教室のドアを少し眺め、裕真は少し考えてから、食べ終わった弁当の蓋をしめて、それを鞆の中にしまった。

「ん、どこに行くのか？　これから歓迎会の細かいところについて話し合おうと思ってたんだが」

「俺は少し用事があるから、お前らで決めておいてくれ」

「そっか、じゃあまた後でね」

「歓迎会には期待してくれよ？」

「ならたっぷり期待しておくとするさ」

沖田と白井にそう告げて、裕真は悠希の後を追って廊下に出た。

左右を確認して、目的の背中が階段の方に消えたのを見る。

その後を追いかける。彼女は屋上に向かったらしい。

裕真は階段を上ると、屋上のドアを開けた。

風が吹き込む。

屋上は閑散としていた。人の出入りが少ないのだろう。

そんな空間の真ん中に、悠希の姿を見つける。

彼女は屋上のドアが開いた音で裕真の存在に気がついて、嫌悪感を隠そうともせずに表情に出した。

「……なによ、あんた。ストーカー？」
「ストーカーって……」

開口一番にそれが、と裕真は困眉をひそめた。

「お前が俺のこと見てたから、なにか用事かと思ったんだが、違ったか？」

「なんで私があんたなんか用事があるの？」

決闘の申し込みとか。などという言葉が口から滑り出そうになつて、裕真は慌てて唇を固く閉じた。

ここでそんな悪ふざけを言えば、空気がさらに険悪になることは目に見えている。

「邪魔だから、どっか行つて」

「辛辣だな」

なにか用事かと思つた、という裕真の言葉は、ただの方便だ。

実のところ、彼が悠希を追いかけたのに、あまり理由はない。

ただ、なんとなく話しておいた方がいいかもしれない、という考えだけがあつた。

いくらなんでも、悠希は様子はあまりにも危なつかしく、このまま放つてはおくことはどうしても出来なかったのだ。

「なんでお前はこんなところにいるんだ？」

見たところ手ぶらで、昼食を静かに食べたい、というわけではなさそうだった。

「私の勝手でしょう。それよりも、さっさと消えなさいよ」

「お前がここにいるのが勝手だつて言うなら、俺がここにいるのも勝手だよな。消えろだなんて言われる筋合いはないよ」
「……」

悠希の表情が不快の色に染まる。

いやはや嫌われたものだ。裕真は内心で苦笑した。

近くにあつたベンチに腰を下ろす。

「お前もどつか座つたらどうだ？」
「……ふん」

裕真の言葉を見無視して、悠希は彼に背中を向ける。

「やれやれ」

それきり、しばらく沈黙が続いた。

裕真はぼんやりと悠希の横顔を眺める。

彼女は裕真の視線などまるで気にしない様子で、ぼんやりと空を見上げていた。天蓋に映し出された人工の空には、いくつもの雲が現れては消えていく。

どこことなく、空気は穏やかになっていく。

今なら、ちょっとした質問くらい聞いてもらえるかも知れない。

裕真は思い切って、気になっていたことを尋ねてみることにした、

「どうしてそんなにクラスメイトと距離を取るんだ？」

「……いきなりなによ」

迷惑極まりない、といった感じで悠希は裕真を睨んだ。

「いや。別になんとなく気になったただだから、答えなくてもいいけどな」

悠希はクラスでは……というよりも学校では、かなり浮いている。

周囲に人を寄せつけない刺々しい雰囲気、頻繁に欠席、遅刻、早退を繰り返すというのが関係しているのだ。

後者は軍関係のことで仕方ないし、秘密にされている情報なので下手に弁明出来ないのも分かる。

裕真としては別に悪いことをしているわけではないし普通に情報を公開してしまえばいいと思うのだが、そこは高校生を最前線で戦わせているなどと世間に知られたくないという軍のプライドや悠希自身の意思もあるので、口には出さない。

だが、前者。雰囲気については、悠希次第だろう。

せめてもう少し棘をなくせば、友人の一人や二人、出来るのではないだろうか。

それをしないのは、一体どういう理由なのか。

「……嫌いだからよ」

まさか返ってくると思っていなかった返答に、裕真が目を見くろした。

「嫌いだからって……なんで嫌いなんだ？」

調子に乗って、続けて質問を試みる。

「弱いから。どうしようもないくらいに、弱いから。アニルが何かの間違いで天都を破壊してしまったら、あっさりと無抵抗で死ぬくらいに弱いから。だから嫌い……弱い人間は、嫌い」

「その天都を守るのがお前の仕事だろうに」

「口を挟むなら、聞かなければいいじゃない」

「こりゃ失礼」

降参するようなポーズをとって、裕真は口元に笑みを浮かべていた。

「なにがおかしいの？」

悠希が裕真を睨めつけた。

「ん、いや……お前は弱虫だな、と思ってさ」

「弱虫、ですって……？」

「ああ」

彼女が何か言い返そうとして、それより早く裕真は言った。

「弱いから嫌いって……違うだろ。お前、本当は単に親しくなった人間が死ぬのが怖いだけじゃないか」

「——っ」

「あれだろ。もし誰か親しい人間が自分の傍からいなくなったら、とかさ。そんなことが不安なんだろう？」

悠希が動揺を見せる。

裕真の、言うとおりであった。指摘されて、悠希自身も今更にそのことに思い至った。

子供の頃、両親が突然いなくなつて。それ以来、彼女は恐れていたのだ。

誰かが近づくと吐き気がした。無性に暴れたい気分になった。だから、他人との距離をとろうと思つた。

でも、それは……両親を失つた時のように、親しくなつた人を失うのを恐れていたからだつた。

ならば親しい人など作らなければいいと、彼女はどこかでそう思つていたのだ。

さらに一步、二歩と彼女は後ろに退く。

——私は、弱虫なのだ。

また、自分の弱さが一つ露呈した。

彼女にとってそれは、何よりも重い事実だつた。

胸の奥が凍りつくような錯覚。

気付けば、悠希は地面を蹴っていた。

「まあ、そういう不安は誰にでもある。もちろん俺にだってな。要はその不安にどう打ち勝つかだけだ、あまり深く考えなくても案外すぐに答えは出るさ。それに、そういう気弱なところがあつた方が可愛げが——」

ばたん、と。

屋上のドアが閉まる音。

「……あれ？」

きよとん、と。裕真が屋上を見回す。

そうしてようやく悠希が屋上から走り去ったのだと気付く。

だが、裕真にはどうして悠希がいきなり去ったのか、理由が分からなかった。

「——……俺、なんか怒らせるようなこと言ったか？」

裕真は一人、首を傾げた。

SORROW

午後の授業を無視して悠希が訪れたのは、軍の基地だった。

気付けば彼女の足は更衣室に向かい、素早く制服からアクティヴスーツに着替えていた。

「あれ、悠希。お前、学校は――」
「後にして」

ハンガーの入り口ですれ違った綾香の脇を抜けて、そのままシミュレータールームに飛びこむ。

息は荒い。

胸のつかえが肺を圧迫していた。

強くならなくちゃ。

強くならなくちゃ、このつかえは取れない。

そんな強迫観念じみたなにかが足元から這いあがって来る。

何台も並ぶマシンの一つに入る。

シミュレーターは、ソアレイに搭乗すると同じ状況を仮想的に再現し、それによって訓練を行う。

シートに腰を下ろして、アクティヴスーツの両手首にあるスロットにプラグを差し込む。

悠希は認証キーを機械に差し込んだ。マシンがスパーサーの機能や反応をフィードバックする。

身体から何かが抜ける感覚と、それとは別に何かが入り込んでくる感覚が同時にした。

意識が機体情報と同調していく。

暗闇に光が灯り、宇宙空間が広い視界に浮かび上がった。

悠希は静かに視線を巡らせた。脳に直接叩きこまれる視覚情報は、どこまでもリアル。

宇宙の果てから、アニルの群れが現れる。

彼女がトレーニングマシンで行うメニューは、アニルの殲滅、それだけだ。

即座に転位のスキルが発動される。

一匹、二匹……。

アニルの屍が次々に宇宙に放り出される。

ひたすらにショーサーはアニルを切り裂く。

反復作業。

このトレーニングの成績は、墜とされるまでに何匹のアニルを倒せるかによるものだ。

悠希の最高記録は、同時にこの基地での最高記録でもあった。

だが――。

今回の悠希は、ただか数百匹程度で終了、撃墜されてしまう。

最高記録の、半分にも遠く及ばない。

「――」

信じられなかった。

これが自分の力が、と。

こんなものでいいのか、と。

腑抜けた自分が、ひどく惨めなものに思えた。

迷うことなく、悠希はシュミレーションをリスタートする。

倒し、墜とされ、倒して、墜とされた。

何度も、何度もそれを繰り返す。

強くならなければ、と。それだけが彼女の内で渦を巻いていた。

ひたすらに、強くなる為に生きて来たのだ。アニルを滅ぼす、そればかりを目的に。

もう、なにも奪われたくなくて……。

だから、繰り返す。

自分が強く慣れるまで。

悠希自身一体何回繰り返し続けたのか、何十分、あるいは何時間続けていたのか分からない。

突如、視界から光が消えた。

シミュレーターが停止したのだ。

どうして、と悠希が考えるより早く、シミュレーターの扉が勢いよく開かれた。

「おい、悠希！」

「……綾香？」

「お前、どんだけぶっ通しで続けてるんだよ！ 倒れたいのか！」

狭いマシンの内部に綾香は身を潜り込ませて、綾香は怒鳴りつける。

そこでようやく、悠希は綾香が外部からシミュレーターを強制終了させたのだと思い至る。

「まって」

「なんだ！」

「私は……もう少し訓練するから」

「っ——まだ言うのか！」

手首のプラグを力ずくで引き抜いて、綾香は悠希の肩を掴んでマシンの外に連れ出した。

乾いた音。

悠希が綾香の手を払った。

「強くならなくちゃいけないの！」

彼女が叫ぶ。

「……っ!？」

悠希が綾香の襟が鷲掴んだ。

「アニルは害虫だ！ 私の心にいつまでも噛み付いてる！ だから私は、私はアレを駆り尽くして……！」

今でも彼女は夢に見る。

両親が事故に遭った日の朝。二人が一緒に仕事場に向かって家を出ていく大きな二つの背中を……。

そうして目覚めてから、酷い虚脱感と吐き気に襲われるのだ。

ただ、アニルを殲滅した日だけは、その夢を見ないで済む。

いつしかそれは、悠希がアニルを殺す最大の理由になっていた。

「落ち着け、悠希」

「私は落ち着いてる！」

恐らくこの悠希の様子には、裕真が関わっているのだらうと、綾香は考えた。

裕真としては、悠希がしっかりと自分のことを見直す機会になれば、などと思っているのかもしれない。

しかしそのお節介は、他人には分からない、悠希の最大のトラウマを刺激してしまった。

綾香は裕真を思いきり殴りつけてやりたい気分だった。

けれど。

本来ならば、これは私がすべきことではないのか、と。

綾香は、そんな風にも感じていた。

いつまでもトラウマを抱えて生きていくのは辛すぎる。それに命が関係してくるなら、尚更に。

姉を気取るなら、まずなによりこの問題に向き合ってやるべきだったのではないか。

……今からでも、遅くはないだろうか。

「いいか、悠希。感情で戦う人間は、長生きしない。軍にはお前以外にもアニルに復讐したいって奴は、沢山いる。でも、そういうのは大抵、私が知る限りかなり危ない目に遭って……最悪、死ぬ」

綾香は言葉を吟味して、悠希に言い聞かせた。

「私はお前が好きだよ。お前は無愛想にしているけれど、私はその優しさをきちんと知っているつもりだ。その復讐だって、両親をとっても愛してなければ抱いていられるようなものじゃない。私はね、悠希。そんな優しいお前に、戦場なんかで死んでほしくないんだ」

「……」

悠希の表情は、俯いていて窺えない。

「悠希。これは私の持論だが、戦場では大量生産の規格品が最善なんだ。それは安価で、安定していて、よほどのことがない限りは信頼に見合う働きをしてくれる。考え方は悪いかもしれないけれど、私はそれは気の持ち方も同じだと思ってるんだ。戦場に人間らしい感情は——少なくとも指先を鈍らせる感情なんてものは不要だ。ただ与えられた任務をこなすことが出来ればいい。もちろんそれは道具になれというわけじゃなく、至極当然のことで、与えられた仕事くらいはしろ、ってことなんだ」

専用機に乗ってるお前にこんなこと言うなんて、おかしい話かもしれないけれどね。と。僅かに綾香は苦笑を零す。

「お前は私を軽蔑するかもしれない。けれど、言うよ。悠希」

その双眸が真っ直ぐに悠希を収める。

「それがお前の足を引っ張る記憶だっていうなら、悠希。戦場では、両親のことは忘れる」

「うるさい—」

悠希の手が振るわれた。

綾香が頬を張られる。

「そんなことが、出来るわけないのに！ 私の気持ちなんて何も知らない癖に！ 勝手なことを言うな！」

俯いたままの悠希の顔から、滴が零れる。

「大好きだった！ 母さんも、父さんも大好きだった！なのに…
…二人は死んじゃったのに、それを忘れる！？ ふざけるな、ふざけるな！ ふざけるなっ！！」

悠希はその思いの丈の全てをその言葉に込めてぶつけた。

身体を翻す。

「悠希！」

引き止める声を振り払う。

悠希はただひたすらに走る。

今は、綾香から一センチでも離れたかったから。

——強くなりたいという欲求は、この時だけは、悲しさに押しつぶされていた。

その悲しさがどんな悲しさなのかは、悠希自身にも分からない。

G I R L

「……今更、格好をつけても駄目か」

自嘲的な笑みで、綾香は壁によりかかって、そのまま崩れ落ちた。

「青春のページだったな」

と、いきなり物陰からマリーナが現れた。

綾香が目を開く。

「ワークマン博士……」

いつからそこにいたのか、綾香はまったくマリーナの存在に気付くことができなかった。

「……青春なんて歳じゃないですよ」

綾香が、下手な笑みをこぼす。

「いやいや、アタシから見ればオマエは十分に青春してるよ」

マリーナは愉快そうに言いながら、短くなつた煙草を携帯灰皿に放り込む。

煙草吸つてたのに、隠れてるのに気付かなかつたのか。

綾香はそんな自分に呆れた。

「しかし、裕真は下手なことに首をつつこんだな」

「……いえ。これは、私達で解決しなくちゃいけない問題ですから」
「それでもアイツは首を突っ込むよ。そういうヤツなんだ」

困つたように肩をすくめて、マリーナはこの場を立ち去ろうとして、ふと足を止めた。

「そういえば、よく言うよな。叩かれた方も痛いけれど、叩いた方はもっと痛いんだ、って」

に、と。

口の端が吊りあがる。

「オマエを叩いた彼女は、どれほどの痛みを感じて、その痛みはどう効果するのか……。人間の心理は専門外だが、少し興味はある」

+

歓迎会はつつがなく終了し、解散となった。

「近衛君、今日はありがとう」

「お前のお陰で女子のアドレスを三つもゲットしたぜ！」

白井と沖田の言葉に、裕真は微かに笑う。

「感謝するのは普通、歓迎会開いてもらったこっち側だと思うんだがな」

「まあ、そんな細かいところは気にすんな！」

沖田に軽く肩を叩かれる。

「近衛。今日は楽しかったぜ！」

「また明日、学校でね」

「ああ……。それじゃ俺はこっちの道だから……。じゃあな」

二人と別れ、裕真は商店街に入った。

そして……軽く溜息を吐く。

「疲れたな」

ぼそりと呟く。

とはいえ、歓迎会自体は嫌ではなかった。

正直なところ、そんなことをわざわざしてくれたことには感謝しているし、楽しさも感じていた。

けれど感謝していても楽しくても、疲れるものは疲れるのだ。

「……天都、か」

裕真は商店街の人混みを歩きながら、空を見上げた。

偽物の星が、偽物の夜空にいくつも浮かんでいる。

裕真は物心つく頃にはエデンの孤児院にいた。そして教導院でソアレイによる戦闘を学び、エデンの戦線に加わった。

そんな裕真であるから、エデン以外のエレアスに入るというのは、実は初めての経験だ。

だが……悪くないと。彼は、そう感じていた。

「こんな場所を守るために戦えるっていうのは、とても誇りあることなんだろうな……」

それは、誰に向けた言葉だったか。

裕真は空から視線を落として……ふと、その視界に気になるものを見つけた。

通りの隅、ある喫茶店の看板に隠れる様に、小さな陰が辺りを見回している。

小さな女の子だった。

裕真は、そちらに足を向けた。

迷うことなく近づいてきた裕真に女の子が気付き、看板に隠れてしまう。

「……おい」

裕真は看板の前にしゃがみこんで、反対側の女の子に話しかける。

はたから見たら看板に話しかけている危ない人だったが、裕真はそれを気にする様子もなく、決して看板の向こうを自分から覗こうとはせずに言葉を投げかけた。

「迷子か？」

「……」

ちらりと、女の子が顔を半分出す。

「……違う」

「ほー。親は？ それとも、一人か？」

すると、女の子が首を横に振った。

「お母さんと一緒にきたけど、お母さん、人ごみで迷子になっちゃった」

「親が迷子とは……なるほど、斬新な発想だな」

苦笑して、裕真は女の子に手招きした。

「なあ、そんな看板に隠れて話すなんて、人に失礼だと思わないか？」

「黙れ変質者」

迷子を気にかけてあげるといふ自分の良心を裏切りたくなってきた

た……！

まさか裕真もいきなり変質者呼ばわりされるとは予想外すぎた。

最近の子供はこんな辛辣なのだろうか、などと考えながら、さてどうしたものかと彼は首を捻る。

「交番行くか？」

「自首とは見上げた根性」

「……罪状は？」

「とりあえず、なんでもいいから有罪」

「よし帰る」

裕真が立ち上がると、すかさずその制服の裾を看板の陰から飛び出した女の子が掴んできた。

「待つて」

女の子の呼び止める声。

言われて、素直に裕真はしゃがみ直す。もともと帰る気などはなかった。

「迷子のままじゃお母さんがかわいそう」

「確かにお前のお母さんはかわいそうだな。自分の知らないところ

で娘にこんな扱いされたんじゃ」

「……？」

「なんでもない」

裕真は頭の上に疑問符を浮かべる女の子の頭を軽く撫でる。女の子がくすぐったそうな顔をした。

「とりあえず、名前聞いてもいいか？」

「……雪^{ゆき}」

ゆき、という響きに思わず裕真は目を見開いた。

「どうかした？」

「いや……俺の知り合いに同じ名前のやつがいてな。まあ、ただの偶然だから気にするな」

「ん……分かった、気にしない」

ふと、裕真は雪の顔つきが悠希に少し似ていることに気付く。

もしかしたら、月坂の子供の頃はこんなのだったのかもな。思っ
て、裕真は思わず口元を緩めた。あのつんけんした性格の彼女にも
当たり前だがこんな純粋な子供時代があったのだと思うと、無性
におかしく感じられた。

……純粋？

あえて裕真は頭の内に浮かんだその疑問を振り払った。

いきなり有罪宣告をしてきたのも、親が見ていたドラマなんかの影響に違いない。それならば、それはそれで多分、純粹で間違いない。

「さて、じゃあ雪。迷子のお母さんの特徴を教えてくださいか？」
「特徴？」

「ああ。言葉、難しかったか？ 髪が長い、とか目の色は何色、とかだよ」

丁寧に裕真が説明すると、雪は少し考えて、なにかを思いついたように口を開いた。

「知能指数は低そう」
「……」

特徴という言葉の意味すら把握していない雪が、どうして知能指数なんて言葉を知っているのだろうか。

……きっと、これもドラマとかの影響だな。

まさか子供がこのような歪んだ語彙にばかり長けているなどということがあるまい。

たまたま偶然、雪はそういう言葉ばかりをドラマから引用しているだけなのだ。

言葉の意味は、きっとほとんど理解できていない。きっと。

裕真は子供の純粋さを信じ、自分をそう納得させた。

「出来れば外見的特徴が欲しいな。服装とか教えてもらえるとありがたい」

「……お母さんの服はね、お父さんのヘソク——緑色のカーディガン」

今何を言いかけたコイツ。

ヘソクリか、その母親は夫のヘソクリで緑色のカーディガンを買ったのか。そうなのか。

……いや他人の家庭事情を探るなんて悪趣味なことをしてはいけない。

追及しそうになる自分をどうにか抑えて、裕真は周囲を見回した。

緑色のカーディガンならば、それなりに目立つ。視界に入れば、すぐにその人が雪の母親だと判別出来るだろう。

そう思ったのだが、立ち上がって周囲に視線を巡らせてみたところ、生憎それらしい女性は見つからない。

「雪のお母さんはここらへんで迷子になったのか？」

「……さあ？」

「さあ、って」

「あっちのお店でお買い物してから帰る途中に、いつの間にかいなくなってたの」

「ふうん」

雪は指さしたのは、近くに在る大型雑貨店。

となると、雪の母親はそちらとは反対方向からこちらに遡ってやって来る可能性が高い。

裕真はその人物がやってくるのである方向を向いて、雪の頭に手を置いた。

「まったく、どうして手の一つも繋いでなかったんだ？」

「お母さん、両手にお買い物もの袋もってたから」

「そうか……でもな、気をつけないと駄目だろ。次からはお母さんの両手がふさがってても、服を掴ませてもらうとかさせてもらえよ？」

「うん。分かった」

こくりと頷いた雪の頭から手を放して、代わりに裕真は雪の手を握った。

「……？」

「お母さんの来る方向は大体分かってるから、こっちからも探してみろぞ。また迷子にならないようにしっかり握ってる。そうすればはぐれる心配もないから、安心だろ？」

「ん……」

この場に留まって母親がやってくるのを待つか、こちらから探すかで迷ったが、裕真は後者を選択した。いつまでも親と離れたままでは雪が不安になるだろう、と。

「さて……緑色のカーディガン、ね」

「緑色のー、カーディガンー」

雪が裕真の呟きを真似る。

「早く見つかればいいな」

「うん。いつまでも迷子のままじゃ、寂しいもん」

「そうだな」

寂しいのは一体誰なのか。

あえて裕真は、それを尋ねることはしなかった。

STUNGUN

悠希は、頼りない足取りで街をさまよっていた。

ひどい虚脱感を感じながら、自分の手を見る。

綾香を叩いてしまった掌。

「……何やってるんだろ、私」

馬鹿みたい、と。自分にも聞こえないくらいの声で呟いて、悠希は立ち止った。

商店街の入り口だった。

人の声が、沢山聞こえる。

その一つ一つが自分を罵倒しているもののように思えて、悠希は自分の耳を塞ぎたくなった。

勝手な被害妄想だということは分かっている。

分かっている、止められないのだ。

これも自分の弱さか。

自嘲的な笑みを浮かべ、悠希は再び歩みだそうとして――。

「……悠希さん？」

その声に、悠希は後ろを振り返った。

「桜さん？」

叔母の姿を見て、悠希は妙な息苦しさを感じた。

裕真の言葉が脳裏をよぎる。

親しい人が死ぬのが怖い。

桜を目の前にして、どうしようもなく裕真は正しいことを言ったのだと、今はつきりと理解した。

母の妹。小さな頃の悠希は、もしかしたら忙しかった母親よりもこの人に遊んでもらうことの方が多かったかもしれない。

……そうか。私は、この人がいなくなるのが怖いんだ。

彼女は表情が崩れそうになるのをどうにか堪えた。

ふと桜の様子がいつもと違うことに気付く。

なにか、落ち着かない、というか。普段から温厚——というよりも、天然と言うのだろうか——な性格をしている叔母の変化に、悠希は尋ねかけた。

「どうしたんですか？　そういえば、今日はあの子は？」

そういえばいつも叔母について歩く従姉妹の姿が見えないことに彼女は疑問を抱いた。

「それがねえ……」

ゆったりとした口調で、桜は困ったように首を傾げた。

「あの子、迷子になっちゃった」
「……」

——とりあえず悠希は深呼吸をして、辺りを見渡した。

言いたいことはいくつかあったが、今はそれを後回しにする。

時間が丁度そういう頃合いなのか、人通りが多い。

人を……しかも小さな子供を探すには、最悪の状況。

「どの辺りで見失ったんですか？」

気分は最悪だった。

様々なことが悠希の胸を押し潰してきている。

自分の情けなさや、綾香への罪悪感や……裕真への劣等感。

余裕なんてまるでない。

それでも、放っておけるわけはなかった。

「ええと、あっちの雑貨店の方かしら。あそこで買い物してすぐにはぐれたから、そんな遠くにいったない筈なのだけれど……」

「そうですか」

人ごみで個人を探すと言うのは骨の折れる作業だ。まして、相手は大人が前に立てば完全に隠れてしまうような厄介な相手だ。

「……あ」

だが幸運にも、悠希はその姿をすぐに見つけることが出来た。

商店街の端辺りまで来たものの、雪の母親らしい人物は見当たらない。

もしかしたらすれ違いになったのだろうか。

来た方向を振りかえって、裕真はこれからどうするかを考えていた。

そうしながらも、雪の話に耳を傾ける。

「従姉妹のお姉ちゃんと仲が悪い、ねえ……」

雪の話は主に、そこに絞られていた。

「うん。いつつも知らんぷりされちゃうの」

「そうか……でも、悪口とかは言われないんだろう？」

「うん」

「だったら嫌いじゃないのかもしれないぞ。もしかしたら、そのお姉ちゃんに話しかける切っ掛けが見つけれなくて、話しかけたくても話しかけられないだけかもしれないじゃないか」

雪が意外そうな顔をする。

「そうなの？」

「はつきりとは言えないさ。でもまあ、向こうが知らんぷりするなら、多少強引にでもお前からお姉ちゃんに話しかけてみるのもいいかもしれないな。そうしたら、今まで分からなかったことが伝わってきたり、伝えられたりするかもしれない」

「……？」

分からない様子で首を傾げる雪に、裕真は苦笑する。

「悪い、小難しく言いすぎたか。そうだな……簡単に言えば、仲良くなれるかも、ってことだ」

「……そっか」

雪がどこか嬉しそうに裕真と繋いだ手を振り回した。

それが背後から迫るとある人物には、まるで雪が裕真から逃げだそうと腕を振り回している、なんて風に見えたのは不幸なすれ違いだったろう。

裕真は雪との会話と母親探しに集中していて、その背後から忍び寄る姿に気付かない。

「ねー。そういえば、お兄ちゃんの名前は？」

「ああ、言ってなかったつけ。直衛、直衛裕真だ」

「ゆーま」

「いきなり呼び捨てなのは大目にみてやろう——っと、危ないぞ」

裕真が人にぶつかりそうになった雪の身体を引き寄せる。

それもやはり、背後から迫るその人から見ると、裕真が無理矢理に雪を抑えこんだように見えてしまっていた。

「ゆーまは高校生？」

「ん、一応な。あと数日で辞める予定だけど」

「……？」

「あー。悪い、こつちの話だ。気にしないでくれ」

「ん……。でも高校生なら、お姉ちゃんと一緒だね」

「そうなのか？」

「うん。お姉ちゃんね、向こうの学校に通ってるの」

雪が指さしたのは奇遇にも裕真が通っている学園と全く同じ方向だった。

「ほう。俺も同じ学校だぞ」

「そうなの？」

「ああ。もしかしたら俺とお前のお姉ちゃんは知り合いかもな。お姉ちゃん、名前なんていうんだ？」

「うん。あのね、お姉ちゃんはねー」

その瞬間、裕真は背後から伸びる手に気付くことが出来なかった。

「私とおんなじで、ゆき、っていうんだよ」
「な——ぐおっ」

裕真の喉が潰される。

背後から首を腕を回され、一気に絞められたのだ。同時に、背中に押し付けられる硬い感触。

押し当てられたものはスタンガン。

「……っ！」

裕真の身体を衝撃が貫いた。

スタンガンの電撃を受けたのだ。

地面に膝をつく。

周囲から視線が集まった。

その中で、裕真にスタンガンを食らわせた彼女は低く鋭い声を発する。

「人攫いなんて、いい度胸じゃない」

裕真は呼吸すらままならず、言い返すことも出来ない。

ただ、悠希が勘違いをしているのだと雪に説得するよう、視線で訴える。

「ひ、ひとさらいだったんだ……」

雪が驚いたように後ずさった。

恩を仇で返すという言葉は今ほど実感したことはなかった。

「あらあら、雪。大丈夫？」

そこで近づいて来たのは、雪の母親である桜。

「あ、おかーさん」

雪が桜に飛び付く。

「痛いこととかされてない？」

「うん。痛いことなんてされてないよ」

「よかったわ。あら……彼、悠希さんと同じ学校の制服じゃない？」

「え？」

言われて、初めて気付いたのか。悠希は裕真の服装を見て、次いでその顔を確認した。

「……っ！」

ここに至って、ようやく悠希は相手は裕真であることに気付いた。普段ならばすぐに気付けただろうが、状況が状況で、悠希も平静さを欠いていたのだ。

「な……んで！」

驚いて、悠希があとずさる。

「っ、ごぼっ！」

ようやくまともに呼吸が出来るようになり、裕真が咳き込んだ。

「あ、あんた……」

酸素を肺に吸い込む裕真を見詰めながら、彼女は声を震わせた。

「よ、ようやく間違いつて気付い——」

「ロリコンだったのね……」

「お前ちよつと土下座しような！」

「桜さん、警察に電話お願いします」

「本気で土下座させてやろうか!？」

「黙れ性犯罪者！」

「冤罪だ！」

二人の間に火花が散る。

——不意に。

裕真の服の裾を、雪が引つ張った。

「ねー、ゆーま。ひとさらいつてなに？」

「お前はお前で土下座な!？」

意味も分からず人を人攫い扱いするんじゃない、と毒づきながら、裕真はどうにか状況を悠希と桜に説明した。

騒ぎで集まった人々が本当に警察を呼ぶ前に事が解決したのは、不幸中の幸いだったろう。

DARK CLOUDS

「ったく……死ぬかと思ったぞ」

「……悪かったわよ」

暗くなり、人気のなくなった公園のベンチに腰をおろして、裕真は缶コーヒーに口を付けた。

その脇にあるブランコに仏頂面の悠希が、こちらも缶コーヒーを手にして座っていた。

ちなみに、裕真のコーヒーは悠希の奢りである。

「もっと誠意を込めて謝ったらどうだ。なんならやっぱり土下座するか？」

「……だから、悪かったって言ってるじゃない」

嫌々謝罪を口にする悠希に、裕真は深い溜息を吐いて肩を落としたりした。

桜と雪の姿はない。母親と再会して雪の緊張の糸が切れたのか、眠たそうにしていたので裕真が帰らせたのだ。

「まあいい。このコーヒー代で手を打つて言ったのは俺だしな」

裕真は缶コーヒーを飲みほすと、空き缶を近くにあったゴミ箱に投げ入れる。

「ったく。ここに来てから厄介なことばかりだ」

ベンチから立ち上がり、裕真は悠希に背中を向けた。

「帰るの？」

「これ以上話すことがあるのか？」

そのなげやりな言葉が、彼女の神経を逆なでる。

言った本人としては今日は疲れたから早く帰りたい、という気分だった。

しかし悠希はそこから突き放すようなものを感じとってしまう。

「あんたと話すことなんてあるわけないじゃない」

「……なら帰るぞ？」

いっそう不機嫌そうになった悠希の態度に疑問を抱きながらも、裕真は公園の出口に向かって歩き出す。

「——ああ、そういえば一つだけ訊きたくなった」

ふと、不意にその足が止まった。

「お前さ、あの親子、守りたいか？」

「なにそれ……どついう意味？」

親子、というのは雪と桜のことを言っているのだろう。

唐突な質問に、悠希は訝しむように裕真を見た。

そして意外なくらいにその真剣な表情に、彼女は小さく息を呑む。

「そのままの意味だ。まあ、もっと限定的に表現するなら、あの親子をアニルから守ってやりたいか、ってこと」

「そんなの……」

悠希は答えを口に出すことを躊躇いはしても、迷いはしなかった。

「……決まってるじゃない。守るわよ」

世話になっているから、だとか、そういうこと以前の問題だ。

血は少し遠いけれど、それでも自分のことを家族の一員として扱ってくれるあの親子を、悠希は絶対に傷つけたくない。

裕真はそんな彼女の言葉を聞いて、軽く笑んだ。

だったら、と。

彼は悠希に告げる。

「やっぱり復讐は控えめにしておけよ。そればかりで戦い続けたら、守れるものも、守れなくなるんだから」

「……また、復讐はやめる？」

悠希が奥歯をみ締めらた。

鋭い視線を受けて、裕真は大げさに首を横に振るう。

「だから、俺は別にやめるなんて言ってない……どいつもこいつも勝手に誇大解釈しやがって。つまり——」

説明しようと裕真が言葉を発そうとした、その時。

アニル襲撃を報せるアラームが、二人のモバイルフォンから鳴り響いた。

ただの召集とは違う。

緊急事態を報せる音だった。

+

「はっ……お出ましたな」

指令室の巨大なモニターに映し出される映像を前に、マリーナは煙草を思わず噛みちぎって、口の中に入った異物を床に吐き出した。

隣に立つ古辺は、呆然とした様子でモニターを見上げていた。

「なんだ……あれは」

「アニルに決まっているだろう」

端的にマリーナが答える。

「そういうことではない……なんなのだ、あのアニルは」

モニターに浮かぶのは、一体のアニル。

そう、たったの一体だ。

だが、あまりに異質な一体だった。

巨大だ。

戦艦ほどもある巨大なアニルが、天都に接近してきている。

指令室に控えていた誰もが騒然となった。こんな巨大なアニルは、これまで一度も確認されたことはない。

「第五形態。エデンじゃマザーと呼称する場合が多いな。……現在におけるアニルの最終形態だ」

当たり前のように、この場の誰もが知りえない情報をマリーナは口にする。

182

「第五……馬鹿な、アニルは第三形態までしか……」

「目の前の現実をオマエらの無知で否定することは出来ないぞ。これまででは、オマエ達が第三形態までしか確認出来ていなかったただけだろう。エデンじゃ、一年も前にマザーは確認されていた」

「なん、だと……？」

古辺がマリーナを驚きに満ちた目で見る。

「何故、そのことを報告しない！」

すると、マリナーが咽喉を鳴らし笑った。

「何故って……教えても、どうせオマエらはエデンの言うことなんて信じないだろう？　それどころか、虚言を吐き出すばかりの馬鹿なエレアスと判断したかもしれない。所詮は無国籍の無法者どもか、つてな。それなのにわざわざ教えてやる義理がどこにある。なあ？」
「……く」

古辺が言葉に詰まる。

確かに、その通りだった。

エデンの人間の言うことを、軍や国家の上層部が信用するとは思えない。そもそも先日まで、その存在自体すら疑われていたのだ。それでなにを言っても、馬鹿な世迷言と聞き流されるのは目に見えていた。

「そもそも、どうして貴様らがそんなことを知っている……」
「エデンは火星にあるからな。土地柄、年がら年中アニルとやり合ってる。知らない方が不思議だろう」
「な……」

絶句した。

「火星……だと？ 馬鹿な。そんな場所にいられるわけが……」

火星は今やアニルの母星だ。そんなところに人間がいられる筈はない。万が一エレアスのような巨大なものがあっても、即座にアニルに群がられ、破壊されるに決まっていた。

「だから、オマエらの無知で現実を否定するなど言っている。エデンはオマエらの尺で測れるエレアスじゃないってことだよ」

これまでにないくらいに冷淡な声で言っ、マリーナは舌打ちをこぼした。

「それより、早く体勢を整えろ」

その双眸に緊張が宿っていることに、古辺は眩暈を覚えた。

彼女が緊張するなんて、長い付き合いの彼ですら見覚えはほとんどない。

つまり、理解は追いつかないが、彼女が緊張するほどには、この状況が最悪ということなのだ。

「来るぞ！」

モニターの向こうで、マザーの背中が大きく開いた。

OVERWHELM

巨大なアニルの背中が開く。それはまるで、花が開くようであまりにも禍々しい光景だった。

『なんだ、あれは……』

ガーディアンの中で綾香は愕然とその疑問をこぼす。

巨大なアニル——マザーの背中から、何匹ものアニルが飛び出してきた。

第一形態から第三形態が、合わせて三百匹はいるだろうか。

溢れだしたアニルが次々に整然と並んでいく、

信じられないことだった。

アニルが整列？

それではまるで、人間の軍隊のようではないか。

その空域でアニルの行動を見つめていた誰もが怯む。

なにか、眼の前のものはアニルではなく、それ以上に恐ろしいものなのではないか。

目には見えないが、全体の士気が確実に下がっているのは間違いない事実だった。

『オマエら、よく聞け』

頭の中に、マリーナの声が届く。

『相手はアニルだが、これまでのアニルとは桁が違う。まずこれま
でと違って、敵は連携して攻撃をしてくるってことは念頭において
おけ。あれは、今や蟲じゃなく、オマエらと同等の戦闘軍隊だ』

アニル達はあっという間に五十ほどの群れに分かれ、第五形態の
前に並んだ。

『オマエ達とはかく防衛を考えろ。攻めはこちらで担当する』

こちら……。マリーナがそう表現した直後、綾香の視覚の一部が、
ぐにやりと歪んだ。

『あれは……』

見上げて、綾香は一瞬それがなにか分からなかった。

戦艦、だった。

本来ならそんなところにあるはずのないもの。

それも一隻ではない。六隻の、小さな艦隊。

それが宇宙の闇の中から突然姿を見せたのだ。

完全な光学迷彩。

既にエデンの戦艦のほとんどに実装されている機能だった。

『アタシらエデン第一駆逐艦体は、これより第一種戦闘態勢に入る』

今までずっと続けていたステルス航行を解いた六隻が、艦体左右にあるハッチを開放し、そこから合わせて数百機のガーディアンが飛び出す。

『殲滅開始だ！』

号令とともに、ガーディアン全機がアニルの群れに飛び込んだ。

衝突。

『凄い……』

感嘆が、綾香の口から零れる。

どのガーディアンも、その動きは熟練された歴戦のそれ。綾香と同等か、あるいはそれ以上の強者ばかりだ。

さらに、駆逐艦六隻から無数のビーム砲が放たれる。

狙いは正確無比で、一射で何体ものアニルが蒸発していく。

次々に倒されていくアニルを見て、彼女は安堵の不安の二つを同時に感じた。

無国籍エレアス、エデン。綾香は今までその存在すらもとに信じてはいなかったし、あったとしても所詮は物好きな大富豪が建造した無法者やはぐれ者の集まりとばかり思っていた。

端的に行ってしまうば、下に見ていたのである。

だが、これはどういうことか。

上とか下とか、そんな細かい話ではない。

あまりにも違い過ぎる。

それが今味方にあるからいいものの、もしもそれが敵に回ったら……。

考えただけで背筋が凍った。

『呆けているな、そっちにも行っているぞ!』

マリナーの叱咤に、綾香ははっとした。

天都の戦列に、無数のアニルが突っ込んでくる。

『……っ!』

慌てて綾香はその迎撃に入った。

目の前に迫ってきたアニルに槍を突き立てる。

だが――。

『阿呆! 今までのアニルと違うとは言ったろう!』

貫かれたアニルが嗤ったように綾香には見えた。

反射的に、槍を引き抜こうとしたが……貫かれたアニルはその槍を抜かせまいと槍にしがみついている。

このアニルは、命をかけた罔なのだと気付くが……遅い。

直後、綾香の槍が破壊された。

槍の横腹にアニルが突撃して来たのだ。

そこからさらに数体のアニルがガーディアンに突撃してくる。綾香はそれをどうにか回避すると、穂先の折れた槍を放棄し、腰から小型のライフルを抜くと即座にそれをアニルに向けてトリガーを引く。

だが、アニルには当たらない。

綾香率いるヴァーミリオン部隊の周囲には、次々に爆発が生まれている。味方のソアレイが、撃墜されているのだ。

『——くっ！』

綾香は混乱しながらも、必死にガーディアンを駆動させる。

アニルはこれまで、単調な攻撃しか仕掛けてこなかった。

しかしどういうわけか、このアニルは見事な連携でソアレイを追い詰めている。その攻撃に追いつけないソアレイが次々に破壊されていく。

軍では、連携する敵を想定した訓練をほとんどしていない。ならば、このアニルの連携に対応しきれないのも当たり前のことだ。

綾香やヴァーミリオン部隊の僚機も、もしガーディアンに乗っていないければ……機体性能があと少し劣っていれば、あの爆発の一つになっていただろう。

『能力は今までのアニルと変わらない。一体ずつ確実に仕留めていけばやれる筈だ』

マリーナの声に、けれど天都のソアレイは勢いを取り戻せない。

『くそつ、役立たず共が！』

『仕方ないでしょう。今まで雑魚しか相手にしてこなかったんだから、いきなりこんなのが出てきたら混乱もしますって』

ティアマト・エネルギーの発する流星が、宙に大きな曲線を描いた。その曲線から放たれる細い粒子光が、次々にアニルが撃ち落とすしていく。

『裕真……遅いぞ』

『それでも急いだ方なんですけどね』

銀の流星が――デイズイが、アニルを撃墜していく。

例え連携を成すアニルであっても、それに対応するにはあまりに

速さが足りない。

そこに、もう一つの光が生まれた。

『だらしないわね……』

転位で現れたスパーサーが、アニルを切り裂いた。

『悠希……！』

『……大丈夫？』

戸惑いを隠す為に、感情の薄い声で悠希は訊いた。

『あ、ああ……』

距離感を感じて、思わず綾香はどもってしまふ。

『……そ』

スパーサーは、そのまま飛び出した。

アニルを、銀色のブレードが次々に引き裂いていく。

デイズィを流星とするなら、スパーサーは嵐。

黒と銀の機体が、アニルの勢力を徐々に押し返していく。

『……私達も行くぞ!』

その二機に後れを取るまいと、綾香は叫んだ。応える様に、ヴァーミリオン部隊のガーディアンが素早く陣形を整え、武器を構えた。今はとにかく、敵を倒さなければならない。

綾香は自分にそう言いかせて、他の雑音のような思考は捨てた。

+

『マリーナさん……第四形態は?』

アニルを撃ち抜きながら、裕真が尋ねる。

『避ける、裕真!』

その時。デイズィの機体に、横から強い衝撃が襲った。肩のプレートが軋む。

『っ……！』

デイズィはすぐさま衝撃から立ち直ると、攻撃を受けた方向を見る。

そこにいたのは……第三形態よりもさらに二回りは巨大なアニル。

形状は、醜悪そのもの。

胴は捻じれているかのように歪み、伸びる腕は長く六つもの関節を持っている。脚は異様に細く、小刻みに震えていた。頭部には出鱈目にいくつもの複眼がついていて、背中から生えた六枚の羽はグロテスクに光っている。

第四形態のアニルだ。

『大丈夫か？』

『ええ、たいしたことはありませんよ』

裕真がマリーナにそう答えた直後、第四形態が一瞬でデイズィとの距離を詰めた。

これまでのアニルとは比べものにならない速度。

だが、デイズィならば決して追いつけない速度というわけではない。

第四形態が突き出した鋭い爪をライフルの側面で弾いて、デイズはもう片方のライフルの銃口をその頭部に向けた。

が、引き鉄が絞られる直前にその射線上から外れた第四形態が、デイズの胴に突進する。

デイズはそれを機体を大きく回転させて回避すると、背後から第四形態を撃った。

だが。

『甘いか……！』

ライフルから放たれた粒子弾は、アニルの甲殻の一部を溶かしただけで、致命的な傷は与えていない。

一体どれほど強固な甲殻なのか。

『何よ、そいつ』

いきなり、悠希が通信チャンネルを開いてくる。

『第四形態。戦闘能力で言えば、アニルの中でも最強だ』

悠希に、裕真は簡潔に応え、第四形態にライフルを向けてトリガーを引く。

連続で放たれた銀の弾丸は一発すら敵を掠めることすらなく、背後の暗闇に消えてしまった。

『こんなやつ、さつさと終わらせる……！』

スパーサーが第四形態の背後に転位する。

『馬鹿、やめ——！』

裕真が止める前に、スパーサーがブレードを第四形態に振り下ろした。

『——っ！』

第四形態が、腕一本でそれを受け止める。

するとブレードが軋みをあげて……砕け散った。

『どっし、て……！？』

『そいつの反応速度は今までとは桁違いなんだよ!』

デイズィがスパーサーを蹴り飛ばす。

一瞬遅れて、スパーサーのいた場所をアニルの多関節の腕が薙いでいた。

デイズィが蹴り飛ばしていなければ、今ごろ鋭い爪がスパーサーを無残に引き裂いていただろう。

助けられた……悠希はそのことに気付いて、自分の視界が赤く染まるのを感じた。

また、だ。

また自分よりも強い存在が——それも、アニルという蟲として現れた。

悠希の思考が、白熱する。

裕真に敗北するのよりも、遥かに許し難い。

悠希は、アニルには負けられない。アニルを殺し尽くすのだから。

だから、彼女は止まらなかった。

『あ……あああああああああああ!』

叫び。スパーサーは腰からブレードを抜き放ち、第四形態の背後に転位する。

『お前……！』

今度は、デイズイの助けも届かない。

ブレードが一瞬で第四形態に叩き折られ、そして――。

『悠希――っ！』

スパーサーと第四形態との間に飛びこむ影。

それは……綾香のガーディアンだった。

鉄のひしゃげる音。

『……え？』

スパーサーの身代わりになって、ガーディアンが第四形態の腕に脇を貫かれていた。

貫かれた部位が爆発し、ガーディアンが吹き飛ぶ。

『あ、綾香あつ！』

転位して、スパーサーがガーディアンを受け止めた。

『綾香、綾香！？』

呼びかけるが反応は帰ってこない。

悠希は、自分の鼓動が止まったかのような寒気が身体の内側から這いあがってくるのを感じた。

『綾香っ！』

『今は叫ぶより退け！ 邪魔なんだよ！』

デイズィがガーディアンを抱えるスパーサーを掴んで、第四形態との距離をとる。

『マズいぞ、裕真！』

そこにマリーナの通信が割り込んでくる。

『なんなんですかっ!』

『砲撃だ!』

『っ……!』

見れば、マザーがその口を大きく開いていた。その口内は、電火で溢れかえっている。

『全員、避ける!』

全域に飛ばされたマリーナの命令と同時。

巨大なプラズマの柱が、マザーから放たれる。

プラズマ砲はそのまま無数ソアレイを飲みこんで、さらに天都の外装の一部を削り、宇宙の彼方へと消えていく。

戦場に一瞬の静寂。

そこに込められたのは、驚愕、恐慌、悲嘆。

『やってくれたな!』

そんな空気を破ったのは、マリーナの声だった。

天都から、アルトオブリガードが出港する。

同時に、その艦首が三つに割れて大きく開口し、そこから眩い光が滲み出す。

刹那。

まるで繰り返しのような光景。

アルトオブリガードから放たれた銀色の砲撃が大量のアニルを呑みこみ、マザーを貫く。

ぼろぼろと朽ちた老木が碎けるように、マザーが崩れていく。

すると、アニルの群れに変化が生じた。

次々にアニルが天都から離れていく。

それは第四形態も例外ではなく、その身を翻すと、高速で飛び去った。

マザーを倒されてからのアニルの撤退は、驚くくらいに迅速だった。

火星に向かって消えていくアニルの群れに、誰もが身動き出来ない。

『綾香っ！』

ただ、悠希だけが綾香の名前を叫ぶ。

『綾香あああああああああ！』

SETBACK

モニターには、第四形態の映像が映し出されている。

「アニルの第四形態は個体数こと少ないものの、かなりの戦闘能力を持っている。エデンでは、基本的にデイズイがその動きを抑えて、他の火力の高い機体で倒すっていう構えで対応してたな」

煙草を啜えながら、マリーナがそう説明する。

「デイズイ単体でも勝てない、ということか？」

「いや。時間をかければデイズイが勝つだろうが……そもそも一対一で戦わなくちゃならないなんて決まりはないんだから、デイズイ一機で相手をするメリットがないだろう」

「それもそうか……」

頷くと、古辺はモニターをタッチして、次の映像に切り替える。

「第四形態についてはとりあえず置いておこう。それよりも、この第五形態、マザーとやらだが……」

「これはアタシらもよく分からん。最初に存在を確認してから、まだ六回しか戦ってないからな。死体も組織があちこち崩壊してて、調べるのがひどく困難だ。アタシも本気で調べたんだが……有益な

情報は何一つ手に入らなかったな」

「そうか……」

古辺が重々しい表情を作る。

マザーの死骸は天都の研究機関に渡され解析の最中だが、マリナーに何も理解出来なかったというなら、恐らく他の誰にも期待は出来ないだろう。

「他に何か分かることはないのか？」

「それならいくつか。まあ推察ではあるが、アニルは第四形態から飛躍的に知能が高くなるようだ。少なくとも第四で人間レベル、第五でコンピューターレベルの情報処理能力はあったとしても間違いないな」

「……ふむ。では、アニルが急に統制されたのは……」

「マザーのせいだろうな。一体どんな意思疎通手段を持っているのかは、分からないが……あれが司令塔の役目を果たしてるのは確かだ」

マリナーがすっかり短くなった煙草を灰皿に押し付け、火を消す。

「とりあえず、次に第四、第五形態が襲撃してくるまでに、早急な体制の見直しが必要だな……」

「おいおい古辺。お前そんな余裕あるわけ……あ、やべ」

——不意に、マリーナが気まずそうに頬を掻いて、遠慮がちに口を開いた。

「そっぴゃ、もつと早く言わなくちゃいけないことを今思い出したんだがな……」

「なんだ、お前のそのらしからぬ様子は。なにか嫌な予感がするのだが……」

普段とは違うマリーナの態度に、古辺の本能が警鐘を鳴らした。

「第四形態のアニルを今回、逃がしたわけだがな」

「デイズイが交戦したというやつか」

「ああ。でな、さっき第四形態は知能が高いって言ったが、実は知能は高くても、連中、思考はひどく単純というか……そんな感じなんだ」

「……なにが言いたい？」

「あー。まあ、なんと言えればいいものか。……つまりな、あの逃げた第四形態、こっちに恨みを抱いて、多分すぐに大量のアニルを引き連れて報復に来るぞ……ってことなんだが」

「……」

古辺は、開いた口が塞がらなかった。

「わり、アタシらにとっっちゃ当然のことだから、言い忘れてた」

笑って誤魔化そうとするマリーナに古辺は――。

「この阿呆が！」

マリーナが肩を縮めるほどの怒号が響く。

彼は慌てて上層部に連絡を取った。

+

ベッドに横たわる綾香は、眼を覚まさない。

強打した頭には包帯が巻かれ、左脚の骨にはひびが入っていた。

頭を強打しているせいで、予断は出来ない状況にある。

悠希は彼女のベッドの脇に座り、ずっと俯いていた。

それこそ、一晩中。

「寝ていないのか？」

果物の盛り合わせを片手に持った裕真が、病室に入って来る。

「……別に」

「なにが別になんだよ」

裕真は盛り合わせを置くと、窓枠に腰を下ろした。

眠り続ける綾香を見て、静かに聞いた。

「目、覚まさなかったのか」

小さく悠希が頷いた。

その様子に、裕真は腕を組んで微かに溜息をこぼす。

やれやれ、と。口の中でそう呟くと、彼は悠希に尋ねる。

「なにを落ちこんでいるんだ？」

「……うるさい」

悠希は弱々しくそう言った。

「はっ……」

裕真は冷たく笑う。

「……なにが、おかしいの」

「別に。笑えるから、笑ってやっただけさ」

裕真がそう答えた、瞬間。

「あんた——！」

悠希は椅子から飛びあがるように立ち上がって、裕真の胸座を掴んだ。

「綾香がこんなになってるのに、それをどうして笑えるのよ！」

彼の表情は全く動じない。ただ小馬鹿にするような視線を悠希に向けている。

「さて、な。それよりも、俺はお前に聞きたいね」

「……なによ」

「どうしてお前、そいつの為に落ち込むんだ？」

「そんなの——！」

「お前がこうなることを望んだようなものじゃないか」

裕真が言葉に割り込む。

「な……！」

その言葉に、悠希は言葉を失った。

そんなことを望むわけがない。

叫ぼうとするが、悠希の咽喉は硬直して、音を作れなかった。

「否定はするなよ？ お前の復讐心が、そいつを傷つけたんだ」
「——っ！」

身体が冷水に沈められたかのような錯覚に悠希は襲われた。

「復讐心は敵を焼き払う為の炎だ。けれど……炎が何かを守ることはない。ただ望む望まないに関わらず、焦がすだけのものなんだよ」

裕真は自分の胸元にある悠希の手を払った。

あつけないほど簡単にその手は外れて、力なく落ちる。

「お前はアニルを倒す為に、その炎ばかりを求めて、求めすぎた。

だから炎は敵だけじゃなく、お前の傍にいる人間をも巻き込んだ」

彼女の指先は、微かに震えていた。

「お前が炎を抑えず、出鱈目にまき散らかしたからなんだよ。そいつが今こうして寝込んでるのは」

崩れる様に、悠希は椅子に座りこんだ。

「彼女を傷つけたのはアニルだが……同時に、それはお前でもあるんだよ。月坂悠希」

「……やめて」

「なんだ、なにか言ったか？ 聞こえないぞ」

裕真はさらに彼女を叱責する。

「滑稽だな。自分で傷つけた相手を、そんな風に心配するなんて。そんなのは、自作自演の自己満足じゃないか。ああ、本当に馬鹿げてるよな。お前、恥ずかしくないのか？」

「やめてって言うてるでしょう！」

悠希が叫ぶ。

病室の空気が震えた。

裕真は背中を丸めた彼女を無感情な瞳に収めて、嘲るように口を歪める。

「忘れるなよ、月坂。お前がどれだけ頑張ったかなんて知らない。だが結局、これまでのお前の全ては、そこに横たわってるたった一人の人間を傷つけたって結末を残しただけだ。とことん無意味じゃないか、なあ？」

悠希には何を言い返すことも出来ず、ただ、震える身体を自身で抱きしめていた。

「……まあいいさ。そうやってそこにずっと座っていればいい。その方が俺も安心できるよ。味方内にお前みたいないやつがない方がな」

吐き捨てて、裕真は病室を出ていった。

悠希は、自分の歯がぶつかり合う音を耳の奥で聞いていた。

眠る綾香の姿を見て、思考が混濁していく。

悠希はただ、両親の死の悲しみをアニルにぶつけていただけだ。

アニルを憎めば、殺せば、悲しみが誤魔化せたのだ。

だから一層強くアニルへの復讐をたぎらせ、何匹も……何十、何百、何千匹ものアニルを切り裂いてきた。

けれど、悠希は本当は、そんなことがしたいわけじゃなかった。

守れているつもりだった。

……大切な人を傷つけないわけじゃなかったのだ。

桜や雪や……これまでの人生で出会った様々な人の顔が、彼女の脳裏をよぎった。

この先も自分は大切な人を傷つけるのだろうか。

そう思うと、どうしようもなく恐ろしくなる。

歯を噛みしめながら、悠希は骨の髄からくる震えに、自分の身体をさらに強く抱きしめた。

B R I E F

病室を出たところで、裕真は意外な姿を見つけた。

「優しいね、オマエってやつは」

「マリーナさん」

裕真が目丸めた。

まさかこんなところで会うとは思ひもなかった人物である。

「……お見舞いですか？」

「見ればわかるだろう。それと、立ち聞きだな」

「……趣味悪いですね。いろいろと」

「どういう意味だ？」

マリーナが片方の眉をあげる。

裕真はマリーナがダースで抱えている煙草のケースを胡散臭そうに見た。

「それで……いきなり藪から棒にどうしたんです」

「ふん。とぼけることはないさ。悪役御苦労さま、ということさ」

「なんですか、それ」

「だから、とぼけるなって言っているだろう。まったく」

おかしそうにマリーナは肩を震わせた。

「オマエってやつは、面倒見がいいくせに、どこまでも不器用だな」

「俺は別に、面倒見なんて……」

「はいはい、そうだな、うん、そうだそうだ」

適当に頷くマリーナに、裕真は訝しむような目を向ける。

「にしても、あの言い方はアタシですらどうかと思うんだがな」

「どうかと、って？」

「あれじゃあ、下手したら二度と立ち直れないぞ？」

裕真が悠希に言い放った言葉のことだろう。

悠希にしてみれば、彼の言葉はどこまでも胸を抉る刃だったに違いない。

裕真自身、言い方が厳しすぎたとは思っている。

単に突き放したか、あるいは見限ったような色しか悠希は感じなかったかもしれない。

もしかしたら、これから二度と悠希は戦場に出られなくなる可能

性だってある。

だからといって優しく言ってやればよかった、とは思わない。

下手な甘さを与えれば、逆に彼女の為にならない。間違いはどれほど厳しくとも間違いと知らしめなければ意味がない。

「この程度で終わるヤツなら、そこまでだったってだけのことでしよう」

「なるほどね」

いつか聞いたような台詞に、マリーナは小さく頷いて、細めた瞳を病室のドアに向けた。

「これで立ち上がれるなら……確かに彼女は強くなるだろう」

「出来ればそうあって欲しいもんですよ」

「お節介なヤツめ……頭の一つでも撫でてやろうか？」

「遠慮しておきます。それじゃ、俺はお先に……」

「——ああ、そうそう」

帰ろうとする裕真をマリーナが引き止める。

「天都からエデンに正式な依頼が入った。アタシら第一駆逐艦隊は、次のアニルとの戦闘において最前線に出る。まったく、アニルさまさまというやつだな。お陰で、最初に要求した三倍もの物資を搔っ

攫えた」

「……まったく、抜け目がないですね」

マリーナは、エデンの戦力が天都を支援することの交換条件に、法外な物資を要求したのだろう。

天都としても存続の危機だけあって、物資の出し惜しみは出来ない。

命と引き換えに財産の半分をよこせと言っているのとさして変わりなかった。

なんとも汚い交渉だ、と裕真は苦笑する。

「でも、本当にやれるんですか？ やってくるアニルの質量によっちゃ、俺達だけじゃ対応しきれないかもしれませんよ？」

「それでも対応するのがお前の役目だろう」

「無茶言いますね……」

「頼りにしてるよ」

「……はあ」

軽く言われて、裕真は文句も言わずにただ疲れたような顔を浮かべた。

「ちなみにアルトオブリガードの主砲は前回の砲身が溶けたから使えないのは覚えておけよ」

「……そういや、使ったんでしたっけね。奥の手だったのに」
「ほんと、あれは一発で砲身が潰れるのはどうにか改良しなくちゃいけないよなあ。今更言っても手遅れだが」

アルトオブリガードの主砲はかなり広い範囲を殲滅出来る兵器だが、一発撃つと砲身が熱のせいで溶けて使用できなくなるという欠点がある。エデンで使うなら砲身の予備があるのだが、ここは天都。そんなものは当然ない。修理しようにも、到底次のアニルの襲撃には間に合うまい。

「とりあえず、分の悪い状況だが、頑張ってくれ」
「はいはい、分かりましたよ……」

裕真は重い足取りで病院を出た。

……どうしてこう天都には面倒事が一杯なんだ。

「ああ、もう！」

裕真は頭を掻き毟った。

+

その時は、すぐに訪れた。

裕真がアルトオブリガードのハンガーでデイズイの調整をする中。

アニルの襲撃を伝える警報が、響き渡った。

FLAME

悠希は、脇のテーブルに置いてあった携帯端末から鳴り響くアラームを、ゆっくりとした動作で止める。

今は、そんなものに構う余裕は、持てなかった。

「……行かないのか？」

不意に、声が聞こえた。

悠希は思わず椅子から飛びあがった。

「——綾香！」

ベッド上の彼女が、うつすらと瞼を開ける。

「やれやれ……今のアラームのせいで目が覚めちゃったよ。なんていうか、軍人が染み付いてるよなあ、私」

苦笑して、綾香は身体を起こそうとした。

「っ……！」

酷い頭痛がして、再びベッドに体重を預ける。

「だ、大丈夫？」

「ああ……… すごい痛いけど、問題ない」

「なによ、それ。問題、あるでしょ」

微かに湿り気をおびた目じりを拭って、悠希は口元に微かな笑みを浮かべた。

「痛いなら大人しく寝てなさいよ」

「……… 大人しく、か」

綾香が悠希に双眸を向けた。

「なあ、悠希」

何を言われるか。

なんとなく、悠希も分かっていた。

本当は耳を塞ぎたかった。けれど、綾香はそんな暇はくれない。

「戦わないなら、それでいいよ」

「……………え？」

予想とは違う言葉を投げかけられ、悠希は一瞬、硬直した。

「なん、で…………」

「なんでもなにも、お前は行きたくないんだろう？　なら、行かなくていいんだよ」

当然のように言つてのけて、綾香は手を悠希の頬に添えた。

その温かさに、悠希は無性に涙が出そうになった。

「悠希の戦う理由はさ…………寂しいと思うんだ。復讐したいっていうお前の気持、軽々しく分かるなんて言えないけど、それでも分かつてやりたいと思う。その上で、やっぱり、だからこそお前を復讐の為に戦わせたくないんだ」

悠希は黙って綾香の言葉を聞いた。

「私には、お前の両親がどんな人達だったのか分からない。けど、お前がその人達を好きだったことは分かってる。お前が好きになるんだから、きっといい人達だったんだろう」

不思議だった。

綾香の口調は、ひどく穏やかだ。なのに、どうして悠希は自分が叱られているかのように感じてしまうのか。

なにかとんでもない間違いを犯してしまったのではないかと、後ろめたい気分すらあった。

「——お前の両親は、きっとお前が復讐の為にだけに戦場に立つのを、望みはしないよ。悲しんでいるよ。それだけは間違いない」

綾香の言葉に、いろいろなものが吹き飛んだ。

「……あ」

悠希は、自分を見つめる綾香の瞳の向こうに、なにかを……記憶の彼方に埋もれてしまった二つの姿を見た。

ひどく懐かしい声が、聞こえる。

別に復讐なんて望まない。そんなお前を見るのは悲しい。そんな風に、言われた気がした。

幻は刹那。気付けば、そこにあるのは綾香の瞳だけ。

「……私、頑張ったんだよ？」

自覚もない内に悠希は零していた。

「頑張って、訓練して、ソアレイのパイロットになって、沢山訓練して、戦果を挙げて、もっと訓練して、専用機を貰って……数え切れないくらい、戦ってきたんだよ？」

「ああ……」

独白するように言う悠希の頬に、滴が伝った。

「それは……間違い、だったのかな？」

「……お前は、立派だよ。そんな歳で戦場に立って、沢山のものを守ってきた。でも……ああ、そうだな。きつとお前は、間違えてたんだよ」

きつと、少し前までの……裕真に出会う前の悠希には、そんな言葉は届かなかったろう。

でも今。彼に言われた様々な言葉が、綾香の言葉と共にジグソーパズルのように噛み合っていく。

そうして、呆気ないほど簡単に、辿りついた。

悠希は、一体自分がどんな間違いを犯してしまったのかを、はっきりと理解した。

彼女は復讐の為に戦って……けれどそれは彼女自身の為で、両親の為ではなかった。

両親の仇打ちなどと偉そうに言っても、それは、ただひたすらに怒りをぶつけていただけにすぎなかったのだ。

復讐だなんて、ただの名目でしかなかった。それはまるで、子供の癪癢と同じ。

ただ彼女は、両親が奪われたという現実……アニルに牙を剥いていただけ。

本当に両親の為というなら、悠希はもっと別の方法で報いるべきだった。過去に縛られるばかりではなく、前を見て。

「私はただ独りよがりで暴れて……それで、皆に、綾香に迷惑をかけて……」

「それは違う」

綾香の手が、悠希のもう片方の頬も包む。

「確かに、全部が全部正しかったとは言ってやれない。けどな、それでもお前が両親を大切に思っ……だからこそ抱いた憎しみや怒りは、絶対に独りよがりだなんて言葉で済ませちゃいけない。……それにさ、少なくとも私はお前に迷惑をかけられた覚えはないよ。そりゃ、手の焼ける妹分だとは思うがね」

「綾香……」

俯いて、悠希は唇を噛んだ。

涙は、止まっている。本当は思いきり泣きたかったけれど……今は、しない。

綾香の言葉を一つ一つ自分の内側に刻みつけてから、ゆっくりと彼女は顔を上げる。

「誰が妹分よ……まったく」

目は少し赤いけれど……それでも、ふっきれたような表情。

「……ははっ、そう言っなって」

安堵したようなそぶりを見せてから、綾香が悠希の頭に手を置いて、髪をくしゃくしゃとかき乱す。

「あ、こら。頭を撫でるなっ」

綾香の手をどけて、悠希は天都の天蓋に目をやった。

「……もう、戦ってるのかな？」

「さあ、どうかな。まだかもしれないし、もう始まっているかもしれない」

「そっか……」

悠希は携帯端末を手にとると、それをポケットに押し込んだ。

「行くのか？」

綾香が尋ねる。

「……うん」

「戦う理由は？」

悠希は、昨晚の裕真との会話を思い出していた。

彼にも、復讐について言われた。

守りたいかと、彼は訊いてきた。

守りたいと、彼女は答えた。

あの時の悠希は、何も分かっていなかった。

けれど、分かっていたいなかったとしても、あの答えに嘘は欠片もないのだ。

今、それを胸を張って言うことが出来る。

「守りたいから」

「守る？」

「うん」

立ち上がって、悠希はそつと拳を握りしめた

「大切な人を守りたい。誰も傷つけたくない、もう」

綾香に謝ろうか、と悠希は少し考える。昨日自分を庇って怪我をしたことについても、他の様々なことについても。

……けれど、やめた。

今謝るより、きちんと戦ってから謝った方が、綾香は喜んでくれ

ると、そう思ったから。

「だから、アニルは倒すよ。私の大切な人を傷つけて、傷つけるアニルを」

「……そっか」

綾香が、口元に笑みを浮かべて頷く。

「それと、もう一つ」

「ん？」

「やっぱり……それでも少しは復讐心があるよ……」

「……」

「怒る？」

そつと上目遣いで聞いてくる悠希に、綾香は少しの間を置いて、彼女の背中を軽く叩いた。まるで勇気づけるかのように。

「大丈夫、怒らないよ。正直、あのままここを出てこうとしたら、むしろそれこそ呼び止めるところだった」

「え……？」

「どっかの誰かが言うには、戦うには絶対に復讐心って炎が必要らしいよ。ただ、それだけじゃ駄目で、その炎を暴走させないよう抑えられる冷静さってのも必要らしい」

それを誰が言ったのかに、悠希はすぐに思い至った。

「お前にとつては、守りたいって気持ちだが、その冷静さにあたる部分なんだろう？」

「そう……なのかな？」

「そうだよ」

何故か自分のことでもないのに綾香は自信満々に言いきって、そして再度悠希の背中を叩く。

「な、何度も叩かないでよ……」

「行って来い、悠希」

綾香は拳を突き出す。

「ただし、約束だ。守れよ、お前の大切なものの全部。それと、当り前だけれどお前自身も。お前がどうにかなったら傷ついちまう人間は何人もいるんだから。……私だってその一人だ。だから、いいな？」

「……ん！」

二つの拳が、真っ直ぐぶつかり合う。

COUNTER

状況はとびきり最悪だった。

アニルの、マザー一匹を始めたとした、おおよそ三千体もの群れ。まだ第四形態は確認されていないが、少なくとも昨日逃がしたものが一匹、どこかに控えているはずだった。

相手が三千の大軍ともなれば、エデンの第一駆逐艦隊だけで相手をするのは難しい。

エデンのガーディアンは総数二百に満たない。どれだけ熟練揃いでも、多勢に無勢とはこのことで、形勢は不利と言わざるをえない。今のところはどうかアニルが天都へ接近するのを防いでいるものの、このまま有効な一手も打てずにいれば、どうなるかは分からなかった。

たった一機で最前線のアニルを削り続けるディズイの内で、裕真は唸る。

『……マリーナさん。せめてマザーだけでもどうにかありませんか？』

『ここでマザーを倒しても、前回のようアニルは退かないぞ。あれは奇襲じみた攻撃だったから向こうも怯んでくれたんだ。既に手の内を晒した相手に、ヤツらは怖気づかない』

『それでも、あれを墜とせればこっちの士気は上がるし、あっちの指揮系統も崩れて万々歳ですよ』

『そうだな』

アニルの軍勢は強力だ。

ひとえにそれは、連携の高さにある。

アニルの動きは、個々の意思が薄い分完璧に統制され、その連携は人間にはとても真似できるようなものではない。

そのアニルに指示を出しているマザーさえ倒せれば、状況は一変するだろう。

『だが戦艦は自分の身を守るので手いっぱい、マザーの相手まではとてもじゃないが手が回らないし……かといってソアレイだけでは火力不足でマザーを墜とせない。さて、どう打開したものか』

戦艦など、戦場ではただの大きな的でしかない。いくら火力が高く、装甲が厚くとも、大量のアニルに群がられてはひとたまりもない。だからこそ、下手に動きまわることも出来なかった。

『やれやれ、煩わしく飛びまわってくれる……』

マリーナが苦々しげに呟く。

アルトオブリガードの周囲では、ビーム兵器の光や、無数のミサイル兵器などによる爆発が生まれていた。

『ふん……敵しいな。まずマザー周囲の雑魚を掃討して、丸裸になったところで接近、艦の一斉砲火で一気に仕留めるのが確実だろう』
『でもそれじゃあ、そもそも雑魚をどうにかできるかどうかすら怪しい』

『臆病風にでも吹かれたか？ と言いたいところだが、残念なことにアタシも同感だ』

マリーナは降参とでも言うように両手を挙げて見せた。

『こうなったら一か八かで直結するか？ 運が良ければ、届くかもしれない』

『直結、ですか……。アルトオブリガードとその乗員全員を犠牲にする勇気があるなら構いませんよ？ ま、九割方マザーに届くこともなく撃墜されるでしょうけど』
『なんとも敵しいことだ』

いくらなんでも、希望の見えない無謀をする気はマリーナも裕真もなかった。

『さて、どうしたものか……』
『……まったく、人手が少ないのも困ったものですね。せめてあい

つが戻ってきてくれれば――』

言いかけて、裕真は咄嗟に口を噤んだ。

だがマリーナはそんな彼の言葉を、しっかりと聞いていた。

『んん？ ああ……そうだなあ、うん』

マリーナがいかにも意地の悪い笑みを浮かべる。

『嫌な顔をしてくれますね……』

『いやなに、つまりそういうことなんだろう？』

モニター越しに、マリーナは裕真を愉快そうに眺めた。

『愛しの彼女をお待ちしてるわけか？』

『なんですか……それ。俺はただ単純に戦力的な話をしているだけで……』

『なんだかんだ言っても頼りになるものなあ、彼女の能力は。うん、私も人手がないのには困っているよ』

『あー、もう。いい加減面倒臭いですよ、マリーナさん』

『遠慮なく言ってくれるな、おい』

そんな会話をしながらも、デイズイは着実にアニルを撃ち墜としていた。

おそらくは、単機でありながら、百と少しほど仕留めただろうか。

それでも戦場のアニルは、その数を減らした様子を見せない。やはり三千という数のせいだろう。

『やっぱりマザーは倒しておきたいですね』

改めて、裕真が言う。

『だな。かろうじて防衛線は保っているが……悪いが五番部隊を手助けしてくれ、ちょっと危ない』

『はいはい』

応えて、デイズイは即座に言われた部隊の元に翔けつけ、部隊を囲んでいるアニルを駆逐する。

次々に感謝の通信が届く。

一拍置いて、裕真はマリーナとの通信を再開した。

『マリーナさん。戦場の状況、どんな感じだか分かります?』

『ああ。丁度、戦況をまとめていたところだ』

裕真の頭の中に何かのデータが割り込んでくる。

どうやら戦場の分析情報らしい。細かに戦力の分布などが示されている。

『さすがマリーナさん。よくここまで把握しましたね』
『まあ天才だからな。もっと讚えて構わんど。……ん？』

マリーナが何かに反応を見せる。

『どうかしましたか？』

『……喜べ、裕真。いい情報が入ってきた』
『はい？』

マリーナがいきなり上機嫌になって、煙草を啜えた。

『待ちに待った元最強ちゃんの登場だ』

——刹那。

『だが、元よ！』

銀色が、舞った。

視界に飛びこんできた機影に、裕真は……思わず笑う。

『……来たのか』

『当然よ！ 私はまだまだやれるわよ——なにもかもを、守る為に！』

銀色の軌道が、それに触れたアニルを真つ二つに切断する。

輝くブレードを構え、スパーサーはデイズィに向き合った。

『は、のろまめ』

『……否定はしないけど、』

悠希は振り切った顔で、スパーサーに己を重ねる。

これまで馬鹿なことにつき合わせてごめん。

これからも大変だけど私に付き合ってよね。

謝罪と感謝を込めた瞬間……ティアマトの光がスパーサーを覆い
尽す。

『遅れた分は、きちんと取り戻すわよ』

その輝きの強さは、これまでにない強烈なものだった。

『……驚いた』

マリーナがそう呟く。

『どうしたんですか、マリーナさん』
『今、スパーサーのティアマト・エネルギー濃度が軽く七十を超えたぞ。昨日まで三十もいってなかったのに………どういうことだ、これは』

裕真が目丸める。

『……それじゃあ、まさか……』
『ああ——やれるかもしれない』

瞳に希望を滾らせる二人に……。

『……？』

悠希は話についていけず、首を傾げることしか出来なかった。

十

スパーサーにアルトオブリガードから伸びる無数のコードが繋がれ、その両腕が甲板のスロットに差し込まれる。

『アルトオブリガードにはちょっとした仕掛けが組み込まれていてな』

『仕掛け……？』

指示通りスパーサーとアルトオブリガードとの直結作業を行いながら、悠希はマリーナと言葉を交わしていた。

『大雑把に説明するとだな、アルトオブリガードは直結したソアレイのティアマト・エネルギーを艦全体に浸透させることが出来るんだ。ま、その為には対象のソアレイのティアマト・エネルギー濃度が五十を超えなくちゃいけないんだが』

アルトオブリガードと直結したスパーサーの情報は、ダイレクトに悠希の脳に届く。

まるで自分の身体が広がったような不思議な感覚が、彼女の身

体を包んだ。

『うわ、と……そんなことして、意味があるの?』

その感覚に少し驚きながら、悠希は尋ねる。

『分かってないな、オマエは』

マリーナが溜息を漏らす。

『ソアレイがスキルを発動するにはどうしたらいい?』

スキル保持者である悠希にとっては馬鹿にするような簡単な問いだった。

『そりゃ、スキル保持者の身体を媒介させたティアマト・エネルギーを機体全体に——あ』

言って、悠希ははっとした。

『分かったか?』

『もしかして、この艦って……』

『そう……スキル発動を可能にしているのさ』

自慢げにマリーナが告げる。

『苦勞したぞ。艦全体に対象ソアレイからのティアマト・エネルギーを浸透させる技術を生み出すのは』

あっさりと言うものの、それは多分とんでもなく高度な技術なのだろう。

『……なんて滅茶苦茶』

『その滅茶苦茶が出来るのが天才が天才たる所以だろう？』

と、悠希の視覚情報に一つのモニターが浮かぶ。

接続完了のメッセージが流れた。

『さて……準備は完了だ。早速、ティアマト・エネルギーを放出してくれ』

『え……どうやって？』

『……』

初っ端からの躰きに、流石のマリーナも言葉がなかった。

『……ティアマト・エネルギーはスキル保持者の感情の変化によって密度を増す。どうして自分のことなのにそのくらい知っていないんだ』

『わ、悪かったわよ……。それで、ええと……感情、か』

言われて、さてどうしたものかと悠希は唸った。いきなり感情の変化と言われても、どうするばいいのか、具体的にどうすればいいものか。

すこし悩んで、彼女は目を瞑っていた。

『……ん』

思い浮かべたのは、守るという決意。

守りたいという想いがどういう名前の感情で呼ばれるのか、愛情か、情熱か、あるいは他の何かなのかは悠希にも分からない。

けれど確かにそれが自分の中にある一番強い感情だと、今の悠希ならば断言出来る。

——だから……その想いを果たす為にも、力を貸してほしい。

自分の分身ともいえるスパーサーに、悠希は問いかけた。

いけるよね？

それに……彼女の相棒は応えた。

銀色の光が、スペーサーから溢れだす――。

『ちなみに、裕真のティアマト・エネルギー濃度は八十二だぞ』

まるでタイミングを計っていたかのようにマリナーが付け足す。

ぴくり、と。悠希の頬が引き攣った。

『負けられないわよね！』

悠希の叫びと共に、スペーサーが、さらに光の密度を増加させる。

輝きはそのまま甲板に降り積もり、そつと吸い込まれていく。そしてアルトオブリガードの全体に流れていく。

『濃度ジャスト八十二。はは、やってくれたな、月坂。これでいけるぞ』

マリナーが笑った。

直後。

アルトオブリガードは、距離という概念を無視し、アニルの軍勢を越え、マザーの眼前へと転位した。

転位の反動か、艦体が不吉な軋みを上げる。

だが、今は誰もそんなことを気にはしなかった。

『全力で墜とせ！』

マリーナの号令で、アルトオブリガードに備え付けられた砲門が一斉に解放、そこからビームを始めとした、ミサイルや大口径の銃弾などが撃ち出される。

『自壊なんて気にせず撃ちまくれ！』

命令通り、兵器群は砲身の必要冷却時間などを無視して連射された。そのせいで次々に砲門が爆発していく。

だが、その代償を払うだけの価値はあった。

マザーの巨体を、ティアマトの粒子光が、巨大な爆炎が、豪雨のような銃弾が、ありとあらゆる破壊力が襲う。

ぐらりと。

マザーが、傾く。

『離脱！』

マリーナの命令で、再度の転位。

アルトオブリガードが、元いた座標へと帰還した。

視界の果てでは、マザーがぼろぼろと崩れ落ちている。

倒したのだ。

けれど、それを歓喜するより早く――。

『アニルの戦線、次々に崩れていくぞ！』

さらなる朗報が、マリーナの口から吐き出された。

マザーという司令塔を失ったアニルの勢いは急激に衰え、防衛線が勢力を盛り返す。

勢力図が一方向に押し込まれていくのを確認して、悠希は甲板のスロットからスパーサーの腕を引き抜いた。その動きに合わせて、繋がっていたコードがまとめて抜ける。

『私も行くわよ!』

『ああ、好き勝手暴れてこい』

銀色の刃が宇宙に飛び出した。

ARRIVAL

マザーが落ちるのを確認して、ひとまず裕真は安堵した。

『やったか……』

デイズイの脇を、数機のガーディアンが通り過ぎる。

アニルを追撃しているのだろう。

それを見送り、一旦裕真は身体から力を抜く。

ここまでデイズイは単機で最前線に出て、アニルを少しでも攪乱する為にひたすらに戦闘を行っていた。その疲労が、気の緩んだ今、まとめて押し寄せていた。

『にしても、転位する戦艦なんて……どれだけ反則なんだろうな』

一人苦笑して、弛緩した思考を叩き起こす。

『さて……あと一息、か？』

自分で言っておきながら、その言葉に裕真は自信が持てなかった。
本当にあと一息で済めばいいが。

忘れてはならないことがある。

少なくとも、まだ一体は第四形態がいるはずなのだ。

あの時逃がした第四形態の姿を裕真は探した。

広大な戦場で、あっさりと目標が見つけられるわけもない。

『翔け回って見つけろ、ってか』

裕真が呟き、デイズイの機体から銀の粒子を交えた排気熱が放出する。

——その一瞬後。

デイズイの脇を、何かが通り抜けた。

『……な』

それがガーディアンの機体がひしゃげたものと気付いて、裕真は咄嗟にライフルを残骸の飛んできた方向に向ける。

沈黙。

粘りつくような嫌な無音の中、裕真は周囲に注意を巡らせた。

そして――、

『そこか！』

デイズイが銃口を上に向けた。

影が眼前に迫る。

『っ――！』

だがデイズイは引き鉄を絞らない。

その影が、デイズイにぶつかる。

衝撃に揺られながら、デイズイは飛んできた物体を掴んだ。

さきほどと同じように、滅茶苦茶にされたガーディアンが残骸だった。

中のパイロットは、生きていないだろう。

『くそ……っ！』

出来ればこのまま持ち帰ってきちんと弔ってやりたかったが、そんな余裕、今はない。

『悪いな……後で迎えにくるから、それまで待っていてくれ』

そつとガーディアンを宇宙に放す。

ほぼ同時、デイズイの背後を巨大な影が覆った。

『っ……っ！』

振り向きざまに肩のプレートを駆動させる。

背後の影——第四形態が振りおろした鋭い爪を、駆動したプレートが受け止める。が、その表面は深く抉られ、中にしまわれていたライフルが破壊される。

『そつちから来てくれて、探す手間が省けたよ』

デイズイが第四形態を蹴り飛ばす。

そこから、素早くライフル二丁を構え、交互にトリガーを引いた。銀の軌道が次々に第四形態に命中する。しかし、それはその外殻を僅かに溶かしただけ。

『やっぱり、デイズイじゃ火力不足か……』

決してデイズイの火力が低いわけではない。

第四形態が硬すぎるのだ。

『それでも、やらなくちゃないんだから嫌になるよな』

普通に撃つても駄目なら、もっと近くで撃てばいい。もっと脆い個所を撃てばいい。

デイズイが第四形態に肉薄する。

第四形態が大きく開いた顎を振るわせて甲高い叫びを上げながら、多関節の腕を突き出した。

それを紙一重で回避し、デイズイは第四形態に直接触れられるほどの距離まで迫った。

ライフルの銃口が第四形態の足の根元、殻の隙間に差しこまれる。

粒子光が溢れ、そこ風穴が開かれた。

第四形態の絶叫。

咄嗟にデイズイが第四形態から離れる。

次の瞬間、第四形態の爪が、デイズイがいた空間を引き裂いていた。

ほんの少し離脱が遅ければデイズイの装甲はあっさりと引き裂かれていたろう。

そうならなかったのは、一重に裕真の経験と勘の賜物だ。

再度、デイズイは第四形態に接近を試みる。

……が、その動きはすぐに遮られることになった。

複数のアニルが、デイズイと第四形態との間に立ちはだかったのである。

その数はおおよそ五十。

マザーほどではないにしろ、第四形態も指揮能力はある。この五十体は、いわば第四形態直属の部下のようなものか。

『厄介な……』

これでは、いくらディズィでも第四形態に近づくことは出来ない。

例えこの五十体のアニルを始末したところで、この戦場にはまだまだアニルが残っている。倒した端から次が補充されるのは目に見えていた。

第四形態をどうにかして先に倒すか、それとも邪魔なアニルが尽きるまで戦い続けるか。

考える時間を、アニルはくれない。

いくつもの爪や顎がディズィに襲いかかる。

ディズィはそれらを避け、防ぎながら、反撃を繰り返した。

『くっ……』

流石のディズィでも五十体のアニルに一齐に襲いかかれ、さらにそこに第四形態まで加わるとなれば、劣勢にならざるを得ない。

アニルを撃ち落としながらも、徐々にではあるが、確実にディズィは追い詰められていく。

『なにしてるのよ』

届いた声。

裕真には、その声がこれまでになく頼もしく聞こえた。

群がるアニルの一角が切り崩れる。

そこから、銀色の機体……スパーサーが現れた。

『こんな奴ら相手に苦戦だなんて……情けないわね』
『軽く言ってくれるな……まったく』

新たに現れた敵に、アニルは即座に反応した。

無数のアニルがスパーサーに殺到する。

『軽くも言っわ……だって、私なら、このくらいどうにでも出来るもの』

だが、アニルが殺到した先に既にスパーサーは存在しない。

次々にそれらのアニルが、背後に転位したスパーサーのブレードで斬り伏せられていく。

スパーサーに、数の暴力はあまりに無意味だ。

何故なら、どれほどの数を用意したところで、包囲も拘束も、それ

どころか行動の制限さえスパーサーに対しては出来ないのだから。

瞬間転位というのは、それほどに反則的なスキルなのだ。

『全く、羨ましい限りだな……つと！』

デイズイが背後からの一撃を避ける。

その攻撃を仕掛けてきた第四形態にライフルを向けて、デイズイが引き金を絞る。

銀の光弾は、外殻に弾かれる。

裕真は外殻と外殻の隙間を狙ったのだが、その意図を察して第四形態が身体を逸らしたのだ

『これだから……くそっ』

裕真が毒づく。

第四形態とデイズイが攻防を繰り返す横で、スパーサーは第四形態の支配するアニルを次々に切り裂いていた。

だが、敵は尽きない。

『後から後から沸いてきて……！』

鬱陶しそうにブレードでアニルを斬り放って、悠希は脇目にデイズイを確認した。

デイズイと第四形態との戦闘は平行線……いや。少しはデイズイの方が有利、といったところだろうか。

それでも、なにかの切っ掛け一つでデイズイが押し返される可能性もある。

出来ることなら手助けをしたかったが、スパーサーの動きが見切られてしまうのは前回の戦闘で思い知っているし、それ以前に下位アニルの対応で手一杯だった。

応援のひとつもないって、どういうことよ……！

誰かいないかと味方を探すが、運悪く近くで戦闘しているソアレイは見当たらない。

『誰かこっちに寄りなさいよ！』

悠希が通信を開いて、マリナーに怒鳴りつける。

『ん、ああ。安心しろ』

開いた直後に回線は閉じられた。

『安心しろって……どういふことよ?』

マリーナの対応のそっけなさに呆然としながら、悠希は首を傾げる。

しかし、悠希はすぐにその言葉の意味を知ることになる。

『——つまり、じつじつとね!』

FATAL

銀の雷光が、スパーサーの横を過ぎて、複数のアニルを焼き払う。

『…………え？』

悠希が驚いたのはその攻撃ではなく…………聞こえてきた声にだった。

『待たせたな、悠希！』

『綾香！？』

まさか、と自分の目を疑った。

穂先の展開した槍型のビームカノンを構えたランサーが——悠希にとって見間違えようもない、綾香のランサーがそこにはいた。

どうして綾香がこんなところにいるのか。本来ならば病院で安静にしていなければならないというのに。

『な、んで…………？』

『この程度の怪我で大切な戦いを休むほど、私は軟じゃないのさ』

ランサーがビームカノンを再度放つ。

アニルが焼き払われていくのを見ながら、悠希は小さな疑問を抱いた。

ビームカノンの一射目から二射目までの間隔があまりにも短く、それにカノンの威力が桁違いになっている気がする。

『ワークマン博士が気を利かせてくれてな。ガーディアンが壊れたからって、ランサーを短い時間で改良しておいてくれたのさ』

尋ねるよりはやく、綾香は答えた。

『マリーナさんって聞くと、なんでもアリに思えるから不思議だよ』

裕真がいきなり会話に入ってきて、そう零す。

『……同感』

悠希が小さく笑んだ。

そして一転、心配した様子で通信モニター越しに綾香を見る。

『でも綾香。貴方、そんな勝手に動いて——』

『今は勝つことが先決、だろ？ 雑魚は私に任せておけ』

『……そうね』

綾香に自分の言葉が通用しないことを察して、悠希はそれ以上言うのを諦めた。

『なら、早く終わらせましょう』

『おう』

その言葉と同時に、ランサーがビームカノンでアニルを薙ぎ払い、スパーサーが第四形態の背後に転位した。

第四形態はデイズィと攻防を繰り広げながら、突然現れたスパーサーのブレードを受け止めて見せる。

ブレードにひびが入り——そこでスパーサーは素早くそのブレードを放棄すると、腰から新しいブレードを抜き放つ。

刃が第四形態の脇腹、甲殻の間に潜り込み……そのまま深く切り裂く。

第四形態が叫びをあげて、スパーサーとデイズィを振り払おうと暴れた。

だが、デイズィは決して離れなかった。

痛みに混乱する第四形態の脇腹、スパーサーの付けた傷口にライフルを押しあてて、そのまま引き金を引いた。

ゼロ距離で打ちだした粒子弾が、傷口から第四形態の体内に潜り込み、その内部を抉る。

第四形態が激痛に悶えながら、苦し紛れにデイズイのライフルを破壊した。

プレートから新しいライフルを取り出しながら、デイズイは第四形態から距離を取る。

入れ替わるように、スパーサーがブレードを突きของ形で構え、突撃する。

第四形態がそれを迎え撃とうと腕を振り上げたが、その腕の関節部分にデイズイの放った光線が叩き込まれ、抉られる。

その隙に、スパーサーが第四形態の片腕の根元にブレードを突き立てる。

確かな手ごたえ。

一際強く、第四形態が啼いた。

『これで………！』

スパーサーはブレードを握る手に更に力を込める。

……それが、選択ミスだった。

『馬鹿、退け！』

突き刺さったブレードを切り上げて腕を切断しようとしたが、スパーサーが握るブレードはびくともしない。

第四形態の肉体が、その刃を固く締めつけていた。

第四形態のもう片方の腕が横薙ぎに、スパーサーに振るわれる。

転位する間もない。

悠希が来たる衝撃に、思わず硬く目を瞑った。

……けれど、衝撃はいつまでたっても訪れない。

そつと悠希が瞼を開けると、飛び込んできたのはディズイの背部。
なにが起きたのか。

『——っ！』

ワンテンポ遅れて、理解した。

悠希が息を呑む。

デイズイの左肩に、第四形態の腕が突き刺さっていた。

一目でデイズイの左腕の機能が破壊されたと分かった。

デイズイは、スパーサーを庇ったのだ。

『直衛！』

『俺なんかより、敵を見る！』

デイズイは右手に持ったライフルで、左腕に突き刺さった第四形態の腕の関節を連射を加えた。

デイズイの左肩を貫いていた腕が、千切れる。

その間、スパーサーはもう片方の腕の根元に突き刺したブレードを全力で捻じ込み……それを削ぎ落とす。

第四形態の両腕が失われた。

絶叫しながら……それでも第四形態の複眼は敗北を認めてなどいない。

『あと少し……畳みかけるぞ』

『畳みかけるぞって言っても、あんたそんな機体で……』

『舐めるな。このくらいどうってことない』

言っや、ディズィが飛び出す。

反応した第四形態が、唯一その身に残された武器である牙を剥き、ディズィへ飛び出し、噛みつくこうとする。

だが、それをスパーサーは許さない。

転位で第四形態の目の前にスパーサーが移動する。

速度を出していた第四形態が急に止まれる筈もなく、スパーサーと激突。その牙は、銀のブレードに受け止められていた。そのまま、さらにディズィへとぶつかる。

『今よ！』

『言われなくても！』

絡み合うように宙を飛びながら、一発、二発と甲殻の間を縫うようにディズィの放つ銀色の弾道が第四形態を貫く。

第四形態もおとなしくはしていないかった。

軋み……ひびわれ、スパーサーのブレードが第四形態に噛み砕かれた。

『直衛っ……！』

『任せろ！』

もはや阻むものなどない。叫び声と共に第四形態が大きく顎を開き、その口内にびっしりと並んだ牙をデイズィへと突きたてようとする。

だが……先にデイズィが動いていた。

『終わりだ！』

大きく開かれた口の中に、ライフルの銃口が突き入れられる。

叫びが鈍った。

ライフルの引き鉄が引かれる。

第四形態の後頭部から銀色の光が抜け、破壊されたその巨体が痙攣した。

静寂が生まれる。

BRAVE

『やつ、た……？』

『これで終わりじゃなかったら俺は泣くぞ』

そんな言葉が悠希と裕真の口から出る。

デイズィとスパーサーが、ゆっくりとその死骸から離れた。

『……大丈夫？』

ようやく落ち着ける状態になって、改めて悠希は尋ねた。

『ん、ああ……まあ、動力系統はかなり壊れてるけどな』

スパーサーが半壊したデイズィを掴む。

第四形態の死骸が遠ざかっていくのを見送りながら、悠希と裕真は深い、どこまでも深い溜息を吐き出した。

『やったな……』

『ええ』

まだ全てのアニルを掃討したわけではなかったが、二人にはもうあとの戦闘に参加する気力は残っていなかった。ディズィに限って言えば、まず物理的に戦闘の続行は不可能になっている。

二機の横にランサーがついた。気付けば、他のアニルの姿はすっかり消えていた。どうやら綺麗に始末されたらしい。

『流石だな、お前らは』

『綾香もね』

綾香の称賛に、悠希はそう言い返し、裕真は肩をすくめた。

『人を褒める余裕があるなら、他の応援にでも行ったらどうだ？』
『そりゃ御免だ』

ふと、悠希はその綾香の言葉が僅かに震えていることに気付いた。

『綾香？』

『あー。実は、頭の傷が開いて血がどばどばと――』

通信モニターの中の綾香の顔が、流れ出す血で真っ赤になっていた。

『今すぐ病院に帰れ！　っていつか嫌でも引っぱってくー！』

慌ててスパーサーがダイズイを掴む手と逆の手でランサーを掴む。

『分かった分かった。自分で帰れるから』

『病院を抜け出してきた人間の言うことなんて信用できるわけないでしょうが！』

そう言つて、スパーサーが二機を引つ張っていく。

だが、そのまま天都に帰ることは、出来なかった。

『悪い知らせだ』

マリーナからの通信が開く。

『どうしたんですか？』

『とりあえず、これを見てくれ』

マザーの死骸が、三人の視界に映し出された。

『これが……どうかしましたか？』

『分からないか？』

『そう言われても、特に何も……』

不意に――。

マザーの背中から、何かが飛び出した。

『あれ、は……』

映像が拡大される。

そして、その正体が裕真達に伝わった。

『第四形態……！？』

『そうだ』

それも、一匹ではない。

次から次に……九匹もの第四形態が、マザーの死骸から飛び出していた。

『……まずいことになった』

『まずいなんてもんじゃないでしょう！』
『そうだな』

焦燥した裕真に、無感情にマリナーが同意する。

マリナーの平坦な声が、よりはっきりとことの緊迫を証明していた。

『そんな……一匹でもあれだけ苦労したのに……まして九匹なんてそれに、デイズイは使えないのよ！？』

『これらは現在、戦場を横切りながら下位のアニルを支配下に置いて、お前達に向かっている』

悠希の悲鳴じみた訴えを無視して、マリナーが説明を続ける。

『なんで私達に……』

『仲間の仇討ちのつもりだろうさ』

綾香の問いに、裕真が答える。

『だろうな……本当に、まずい』

完全に参ったようにマリナーが煙草を噛みちぎる。

『……月坂』

『——無理よ』

なにを言われるか、それに感づいた悠希は小さく首を振った。

『だがやつてもらわなくちゃならん』

なんて悪夢だ。

悠希は、今すぐに自分が夢から覚めて、いつものベッドで目を覚ますことを願った。

けれど、これは紛れもない現実なのだ。

『いくらガーディアンでも、第四形態の動きには追いつけない。第四形態に対応出来るのは、今やスパーサーのみだ』

これが何かの、例えば神様なんて呼ばれる存在に与えられた試練だと言うのであれば、自分はきっと神から見放されているのだろう。

悠希は視界が暗転しそうになるのを、どうにか堪えた。

『あんなの、やられに行くようなものじゃない!』
『だがやってもらわなければ困る』

でなければ天都は終わる。

言外にマリーナがそう告げた気がした。

『……』

悠希は言葉を返すことが出来ない。

彼女だって、天都を守ると、そう決意している。

けれど、だからといって自ら死に行くような真似を平然と出来るかと訊かれれば、当り前のように否だ。

悠希の決意は決して軽くも脆くもない。しかしそれでも砕けてしまいそうになるほどに、状況は最悪のものになっている。

『悠希……』

綾香は、何を彼女に言っただけがいいのか、分からなかった。

何も言わないでほしいと、悠希は願う。

綾香に言われたら、きつと自分は後戻り出来ないから、と。

悠希がそのまま自分の殻に閉じこもってしまいそうになった、その時。

がん、と。

スパーサーのコックピットに、微かにそんな音が響いた。

がん、がん、がん。

音は何度も続いた。

ようやく、悠希はそれがコックピットが外から何かに叩かれている音だと気付いた。

『な……っ』

確認して……悠希は目を見開いた。

ディスプレイから抜け出した裕真が、スパーサーに張り付いて、その拳を装甲に叩きつけていたのだ。

『なにしてるのよ!』

慌ててスパーサーのコックピットを開く。

と同時に、飛び込んできた裕真が、悠希に詰め寄った。

『やれる、やれない。じゃない』

真っ直ぐに見詰め、悠希の肩を裕真の手が掴む。

『やるか、やらないか。それだけだ』

二人の視線が交錯する。

『やらないなら、お前は下りろ。俺がやる……。もっとも、他人の機体でどこまでやれるかは分からないけどな』

裕真自身、そんな真似をしても第四形態に勝てないことは分かっていた。

だが、それでも最後まで戦う。

彼の瞳にはそれだけの意思の強さがあった。

『どうして……。そこまで』

どこからそれだけの勇気が出てくるのか、悠希には分からない。

『どうして、か。別に大層な理由なんていらないだろう？』

『え……？』

『ここで諦めたら、どれほどの人間が絶望するか。それを考えれば、自然と身体は動くものさ』

言われ、悠希は考えた。

天都がアニルに襲われる、その瞬間を。

外装を破壊し、天都の内部にアニルが侵入する。侵入したアニルはそこに住む人々を襲いながら、天都の機能を破壊していくだろう。そうなれば……天都は、地球の重量に引かれて大気圏に墜ちていくだけの、ただの鉄塊と化す。

従姉妹の雪の姿が脳裏をよぎる。

距離感を測りかねて、いつも無愛想にする悠希に、雪はどうか歩み寄ろうと、いつも笑顔を向けてくれた。

叔母の桜の姿が脳裏をよぎる。

両親を失って行き場のない自分のことを引き取って、優しくしてくれて、ここまで育ててくれた彼女は、悠希にとっては第二の母と呼ぶべき存在になっていた。

それ以外にも、沢山の人々の……例えば、街角で見かける仲睦まじくしている家族や恋人達の姿が、次々に脳裏によぎっていく。

もしここで諦めたら、そんな人々が絶望することになるのだろう。

アニルに蹂躪されて、自分の両親のように無残な死を迎えるのか。

嫌だ。

悠希は、激しい嫌悪感を覚えた。

そんなことをしようとしているアニルに。

なにより、ここで諦めかけていた自分に。

『……最後に一回だけ聞くぞ。やるか？』

裕真の問いかけに……悠希は小さく息を吸った、

そして、頷く。

『——ええ』

スパーサーのコックピットが閉じる。

裕真はまだ外に出ていない。

『おいおい、俺はまだ出てないぞ?』

『いいじゃない。最後まで付き合つてよ。ここまで散々私のこと引っかかり回してくれたんだから』

『いや、それは……、ったく。まあ、仕方ないか』

反論を諦め、裕真が肩を落とす。

『ん……』

悠希がなにかを裕真に差し出した。

スパーサーとのシンクロに使うプラグの予備だ。

『はいはい』

素直にそれを受け取って、裕真は自分のアクティヴスーツの手首にそれを差し込む。

裕真の視界がスパーサーと同期した。

あくまでも視覚情報だけの同期で、それ以外で裕真はスパーサーに干渉出来ないが。

『ちゃんと見てなさいよ、最後まで』

『ああ。精々頑張れよ』

『……うん』

狭いコックピット内。

人間が二人も入れればかなり密着することになる。

裕真の体温をすぐそばに感じながら、悠希は宙を見上げた。

機械によって補正されたその視界は、遙か彼方の第四形態とそれが付き従えるアニルの群れを確認する。

スパーサーから、銀色の粒子が溢れだす。

『おい、悠希』

飛び出そうとした悠希に、綾香が声をかけた。

『あ、そうだ。綾香、ちゃんと病院に戻りなさいよ？』

『分かったってば。それより、ほら』

ランサーが槍をスパーサーに渡す。

『雑魚はこれで始末した方が速いだろ』

『……ありがとう』

『気にするな。お前が無事に帰ってきてくれれば十分さ』

悠希は大きな不安を押し殺して、自信満々に頷いて見せた。

『分かった』

『じゃ、行つて来い』

綾香の見送りを受けて、スパーサーの機体からティアマト・エネルギーが放出される。

まるで巨大な翼が広がるように、光は強烈に、巨大に膨れ上がった。

明らかに、普通の稼働ではない。

『これって……』

コックピット内にまで溢れかえる銀色の熱に、悠希も裕真も驚いた。

普段とは全くの異質。

だが、僅かたりとも不快ではない。

安心感が、どこからともなく沸いて、二人のことを包み込んだ。

『これは、俺の……？』

ふと、裕真がそれに気付く。

感じた異質の中にちらつくもの。

それは——裕真のスキルだった。

NOTMIRACLE

「濃度……九十七、だと……？」

信じられない数値を目の当たりにして、マリーナは啜っていた煙草を落とした。

「しかも、スキルの同時発動……馬鹿な。そんな前例は……いや」

落ちた煙草を拾って、マリーナは小さく笑んだ。

「流石の私でも、奇跡の説明までは出来ない、か」

だが敢えて言うのであれば。

「人の想い、とでも言うかね……」

+

『いけるんじゃない？』

『ああ……そうだな』

二人は、顔を見合わせて頷きあった。

その口元には、揃って笑みが浮かぶ。

『行くぞ』

『ええ』

そして、スパーサーは飛び出した。

飛来した第四形態、その脇を一瞬で通り過ぎて、スパーサーはビームカノンを瞬時に展開し、粒子砲を撃ちだした。

第四形態の背後に付き従っていたアニルの多くが雷光に飲みこまれ、蒸発した。

だが、そこで終わりではない。

裕真のスキルは時間の引き延ばし。つまり、外界から見た加速だ。

それはこの場合、ビーム兵器の冷却時間やチャージが通常空間のおよそ三倍の早さで完了するということでもある。

ビームカノンは、すぐに次射が放たれた。

下位のアニルが次々に蒸発する中、第四形態は軽々とビームカノンの放射を回避する。

九匹の第四形態。その内の一匹の背後に、スパーサーが転位する。

第四形態がそれに反応するより圧倒的に速く、スパーサーの槍がその体突き刺した。

いくら硬い外殻があろうとも、目で見えぬ程の速度で突き出された槍はそれを貫通してみせる。

スパーサーは、第四形態を貫いたままの槍を背後に向け、槍の先端を展開させると、ビームカノンを放つ。

スパーサーの背後に迫っていた二匹の第四形態が身体を半分以上吹き飛ばされて絶命した。

横からの攻撃を察知して、スパーサーは槍を一旦手放すと機体を翻した。銀の装甲を第四形態の腕が掠めていった。

転位で腕を振るった第四形態の背後に現れ、スパーサーはブレードを抜き放つ。

銀の閃光が、外殻ごと第四形態の首を切断した。

普通ならば通用しない斬撃も、三倍に加速された今ならばその勢いを刃にのせることで第四形態を切り裂くことを可能とする。

『まったく、反則よね、このスキル……』

『無駄口を叩いている暇があるのか。後ろだ』

裕真の指示に、スパーサーはブレードを振り向き様に投擲した。

神速で撃ち出されたブレードが、背後の第四形態の胸に突き刺さる。が、浅い。致命傷ではない。

その第四形態の前にスパーサーが転位、ブレードの柄尻に掌を叩き込む。衝撃で、ブレードが根元まで第四形態に埋まった。

これで五匹始末した。

スパーサーが肘を引く。

肘から伸びるブレードが、背後で腕を振り上げていた第四形態の顔面を貫いた。

六匹目。

異常な殲滅速度。

残りの第四形態が僅かに怯むが、しかしすぐにスパーサーに飛びかかって来る。

左手でブレードを抜いて、スパーサーはそれを掲げて第四形態の攻撃を弾いていく。

だがブレードは続けざまに与えられる衝撃に強度が足りず、すぐに刀身が真ん中から圧し折れてしまう。そのまま第四形態の爪がスパーサーの左肘を砕いた。

『っ……！』

スパーサーが右腕を振り上げて、その第四形態の複眼に尖った指を突き入れた。第四形態の叫び声があがる。

そのまま指を引っかけて、スパーサーは第四形態の頭を引いた。合わせて膝を振り上げる。

膝のブレードが第四形態の頭部を縦に裂いた。

その第四形態の死骸を支点にするように、スパーサーが大きく回転した。

残った二匹の第四形態が挟み打つようにスパーサーに攻撃を仕掛けたものの、それは支点にされた死骸の臓腑を抉るだけ。

その片方の第四形態の肩口から反対側の足の付け根まで、スパーサーの脚部ブレードが引き裂いた。

『あと一匹……っ！』

不意に第四形態の腕が振るわれ、左脚がもがれる。

すぐさまスパーサーは体勢を直す。

そこに最後の第四形態が猛攻を仕掛けてきた。

上、下、左、右。縦横無尽に振るわれる腕を、スパーサーは転位を駆使して回避する。

『っ、こいつ……』

『自棄になってるな』

攻撃する隙がない。

悠希は一旦第四形態から距離を大きく取る。

『……まったく、面倒だな』

『戦ってるのは私でしようが。なに言ってるのよ』

『ちゃんと力を貸してやってるだろう？』

『む……』

確かに、この戦闘はかなりの部分で裕真のスキルに助けられていた。

『まあ、感謝はしてるわよ。天都の為にここまでしてくれて』

『天都とかエデンとか、そういう区切りはいいよ。同じ人間だろうに』

『……そっか』

ひどくさっぱりした裕真の言葉に、悠希は自分の口元が緩むのを

感じた。

同じ人間だから助ける。

——いいなあ、そういうの。

なんとなく、羨ましくなった。

自分も、そんな風に出来るだろうか。

きっとそれは、かつこいいことだ。

『ん……どうかしたか？』

『あ……うつん、なんでもない！』

慌てて顔を背けた。

『……まあいい。それより——いけるよな？』
『当然！』

スパーサーが右腕を伸ばす。

その先には、第四形態の死骸。

——そしてその胴に突き刺さる、一本の槍。

槍が引き抜かれる。

流れるような動作で、スパーサーは一直線に迫る第四形態に槍を向けた。

それに気付いた第四形態が咄嗟に動きを止めるものの……手遅れ。

丁度、槍の先が第四形態の鼻先に添えられる形になる。

……どちらも、動かない。

奇妙な静寂。

まるで助けを請うような第四形態の複眼を、悠希と裕真は拒絶した。

『先にテメエらが仕掛けてきたんだ』

『文句なら、自分自身に言いなさい』

槍の先端が展開される。

もはや助からない。

そう悟った第四形態は、最後に悲鳴を上げ――。

銀の奔流が、その叫びごと第四形態を呑みこんだ。

A I R E A R T H

気付けば、見覚えのない白い天井。

はつきりとしないう意識の中、裕真は身体を起こそうとして、激しい頭痛に襲われた。

「っ、あ……！」

視界が霞むほどの痛みに顔面を抑え、指と指の隙間から周囲を見回す。

すぐに、そこが病院であるのは察しがついた。

「……は……どうして俺は……」

しかし、自分が何故病院のベッドに寝ているのか、記憶が繋がらない。

「ん……気付いたか、裕真」

マリーナが病室に入ってきて来た。

「マリーナさん……」

「なにがなんだか分からない、って顔だな」

椅子に腰をおろして、マリーナは煙草を一ダース、裕真に押し付ける。

「……なんですか、これ？」

「そんなの、お見舞いの品に決まっているだろう。……なんだその顔は」

「いえ……なんでもありません」

マリーナのお見舞いの品は煙草が標準なのだろうか。

呆れかえって、裕真はそれを指摘する気すらなかった。

煙草を嗜む趣味はないので、彼は黙ってそれを脇のテーブルに置く。

「……オマエ、スパーサーが第四形態を全部始末したのと同時に気絶したんだよ」

マリーナがそう切り出した。

言われて、裕真はすぐにあの戦いの、終結の瞬間へと記憶を遡らせた。

第四形態の最後の一匹がビームカノンで吹き飛ぶ光景が脳裏にはつきりと焼きついている。

「気絶、ですか……？」

「ああ」

「どうして……」

「おおよその予測はつく」

マリーナは煙草を取り出そうとして、しかし流石に病院でそれはまずいと思ったのか。すぐに煙草をしまい直す。

代わりにシガレットチョコを取り出して啜え、マリーナは答えた。

「あくまで確証はないから、話半分に聞いておけ。あの時のスぺーサーの状態は異常だった。ティアマト・エネルギー濃度も九十七なんてデタラメな数字を弾き出したし、スキルの重複発動なんてイレギュラーまで発生させた。それは多分、オマエと月坂の相性が抜群によかったからだとか、そういうことなんだろう」

「俺とあいつが？」

言われてもとてもじゃないが信じられないことだった。

裕真としては、悠希は手のかかる子供のようなものだ。ようやく

少しは大人になったようだが、それでも認識に大きな違いはない。

「そう毛嫌いするな」

「別に嫌ってるわけじゃないですけどね」

むしろ、好感度で言えば裕真は悠希のことをそれなりに好ましく思っていた。

悠希の守りたいという意味は、とても高潔で大切なものだということはよく分かっていた。

それだけじゃなく、彼女の自分の感情に素直なところ——言い方は悪いが、愚直なところも嫌いではない。

「ま、それはともかく話を続けるぞ。二人の相性がいいってところまでは話したな？」

裕真が頷く。

「相性と言っても、スキルが同じ次元干渉系だからか、性格の問題か、遺伝子に特殊な因果関係でもあるのか、そこは不明だが……とにかくその相性が適合したお陰で、オマエと月坂は同時にスキルを発動させられたのではないか、とアタシは考えている」

「でも、だからってどうして俺が気絶しなくちゃいけないんですか。それに、酷い頭痛もしますし……」

「頭痛？ 初耳だな……ふむ」

少しの間、マリーナが一人考え込む。

「マリーナさん？」

「……ああ。悪い、話の途中だったな」

マリーナが顔を上げた。

「しかしその頭痛というのも含めて、この仮定は成り立つな」

どうやら考えていたのは、裕真の頭痛がどんなものかについてらしい。

「どういうことなんですか？」

「あの時、スキル保有者は二人いた。だが、当然スパーサーを操縦していたのは月坂であり、あらゆる主体が月坂になるわけだが……ここでオマエ、スキルを発動する為に、まず月坂に自分を合わせたんじゃないか？ 波長を合わせるとか、そんなイメージで」

「俺が月坂に……って、そんなこと」

「最後まで聞け。オマエと月坂は別の人間で、あらゆる面で別物だ。それを合わせるのだから、当然無茶が出る。その無茶を無理矢理に行ったツケが、気絶を始めとしたオマエの状態なんじゃないか？ ま、今少しだけお前と話したことから推察するに、十中八九オマエ

はそれを無意識でやってたんだろうが」

どうしてか、なるほど、と納得する自分が自分の中にいることに裕真は気付く。

けれど、やはり実感はまるでわかなかった。

「けど、ありえるんですか。そんなことが」

「わからん。どれもこれも、今のところはアタシの推測……妄想だ」

「妄想って……そんなにべもない言い方……」

「証拠のない論なんて妄想に他ならないだろうに」

シガレットチョコを唇で上下に振って、マリーナはふとドアの方を見た。

「来客のようだな」

ドアが開いた。

裕真がそちらを見ると、病室の入り口に制服姿の悠希が立っていた。

「……起きたんだ？」

「まあな……っていうか、俺ってどんくらい気絶してたんだ？」

ふと気になって尋ねると、マリナーが横から端末を差しだしてきた。そのモニターには日付が表示されている。

「……………は？」

裕真は自分の目を疑った。

「えっと……………おかしくないですか。三日、経ってますよ？」

日付は、裕真が最後に見た時の数字から三日経過したものに変わっていた。

「ああ、だろうな」

それはつまり……………。

「俺……………三日も気絶してたのか……………」

そんなに長い間意識を失っていたとは考えておらず、裕真はひどく驚いた。

そして、とあることに気付く。

「あれ。でも、それじゃあ俺達はもうとっくにエデンに帰る筈じゃ……」

天都への滞在は一週間の筈。

あれから三日経ったというなら、とうにその期限は過ぎていた。

「アルトオブリガードがあの状態で無事にエデンまでいけると思っ
か？」

「……あ」

戦闘によるアルトオブリガードの損傷は酷いものだった。

兵装類は無茶な使用でほとんどが自壊してしまったし、動力系は
スパーサーとの直結で大分無理をさせたために機能の多くが低下し
ている。

「アルトオブリガードへの応急処置が終わるまで……あともう一週
間は天都での生活だよ」

「そうですか……」

「早く帰ればいいのに」

ふと、悠希が呟く。

マリーナの口元が歪んだ。

「また心にもないことを。裕真が気絶した時は泣きそうな声で助けを呼んでいた癖に」

「なんのことかしらっ！　へんな嘘言わないでくれる!？」

途端、顔を赤くして、悠希は勢いよくサイドテーブルにお見舞いの品らしきものを置いた。もちろんそれは煙草などではなく、クッキーか何かの入った缶のようだ。

中身、砕けてなければいいんだけどなあ。

裕真は呑気にそんなことを考える。

「安心しろ。そう言い逃れ出来ないようにあの時の音声データはきちんと録音して——」

「うっさいわね！　なにそんな無駄なことしてんのよ！　それより仕事しなさいよ、仕事を！」

「仕事と言われても……教員はもう辞めたし、エデン方面でも交渉は万事順調に終了したからなあ……なにをしろと？」

「知らないわよ！」

その言い争いの中で出た発言に、裕真が疑問を口にした。

「あれ、教員辞めたんですか？」

「ああ。お前ももう学園の生徒じゃなくなったからな」

「……そうですか」

別れの挨拶もクラスメイトには出来なかった。

そのことに少しだけ後味の悪さを感じる。

「ま、しばらくは滞在するわけだから、別れの挨拶くらいは出来るさ」

「あ……そういや、そうでしたね」

「お。なんか集まってるな」

そこに、新たな人物が病室に入ってきた。

松葉杖をついた綾香だ。

「ちょ、綾香！　なにしてんのよ！」

悠希が慌てて綾香に駆け寄る。

「なにつて、お見舞い？」

「綾香も怪我人だから！ 人の見舞いの前に安静にしてくださいよ！」
「そうはいかないだろう。悠希のパートナーの見舞いくらい姉貴分としては――」

「誰がパートナーよ」

「え……？」

大げさに驚いた様子で、綾香が悠希と裕真を交互に見やった。

「気絶した直衛抱いて泣きそうな声で悠希が助けを求めてたって聞いたから、私はついてつきり……」

「その馬鹿博士の入れ知恵か！」

「なんのことかな。私は天才だ」

二本目のシガレットチョコを咥え、マリーナは明後日の方向に視線を向けていた。

「いや、私は嬉しいよ。悠希もいろいろ成長してるんだな」

嬉しそうに綾香が悠希の頭を撫でる。

悠希はその手をすぐに振り払い、頬を引き攣らせる。

「絶対になにか勘違いしてるわよね？」

「よかったじゃないか、裕真。姉貴分とやら公認だぞ」

「なにがですか……」

裕真は溜息をついて、騒ぐ三人に向かって言った。

「ていうか、ここ病院なんだから少しは静かにしないと――」

看護婦が部屋に入ってきて静かにしなさいと怒声をあげたのは、裕真の言葉が終わる直前のことだった。

「注意が遅い」

「手遅れじゃない」

「とろい奴だな」

「なんで俺が責められるんだ？」

一層深い溜息を、裕真が零す。

「天都に来てから、ろくなことがない……」

まあ、来てよかったとは思っけれど。

その一言は、決して裕真の口から出ることはない。

——ねえ、直衛。

小さく、悠希が裕真に囁く。

——なんだ？

——ありがとう。

すると彼は惚けたように……。

——なんの礼だ、そりゃ。

そんな裕真に、悠希はそっと微笑んだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9368r/>

SOAREYE

2011年3月26日17時04分発行